
~ とことん引っ掻き回しに来た ~

鳴る神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜とことん引つ掻き回しに来た〜

【Nコード】

N9249I

【作者名】

鳴る神

【あらすじ】

とあるオタクの物語。

買い物帰りにイタ車に跳ねられ邪神の元へ！？

そして飛ばされる「ネギま！」の世界！

原作レイプ？アンチ？

上等上等！！

本作は原作の大分前から始まります。

注意1。 何分初心者なので、中身がコロコロ変わったり、誤字脱字があつたりするかもしれません。

注意2。

テンプレが入っています。キャラ崩壊が起きています。 作者はド素人です。それでもいいならどうぞ。

ぶろろーぐ（前書き）

初投稿 & a m p ; 処女作です。

皆さんの小説に触発されて一念発起で書きあげました。

何分初心者なので色々拙いところがありますが寛大な心で見守ってくださいと嬉しいです。

よろしくお願いたします

PS.

俺はエヴァが好きだ――っ！――っ！！！！！！！！

ぶろろーぐ

死んださ。

ええ死にましたよ。

漫画買いに行ったら跳ねられましたよ。

「イタ車に。」

………

………

…

ハア！？何でイタ車！？普通トラックに跳ねられそうな子供とか助けて死ぬとかあるけど…（まあ、俺は助けんが）

『おい。』

あれだよ？

漫画買ってw k t kしながら帰ってたら後ろからだよ？

『おいって。』

飛んださ、漫画と一緒に見事に。

羽ばたいたさ、大空に。

走馬灯？見ましたよ。

でもさ、走馬灯の七割漫画・アニメ・ゲームや小説とかってどうな

のよ？

『おいつてば！』

好きだけどさ？俺の18年そんだけ！？

やっぱ女っ気がないからなのか？しかしあれだよなやつ『おい！！』

「さっきからウッセエ！！逃避ぐらいさせろや！！」

そう、さっきから目の前に180cm位の全身真っ黒な男が浮いている。

顔は欧州系で彫りが深くてカッコいい（美形は死ね！！）死んだらこの360度何も無いとこに来て内心パニックってたら話しかけてきたのでシカトしてた。

『チツ、シカトすんなよな』

「じゃあ、此処何処？あんた誰？」

『切り替え早いな、オイ、まあ答えるとな此処は地獄の一步手前で、俺様は邪神口キ様だ！！』

「はいはい乙。」

『うわ、信じてねえし。』

「だって…ねえ？邪神様が極々平凡な学生に何の用よ？」

『まあ、誰でも良かったんだがお前が来たのはランダムだよ、ラン

ダム。』

「あそ、でなによ?」

『異世界行つてオリ主してこい。』

……

……

…

What?

『いやゝ神つて暇でさゝ、んでお前には俺様の暇潰しに異世界行つてきて欲しいわけなんだよ。』

ゑwww

『何?嫌なんか?じゃあ他の奴にで「シャツツアアアア!!!!」も』

「マジか、マジなのか、マジですか三段活用！！行く行く絶対行く行く！！」

やば、うれし有り難う！！イタ車！！跳ねたの許してやんよ！

『いやゝ適当に死んだやつ之魂連れて来たけど喜んでるし当たり前なコリヤ。』

俺ってラッキボーイ？

『あー喜んで貰えてなにより、で、だ。』

「？」

『まあ、俺様は平凡なオリ主なんて求めちゃいねえ。やるならちゃんと引つ掻き回して欲しい訳よ。俺様が退屈しないようにな。原作レイプ？アンチ？上等等楽しけりゃいいんだよ。ってことで異世界行つて引つ掻き回してこいや。』

「おいおい普通、『世界を救え！』とかじゃねえのかよ…だがそこがイイ！そこに痺れる、憧れるう！！」

『照れんだろうが…ノノオホン、てなわけでお前には「ネギま！」の世界に行つて貰いたいんだが、いいよな。』

「！！！！？」

な…んだと…

オリ主というオタク垂涎物になれるだけでなく「ネギま！」だと…

エヴァ好きの俺にはたまらん！！いいよな～エヴァ、悪って所がまたイイ。

逆にネギは嫌いなんだよな～ウザいねアレ。

「是非ともお願いします！！神様ロキ様邪神様！！」

『よっしゃ、オリ主つつたら特殊技能がいるだろ、ホレ何がいい？
叶えてやるよ。』

やば、

ロキさんやべえ心の広さが半端ねえ。

俺信者になろっかな…

能力ね能力…、まずエヴァとお揃いがいいから真祖がいいな真祖、
後はデバイス欲しいし…無限の剣製は鉄板だろ。

………

………

…

よし！決まった！

「じゃあまず吸血鬼の真祖にして下さい、あ、年齢は18歳ぐら
いで。後副作用無しで無限の剣製お願いします」

『真祖に無限の剣製ねつと！』

そう呟いた瞬間自分の体がひかり体から力が沸き上がってきた。

ふおおおおッッ！！？

「みなぎってきたーっ！！！！」

『サービスで魔力はエヴァの10倍位にしてやったぜ、代わりに向こうに行ったら顔とかかわるかもな。』

「やべえロキさんイカすう！！」

『こんだけでいいのか？後一つ位なら叶えてやるぜ？』

！？後一つか…っ！か今でも充分チートだしな…

……………！！これだ！

「じゃあサ○ヤ人みたいに鍛えたら鍛えただけ強くなり死の淵から舞い戻ると飛躍的に強くなるっのでお願いします。あ、尻尾は無しで」

『りょーかいつとー！』

また体が光りだす。

！！、さっきとは違う力がみなぎってきたぜ…よしきた！これで勝つる！！

『よっしゃ、じゃあ行ってみつか。』

「そうですね。あっ、いつ頃に送られるんですか？」これは聞いとかなとな

『んー修行とかあるしな〜どうしよっかな〜。』

!!、原作前にエヴァに合うチャンス!!

「あっあの!」

『んー?』

「原作前にエヴァに会いたいんですけど…。ダメですか?」

『んーいいぞー。』

「ありがとうございます!!」

『よっしゃ!んじゃまあ、行ってみましようか!』

いよいよか、なんかwktkしてきたぜ!

『そいじゃま、俺様を楽しませてくれよ!!』

ぱちりと指を鳴らすと段々眠く…なつて…い…く…

ぶろろーぐ（後書き）

どうでしたか？

感想お待ちします。

主人公設定（前書き）

設定です。

もしかしたら増えるかも

主人公設定

名前

蒼埜あおの 十夜とみや

年齢 18歳

身長 184 cm 体重 72 kg

目の色は黒 ↓ 碧眼

髪の毛は黒 ↓ 黒に近い蒼。長さは襟足は肩にかかる位で他は短く、髪を逆立てている。

顔は意外とイケてる、が、本人は自覚無し。二枚目だが態度のせいで三枚目になっている、真面目な顔は文句無しでイケメン。

体つきはなかなかよくボクサーのように絞りこまれている（体脂肪率2%程）

生粋のオタクで走馬灯の内容が漫画等だったほど。

漫画やアニメの影響で格闘技を初めてマイナーな格闘技等を習得済み、只今その技を昇華させ自分だけの流派を作ろうとしている。

性格

自称アウトドア思考のインドア派。

身内には甘い、

女性には大体優しい

初対面は大体猫を被っている。

気づいたらはっちゃけている。

興味の無いやつは目に入らない。

尊敬すべき人や敬うべき人には礼儀正しい。

偽善的な人物が嫌いしかし偽善を貫き通すことができるなら別

基本ニート、働いたら負けと思ってる、しかし自分の興味の対象や好きなものに対しては別。

好きな言葉

天衣無縫、天上天下唯我独尊、即断即決。

座右の銘

やられる前にやれ、目には歯を歯には死を、

パラメーター（F a t e 風）

【筋力】 E X 【魔力】 E X

【魔力】 E X 【幸運】 E

【耐久】 E X 【敏捷】 E X

【宝具】 E X

【保有スキル】

気：E X

体内にある魔力とは別の生命の力。

肉体強化等幅広い応用性を持つ。

舞空術：B

気の応用により空を飛ぶことができる。

気配察知：E X

気の応用により相手の気を感じ取り場所を察知することができる。

相手が気配遮断を持っているとランクダウン

気配遮断：E X

気の応用により自らの気を抑え気配を察知しにくくさせる。

ただし、攻撃時にはランクダウン。

テンション：E↗E X

その場のノリにより力が変動する。

基本ランクはC〜B。

神性：A

邪神の加護。

恐らく地上でもっとも強い加護である。

ただし、神聖な場所で能力がダウン。

【宝具】

真祖の肉体：A+

吸血鬼の真祖の肉体。

莫大な魔力を宿し不老不死となるが、その分弱点も多い。

しかし、弱点は年月によって解消することができる。

血を吸わなくても活動可能であるが吸った場合はランクアップ。

超戦士の魂：EX

邪神により与えられた力。

超戦士のような莫大な気を得、気の細かな操作を可能にすることができるようになる。

また、強敵と闘ったり、死の淵から復活すると急激に力を増すことができる。

真祖の体と合わさり、より強力になっている。

無限の剣製：アンリミテッドブレイドワークスE〜EX

「投影」（イメージを元に、魔力で一時的に物体を作り出す魔術）が可能になる。

さらに「投影」固有結界「無限の剣製」は複製された無数の剣が、アンリミテッドブレイドワークスさながら墓標のように大地に突き立つ剣の丘の心象世界。

内部はあらゆる剣を構成する要素で満ちており、目にした剣を瞬時

に読み取り複製、結界内に記憶する。

ただし複製品はオリジナルよりランクが一つ落ちる。

「・・・視認した剣の構成や本質を捉え、複製し貯蔵する・・・」という能力を持つ。

投影が可能になり、物体の構造把握や結界の存在に敏感になるが、それらは全て、そこから漏れ出た副産物に過ぎない。

特に投影に関しては、固有結界内から引き出しているため、通常の魔術師の用いる投影とは厳密に言って全く異なるものである。

ただし、投影できるのは武器、それも剣に限られ、近代兵器や機械は外見だけで中身が伴わない。

鎧や盾など防具などに関しては瞬間的な効果で代償も大きい。

無数の剣を生み出して体の内部から術者を串刺しにし、命を奪うこともあるが邪神によってそれは抑えられている。

主人公設定（後書き）

テスト期間中に執筆中

邂逅編第一話：オリ主、大地に立つ！（前書き）

一話目投下

作者はテスト期間中ですが、
逃避のために書いてます。

邂逅編第一話：オリ主、大地に立つ！

欧州イギリスの深い森の中…

人どころか動物の気配すら掴めないその森の木に背中を預けるようにして「蒼埜 十夜」は眠っていた…。

「うーん、ッは！、

ここ何処や？」

辺りを見回すが木しかない。

「おーマジで「ネギま！」の世界なのか？」

しばらく辺りを見てから近くにあった湖で自分の体を確認する。

まずパツと見て変わっているのは髪の毛と目の色だ。

髪は黒から黒に近い蒼色に、目は黒から透き通るような碧色へ変わっている。

服は黒いシャツの上に動きやすそうなタクティカルベスト。

下はこれまた動きやすそうなカーゴパンツ。

買い物に行った時と変わっていない。

しかし、服ではなく肉体が変わっていた。

前からある程度鍛えていたが今程ではない、

バランス良く筋肉が付き、無駄な筋肉や脂肪が一切無く、細身に見えるがその実ワイヤーを何本も寄り合わせたような鋼の筋肉である。

「おーこれが真祖の体かあ…

ん…？身体の内側に何か力があるのか？これは？」

身体をさわりながら内面に集中すると二つの大きな力があるのが分かる。

待て、落ち着けBe CoolだBe Cool。
ふうー落ち着いた。

「て、ことはだ魔砲使って「お話し」もできんというのか!!
ちくせう…、てことは真祖の身体のサイヤ人パワーと無限の剣製だ
けかよ……………」

いや、十分チートじゃん（笑）

「

だよなゝまあ仕方ないかうん、
ポジティブに行こうポジティブに。

「よしっ！魔法は置いてこう。
そうと決まったら気だ気！」

ここまできたらやらんとな…
えーと何にしようかな…
やっぱ強そうなのはダメだしな…。

……………

………

…

「よしっ！これだ！」

全身に纏っている気を額に集中…

手を前に出し三角形のような形を作り額に近づける。

原作だと弱いし大丈夫だよな…

借りるぜっ!!

天。飯っ!!

「気功砲ツツツ!!」(笑)

ピカッ

バシユウウウウウツツツツツ!!!!!!

カッ!!

光が消え去った後、

俺の目に飛び込んできたのは更地どころか山が丸ごと消し飛んでいました。

……

……

…

(ODO)ポカーン

あれえ(汗)

何故！？天。飯だぞ！？

なんでこんなに…

気の量多すぎたかな？

…気のコントロールがちゃんとできるまで気弾はやめと…

「うん、そうしよう、それがいい。

次だっ！次！！

無限の剣製だなよしっ行くぜ！！」

えーと確かこうだよな

『I am the bone of my sword .

体は剣で出来ている。

語りだす

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s
m y b l o o d .

血潮は鉄で 心は硝子。

唱えるように

I h a v e c r e a t e d o v e r a t h o u s a n d
b l a d e s .

幾たびの戦場を越えて不敗。

囁くように

Unknown to Death .
ただの一度も敗走はなく、

理想に殉じた

Not known to Life .
ただの一度も理解されない。

紅き贗作者の

Have withstood pain to create
many weapons .
彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

心情を世界を

Yet , those hands will never hold
anything .
故に、生涯に意味はなく。

歌いあげるツツツ!!

So as I pray , unlimited blade
works .

その体は、きつと剣で出来ていた。

『無限の剣製アンリミテッドブレイドワークス』

その瞬間炎が走る、
縦横無尽に駆け巡り世界を切り離す、

空には巨大な歯車がひしめき合い、
赤き丘が現れ、

そして無限の武具が辺りに墓標の如く突きたっている。

「ツツツッ！！カツツツケええツツッ！！！！！」

やば、
カツ
コ
い
い
！
！

これ俺がやっただぜやばくね？

「よっしゃ！操ってみんべ！」

右手を上げると辺りの剣が宙に浮く。

そして…降り下ろすっ！！！！

シュ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
ツ
ツ
！！！！！！！！

カツ
！！

そして爆音！！

ドガアアアアアアアア
ンンンツツツ！！！！

「イヤッ
フウウツツ
！！！！！」

俺最高！！才主万歳！！

ふー、ククこの力で何してやろうか…。

やっぱあれか、

魔法大戦で両陣営 V S 俺みたいな感じでいくか？

いやいやそれと「あついました！あいつです騎士様、あいつが山を消し飛ばした奴です！！」も？

What?

「何い！？なんという奴だ、
皆の者！！あ奴を捕らえるんだ！！」

うん、

なんかいるね騎士みたいなゴツツイ甲冑着た奴が百人ちよいくらい
かな？

…………俺ピンチ！！！？

いや待て、落ち着け。

力使えば大丈夫だろ、うん。

ならこのまま町に連れてって貰って、それから逃げよう、
うん、そうしよう。

「動くなよ！？よしっ皆！取り押さえろ！！」

ガッ！！

あ…れ…………意識が…遠…………

邂逅編第一話：オリ主、大地に立つ！（後書き）

どうでしたか？

感想お待ちします。

第二話：出会う2人の吸血鬼。（前書き）

第二話投下。

シリウスはムズいです。

ヘドが出そうだ。

あの後運び込まれたのは、

近くの山の中にあるそこそこ大きな町だ。

そして今、俺は木でできた十字架張り付けにされている。

手や足は鎖でグルグル巻きにされている、

周りにも何人が張り付けにされているのだろう。

鎖が鳴る音がする。

力を使えば簡単に千切れるが今はまだ時ではない。

十字架の根元には藁が積んであり近くに松明を持った男がいる。

多分、これで火炙りにでもするつもりなのだろう。

しかし、俺はすでに真祖だ。

このぐらいの火では死ねないだろう。

「ここにっ！！神の名の元に悪しき魔女共を火炙りの刑に処す！！」

Amen
アーメン！！

☐ Amen アーメン!!! ☐

始まつた！！力集める！？

火の周りがする早い！！

集中できない！！

「アアアアア ア ア ア アアアアア！！！！！！！！！！」

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い燃える燃える
燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える！！！！！！！！！！

!!!!!!

皮膚が焼け目が溶け髪は燃え肉が炙られ空いた口から炎が入りこみ中を灼く！！！！

駄目だ集中できない！！！！

不老不死だから死ぬこともできない！！

そんな煉獄の中で、

小さな金髪の女の子の十字架に火が付いた。

「
ツツツ！！！！！！！！！！」

声にならない叫びを上げ鎖を引きちぎる！！

全力で走る！！走る！！走る！！！！！！

女の子の十字架を気で根元から吹き飛ばす！！

バキィィィツツツ！！！！！！

見たところ少し火傷を足に負った位だ。

なら大丈夫！！

まだ生きてる！！

十字架ごと抱え上げて

「いいなツツツ！？」

齒を食いしばれ！！」

ガッ！！

女の子に声を掛けてから足に気を集中させ飛ばす！！

既に地面は遥か下、

吸血鬼の力の源である月めがけて飛んで行く！

腕の中の女の子を見やりながら…。

Side out

Side?

吸血鬼になってから数年。

吸血鬼というだけで襲いかかつて来る人間から身を守り続けて数年。それなりに力は付いたと思ってたけど、

旅で疲れていた所を大人数で取り押さえられた。

連れてこられた町で十字架に張り付けにされ鎖でグルグル巻きにされ、

口には呪文を唱えられないように猿轡をさせている。いくら吸血鬼でも成り立てではこの頑丈な鎖は千切れない。

「……ッであり処刑すべきであると思われます！」

[illegible]

市民の呪いの声、
そして

「ここにつ――！神の名の元に悪しき魔女共を火炙りの刑に処す――！
Amenアーメン――！」

『A m e nアーメン!!!!!!!!!!』

処刑宣告。

しかしこれでも私は吸血鬼の真祖、

いくら炎に焼かれても死ぬことはない。

ただ、ずっと焼かれ続けるだけ。

「アアアアア、ア、ア、アアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

誰かが焼かれている。

そして今私の目の前には今まさに松明を投げ入れんとしている男。

そして火が付いた。

足が熱い!!

段々火が登ってきている!! 痛みに耐えようとした時。

「ツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

声にならない悲痛な叫び。

そして衝撃。

バキイイツツツ!!!!!!

目の前には綺麗な碧色の瞳の青年が心配そうにこちらを見ている。

足の方を見て少し悲しそうな顔をする、

そして十字架ごと抱え上げられてから一言。

「いいなツツツ!?

歯を食いしばれ!!」

ガッ!!

その言葉とともに周りの景色が加速していき。

空を舞った

眼前の吸血鬼の力の源たる月が埋め尽くす。

そしてこちらを見る青年が月明かりに照らされていて綺麗なだと思
った。

ああ、段……々と眠……く
なっ……て……き……た………

第二話：出会った2人の吸血鬼。（後書き）

どうでしたか？

しばらく出てくる原作キャラはエヴァ位です。

感想お待ちします。

第三話：吸血鬼達の対話。（前書き）

ども、作者です。

もう少しだけシリ阿斯続きます。

第三話：吸血鬼達の対話。

前略。

親父、お袋へ。

あなた達の息子はイタ車に跳ねられて死にました。
犯人は捕まりましたか？

こちらは、

色々ありました…

ええ…色々…

死んでから邪神に出会い、
チート能力を貰い、
人間を辞めました。

そして異世界に飛ばされました。

飛ばされてからも色々ありました。
力の確認をしようとして力加減に失敗し、
山を消し飛ばしました。

その後、

ゴツイ甲冑を着たオッサン達に気絶させられ、

町に連行されました。

連行されてから町では、
十字架に張り付けにされてからこんがりとウエルダンで火炙りにされました。

でもチートなので死にません（笑）

そしてあなた達の息子は…

幼女を拐っちゃいました ミ

ハッ！イカンイカン…軽く逃避しちゃったぜ…

目の前には眠っている金髪の可愛い幼女。

うむ、可愛い。

美少女は人類の宝だな。

しかし運んだ時柔らかかったなあー、
良い匂いがしたし、

髪の毛なんてサラッサラでホントに髪の毛なのか？と思った位だったぜ…

おっと皆の衆勘違いするなよ？

許可無く手を出す…なんてことはしないぜ!!
なぜなら…

YES ロリータ、NO タッチ!!

これが基本だからな!!

幼女は愛でるものでありけっして傷つけるものではないからだ。

おっと、こんなことしてる場合じゃねえぜ。

火傷した所を手当てしてやらんといかん。

美少女に火傷が残るなんて…

人類の、いや、世界の損失だ!!

決して幼女にさわりたいから、

なんて、ことはないよ?

あくまで治療だからね?

ホントだよ?

さてと火傷は…足だったよな…

そう一人ごちて治療にあたる。

「?」

無い…火傷が無い、

いや、そんな筈は無い。

確かに少しだけだけど確実に炎に包まれたはず…

「ん…?」

良く見てみると僅かに火傷している…

「!？」

火傷が消えた!？

何故？自己治癒か？

いや、早すぎる！

「まさか同…類なのか？」

分らん…

いや、確かめればいいか…

「ちよつと失礼。」

言いながら歯を確かめる。

…歯はやはり人間ではあり得ない程に鋭く尖っていた。
と、なるとやはり吸血鬼。

しかし良く見るとメチャクチャ似てるな！

本人だったりして？

ははっ、まさかね…

異世界に来て僅か一日で見つけるなんてないない。

「ん」

おっ、起きそうだ。

聞いてみるか…

s i d e
o u t

s i d e
?

「ん」

目が覚める…

「……………私はっ!？」

町で十字架に張り付けにされて、
それから!？

「此処はっ？」

辺りを見回す。

「やあ、目が覚めたかい？」

可愛いお嬢さん。

此処はあの町から二つ程山を越えたところだよ。」

笑顔でニコニコ話している、
碧眼の男の人。

「かつ、可愛いだなんて／＼／」

急に言われて照れてしまう。

「いや！可愛いね！！」

キミが可愛くなかったら誰が可愛いんだい？」

今私は林檎の様に真っ赤だろう。

久しく言われて無かったので嬉しくて仕方がない。

「いやゝしかも俺と同じ吸血鬼だなんてな。」

えっ？

バレた？

いやその前に自分と同じって…

「あつあの！！」

あなたも吸血…鬼、なんですか？」

「ん、そだよーしかも「吸血鬼の真祖ハイ・デイルイトウォーカー」
ってやつなんだけど…分かる？」

！？私と同じ…

「じゃあ自己紹介でもしようか！

俺は蒼埜 十夜、

キミは？」

私、私は…

「エヴァンジェリン、

エヴァンジェリン・マグダウェル。」

side out

side To ya

やっぱなードンピシャかよ。

でもやっぱり原作のエヴァと違うよな…

まだ多くの悪意に晒されてないからなのか？

これはこれで、
萌えr…ゲフン、ゲフン
庇護欲を誘うな…

「ところで、その歳で吸血鬼になるなんてどうしたんだい？
良かったら話してみないかい？」

そう言った途端に、
ボロボロと泣き始めたエヴァ。

ちよっおま！
えっなに！？どうすんのこれ！？

「ごめんなつ！！
嫌だったよな？
話さなくていいからなつ、な？」

美少女の涙には弱いんだよ

「ヒグッ、グスッ、
ち、ちがいます、
きゅ、吸血鬼になってから初めて優しくさ、されて、
じ、自分一人じゃないって分かって。
嬉しくて…グスッ。」

ああそうか、
確信した。

この娘は俺の知ってるエヴァンジェリン、
「悪の魔法使い」「闇の福音ダークエヴァンジェル」「禍音の使徒」
「人形使いドールマスター」等、

数々の異名をとる六百万\$の賞金首ではなく。
ただの幼い子供だと。

ずっと一人で寂しかったんだな、
正体がバレれば化け物と呼ばれ、
例え受け入れられたとしても皆自分より先に死んでいく。
だから独りで旅をする…

「大丈夫だよ…
もう独りじゃない、
俺がいる。」

そう言った途端に抱き着いてきた。

ウホッ、柔らかか！
イヤイヤ、落ち着けっ俺！！
今はシリアスなんだ！！
ギャグに走るな！！

そして抱き着きながらポツポツと喋り出す…

誕生日に吸血鬼にされ復讐を誓い旅に出る。
程なくして復讐を果たすことができた、
が、同時に生きる目標を無くす…
町に定住しようにも歳をとらない為長居できない。
ましてや外見は子供、
独り暮らしは怪しまれる。
そして始まる魔女狩り。

数の力に負け捕らえられ火炙りになりそうなところで俺に助けられ

る。

可哀想に…

ム力ついてきた…

てか何？

こんな美少女虐めて楽しいんかあっ！？

「良く頑張ったな…

俺も話があるんだがいいか？」

胸元で首肯する気配を確認にしてから話し出す。

やっぱり俺だけ知ってるのはフェアじゃねえ。

「俺はな、異世界でキミが独りで寂しそうにしているのを見て吸血鬼になったんだ。」

驚く気配がしてくるが、
無視して続きを話す。

「キミが独りで寂しく無いように、
キミを虐める人達から護るために来たんだよ。」

言いながら金髪の髪を撫でる。

「だからキミはもう独りじゃないよ、
安心しな。」

そう言いながら髪を撫でる。

安心したのかぐつすりと眠っているエヴァ。

その寝顔を見ながらこの娘をここまで追い詰めた奴等に対して怒りが沸き上がってくる。

そして俺は決意する

第三話：吸血鬼達の対話。（後書き）

これシリアスになってんのかな…

第四話：人類（ヒューマン）！テーマ等は俺を怒らせたっ！！（前書き）

ども、鳴る神です。

最近寝てるか、飯喰ってるか、小説書いてるかのどれかしかやって
ねえ…orz

こんな作者の駄作ですが宜しくお願いします。

第四話：人類（ヒューマン）！テメー等は俺を怒らせたっ！！

Side Evangelin

あの後、起きたらあの人に抱き着いていて真っ赤になっちゃいました。

恥ずかしい／／

「可愛いなーエヴァは。」

あつエヴァって呼んでいいかな？」

「はっはい！」

「ん、りょーかい。」

俺も十夜でいいよ。」

「トーヤ、ですか…」

男の人を名前で呼ぶの初めて…／／／
また頬が熱くなる。

「やっぱり可愛いなー
あつ今からご飯にする？」

お腹減ったでしょ？」

「だって大丈夫で『グー』すう……」

恥ずかしい！！

「アハハツ、減ったでしょ？」

待ってて今から何か狩ってくるからさ！」

そう言いながらもの凄い速さで走り去っていく。

誰かと食事をするのは久しぶりだ。

今からまちどうしいな。

早く帰って来ないかな……

s i d e o u t

「アハハツ、減ったでしょ？
待って今から何か狩ってくるからさ！」

嘘をついてその場を離れる。

今から行くことはまだあの娘には早いから…

「^{ヒューマン}人類よ、

テメー等は俺を怒らしたツツツ！！！！」

そう、今から行くのは制裁だ。

エヴァを傷つけた人類ヒューマン共を根絶やしにするツツツ！！

前の世界では喧嘩はしたが人を殺したことは無い。

普通なら人殺しなんてできないんだろうが今は違う。

俺は吸血鬼だ、

「^{ノライフキング}不死者の王」なんだ。

人では無い。

今から知り合いでも無い人を殺してもなんの感慨も浮かばんだろう。
それより同族を、エヴァを！^{エサ}人類共に傷つけられたのが憎い！！

あの町を灰にしてくれる！

住民一人残らず抹殺してくるわ！！！！

俺は足に気を集中させ空に飛び上がった。

ガッ！！

町の外れに着地する。

ヒューマン
人類共を根絶やしにする。

しかしこちらは一人だけ。

全方向にバラバラに逃げられたら必ず誰が一人は取り逃がすだろう。
よって、殲滅方法は一撃で塵にするツツツ！！！！

気を腕の先に集中…

気弾を作り出す！

その気に気を送り続けて圧縮！！

圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し
圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し
圧縮し圧縮し圧縮し圧縮し圧縮する！！

俺の手の先には太陽の如く煌めく特大の気弾。

「行くぜツツツ！！」

『ストナアアツツツサン、シャイイイイインツツツ！！！！』

！！。』

撃ち放つ！！

気弾は町のほぼ中央に着弾し、
正に太陽の如く高熱を辺りに撒き散らす！！

「クハハハハハハッツツ！！

見ろっ！！

人がゴミの様だ！！！！」

思わずム。力を言ってしまった俺は悪くない。

しかし、本当に何にも感じんな…

やっぱり邪神ロキの加護を受けてるし、少なからず悪人の適正があったということか？

まあいい、

それならそれでエヴァと二人で「誇りある悪」になってやる。

………

……

…

「たっ だいま〜！

イヤー中々獲物が見つからなくてさ〜」

言いながら背中に背負った猪を下ろす。

「あつ、お帰りなさいっトーヤ。」

ヤバイ！！超可愛い！！

この笑顔に癒される！

「よっしゃ、ちょっと待つてな！

直ぐに解体してやるよ！！」

男のアウトドア料理の始まりだぜ！

青年料理中…

「上手に焼けました〜！！」

リアル漫画肉ができたぜ…

さすが漫画の世界だ。

「さっ、食べようぜ！エヴァー！」

「うんっ」

「いただきます。」ペコリ

猪に感謝しながら食べる。

「? ねえトーヤ? イタダキマスってなあに?」

あーまだエヴァ知らないのか…

「いただきますってのはな、俺達の為に死んだ命に対しての感謝の言葉だ。今だとこの猪だな。」

「ふーん、良い言葉だね!

イタダキマスって!

じゃあ私も、

イタダキマス猪さん」ペコリ

かつ、かわえええつつ!

穢れを知らない天使だぜっ!!

「なあ、エヴァ?」

「なあに? トーヤ」モキュモキュ

なにこの娘!?

飯喰ってるだけなのに、

なにその効果音!?

可愛い過ぎるぜ!!

「食べながらいいから聞いてくれないか?

俺はエヴァを護るって誓ったんだ。

だけど俺達は吸血鬼だ、必ず狙われちゃう。

もしエヴァが一人で逃げたら一人で静かに暮らせるかもしれん。

ただ俺は旅をするつもりだ、
この無限に近い寿命を使って世界を見て回るつもりなんだ。
俺と来るなら必ず厄介ことがある、
命の危険もあるだろう。

それでも良いなら俺と一緒に世界を見て見ないか？」

これを聞いとかなとな。

もし嫌なら寂しいけど別れんとイカンしな…

「私……私は、私は行くよ！

もうやることは無いし…

それにトーヤは私に優しくしてくれたし／＼／

！

「ありがとっつ、エヴァ！

さっ、食べようぜ！！」ガツガツ！

「うんっ！」モキュツモキュツ

了解も得られたし食べよう！

お残しは許しまへんでえゝ！

猪は美味しかったです

第四話：人類（ヒューマン）！テーマ等は俺を怒らせたっ！！（後書き）

如何でしたか？

オリ主、アッサリ殺しの童貞卒業。

やっぱり普通のオリ主とは違います。

それが我等の蒼埜クオリティ！

やっぱり根本から人間とは違うからあんまりくよくよしなと思う

んですけど、

どうですかね？

第五話：獲得！俺達のマイホーム。（前書き）

どうも、鳴る神です！

いつの間にか

PV：23,000アクセス

ユニーク：3,000人

突破いたしました！

皆さんありがとうございます！！

これからも本作品をよろしく願います！

第五話：獲得！俺達のマイホーム。

Side Toya

あれから一週間たち、俺達はヨーロッパを離れアフリカ大陸いた。

理由は修行の為だ、

今の俺じゃ不意打ちや真の強者と当たればやられちまうだろう。それにエヴァも俺と一緒にいるなら確実に命の危険に晒される。だから修行の為に当時まだ未開の暗黒大陸と呼ばれているアフリカ大陸で修行をするつもりなのだ。

…実はそれだけではなく、

あの町を塵にした時。

生き残りがいたらしく陰から俺の行為を見ていたらしいのだ。

そのせいでバツチリ似顔絵付きで指名手配されているのだ、

しかも初頭金が100万\$、

異例中の異例だろう。

やはり一撃で町を消したのが不味かったか…

ともあれ、そのせいで賞金ハンターがうじゃうじゃ寄ってくるのだ。

幸い真つ昼間から襲って来る奴は余りいなかったで、

エヴァが寝ている内に

全員叩きのめしたりしたんだが…

さすがに眠くて仕方がないので、
未開の大陸なら隠れる所もあるだろう…
という訳でアフリカ大陸を目指したわけだが…

「あつちゅっつっ!!」

暑いよ!! いや寧ろ熱い!!

hotじゃなくheatだよ!?

周りはジャングルみたいだし…暑すぎだ

「暑い…ね、トーヤ…」

そう俺はまだ良いんだよ、
だけどエヴァがヤバイ!

ヨーロッパ育ちで肌も白いし、
オマケに吸血鬼だ、

「吸血鬼の真祖ハイデライトウォーカー」とはいえエヴァは成り立
てだ。

俺の様な邪神印のチート吸血鬼じゃない。

日の光を浴びても灰になったりはしないが、

やはり吸血鬼は夜の一族だ、やはり昼より夜がいいに決まっている。
ちくしょうっ!

「エヴァ! 木陰で待ってる! いいな!？」

ちいっ!!

何処か休めるいい場所は無いのかっ?

そう思いながら樹を垂直に駆け上がるっ!

「よつと！」

頂上に到着し目を強化する。

やはり『無限の剣製』の影響か目は通常よりいい。

しかしそれに対して、

エミヤシロウが込める以上の莫大な魔力を込めていき、
正に千里眼と呼ぶに相応しい距離を見渡す。

「ん…？」

え…なに？アレ？

「城、なのか…？」

と言うかあの城レーベンスシュルト城じゃねえのか！？

そっかー吸血鬼のエヴァがどうやってあんな城建てたのか分からん
かったけど…

建てたんじゃなくて奪ったのか…

ニヤリ（「ー」）

「どの道奪われるんだし、前倒しになってもイイよな」

そんじゃまっ！行ってみっか…！！

…
…
…

「とー着つと！」

あの後此処まで舞空術で飛んで来たんだが…

「でっけーなあ〜！」

そうなのだ、無茶苦茶でかい！

こんなデカいのが魔法球の中に入るとか魔法ってスゲーよな、やっぱり。

よっしゃ！

気を探る…

…一人だけかな…

てゆうか、こんな城に一人とか贅沢だな…魔法使い。

よしっ！

気を感じた辺りを爆撃してやるか！

こんだけデカかったら少し位壊れても大丈夫だよな。

えーと、何にしようかな〜

ここはアレですな、

ド。ンツ！君に決めた！

「流派あつっ！！

東方不敗いっ！！

最終奥義いいいっっっ！！！！！！」

全身から黄金の気が立ち上る！

その気を拳に集中させる！！

右手を胸の前に持っていていきあのセリフを！

「俺のこの手が真っ赤に燃えるうっ！

あの城奪えと轟き叫ぶうっっ！！

喰らいやがれえっ！！

石破ッ！天きよおおおけええええんッッ！！！！！！」

黄金の気が極太のレーザーの如くレーベンスシュルト城に突き刺さる！！

一瞬、

障壁の様なものと拮抗したが、

ガラスが破れる様な音とともに突き破り城壁を破壊した。

「よっしゃ！突入だぜっ！

トーヤ、行っ気まーす！！」

石破天驚拳によってできた穴に突入する！

………
………
………

穴に飛び込んだ先にいるのは、
片腕が無いローブを纏った魔法使いらしき男。

「チイツ！此処をこの儂、グリード・アルゲントウムの居城と知つての行いかあつ！？」

そう吠える男、
てゆうか知らねーつつの、
原作キャラでもねーしな。

「ハイハイ、ワロスワロス。
突然だけどこの城俺が貰うからヨロシク
抵抗しないなら何もしないからさっさとどっか行きな。」

「このッ！
ウイス・ウィル・ウイリア・ウイリアム！
炎の精霊１１１柱。集い来たりて敵を射て。魔法の射手・連弾・
光の１１１矢」！！」

おー中々強い魔法使いみたいだな、
丁度いい、

今まで賞金稼ぎは戦闘前に即効で倒してきたからな…こいつで対魔法使いの練習でもさせてもらいますか。
ガガガガガガッツツ！！

魔法の射手を飛び上がって回避する。

「かかりおったわ！

ウイス・ウィル・ウイリア・ウイリアム！

契約に従い我に従え炎の霸王。

来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に。「燃える天空」！！」

！これは確か光線を発射し、命中後に大爆発を起こす炎系の高等呪文！！

まともに喰らうと流石に不味い！

「フンツ！気合い防御！！」

ドガアアアアアアアアアアッツツツツツ！！！！

「ハッ！くたばりおったわ「誰がくたばったって？」い！？」

「いやゝこんなもんかね。

…でもこいつ位なら後百人いても余裕だな、こりゃ。

でも魔法使いの従者を交えての戦闘はしてないし油断は禁物だな…」

「きつ、貴様あつ！」

「ウツサイ死ね。」

斬ッ！！

手刀で頸を飛ばす。

途中の魔法障壁は大した抵抗も無くあっさり貫通した。

「うーん、しかしこいつってどんぐらい強かったんだろーな？」

…分からん…謎だ。

首を振りつつ穴から外に出て舞空術で飛び上がる。

「予想以上に時間がかかったな…
早くエヴァんとこ行かなきゃな。」

こうして俺達は原作のエヴァの居城、
レーベンスシュルト城を手に入れた。

第五話：獲得！俺達のマイホーム。（後書き）

という訳で、

レーベンスシュルト城獲得です！

いや、初本格戦闘でしたけどどうでしたか？

ところで作者の疑問なんですけど魔法使いつて上と下の実力差がありすぎませんか？

原作でいくらタカミチが手加減していたとはいえ十歳のネギに負けるってのはどうかと…

でもアレでタカミチは本国戦闘ランクA A+ってことは相当上ってことですよね…

うーん、分かん。

あつ今さらですけども、

本作品は捏造設定で満ちております。

そこんとこヨロシクお願いします。

第六話：俺達の修行の日々！（前書き）

どうも、鳴る神です。

今回は修行風景&mp・日常です。

では、どうぞ。

この作品は捏造設定、ご都合主義、房二成分などが含まれています。
それでもよろしかったら読んでみてください。

第六話：俺達の修行の日々！

Side Toya

×月○日

レーベンスシュルト城にて修行開始。

「エヴァってさ何か得意なことってある？」

修行前にエヴァの得意なことを一応聞いてみる。
最終的には原作エヴァにするつもりだしね

「んつとね…縫いものとか得意だよっ！」

相変わらず可愛いなあ…

「じゃあさ人形使いとかどうだろ？」

「人形使い？」

こてん、と頭を傾げつつの上目遣い…！！
ぐふっ！犯罪的な可愛さだぜ…！！
エヴァ、恐ろしい娘…！！

「そうだよ、」

自分の作ったお人形さんを操って戦うんだよ」

「お人形さん戦ったら壊れちゃう…」ウルウル

やめてっ！

俺のライフはもうゼロよっ！！

「でもね、人形使いになったらお人形さんとお話できるんだよ。」

これどうだ！

「お人形さん…お話…」

かかったっ！！

「それにね、エヴァが強くなったらお人形さんは壊れないし。操れるお人形さんも増えるんだよ」

「お人形さん…お話…沢山…」

うんっ！私人形使いになるよ、トーヤ！」

エヴァの笑顔を見てから、顔をそむけ斜め下を見ながら…

計画通り…！ニヤリ（ー、ー）

×月○□日

今エヴァは城の中で人形操りの関係の本を読んで自分の人形を作成中だ。

そして俺は城の中庭にて修行というか日課中だ。
修行方法は有名なアレをやっている。

「シッ！９９９９っ！」

ブオンッ！

「ふー」

修行方法は、

感謝の正拳突き一万本！

これをひたすらやり続けるだけ。

突いて、感謝を捧げて。

また突く！

これをひたすら繰り返す。

俺はすでにあの会長の身体能力を超えているのももちろん音を置き去りにしている。

これは俺の持論なのだが、

吸血鬼の最高の利点は寿命の長さだと俺は思う。

凡人でさえも時間をかけ、

只一つのを鍛え続ければ凄まじいものになるだろう。

ましてや俺は吸血鬼だ、

今から原作までひたすら毎日一万本突き続ければ一体どんな拳が放てるようになるのだろうか？

想像もできない。

だから俺は今日も突き続ける。

「シッ！１００００っ！」

ブオンッ！

「ふー、次はアレだな…」

いつもこの正拳突きをやり終えた後は座禅を組んで精神を集中させ、内にある魔力と気を練る練習をしている。

練り方はH×Hのオーラを参考にしている。

”纏”・”練”・”円”・”絶”を繰り返し次は”凝”・”流”・”硬”を全身で行う。その後、

適当な木の枝を拾ってきて”周”・”隠”を繰り返す。
最後に”練”まで練った気を圧縮し”纏”の状態に留める”圧”を行う。

これからを一通り行ってから魔力で同じことをする。これらは時間と共に必ず伸びるので只やり続けるだけだ。

その後に、

気と魔力の合一、咸卦法を練習する。

咸卦法とは相反し合う「気」と「魔力」を融合させ身の内と外に纏い、強大な力を得る高難度技法。

「シユンタクシス・アンティケイメノイン（気と魔力の合一）」とも言つ。

アルテマ・アートの
「究極技法」とも呼ばれている。

肉体強化、物理・魔法防御、加速効果は単なる「気」や「魔力」によるものよりもパワーアップし、

耐熱、耐寒、耐毒その他諸々の効果も得られる技だ。

しかしこれが難しい…

心を無にすることが重要らしいのだが中々上手くいかないのだ。

まあいい、時間は腐る程にある。

いつかできるようになるだろう。

咸卦法の練習をやってから続いて瞬間移動の練習をしている。

そう、悟。のアレだ。

言っちゃ悪いが。空は馬鹿だと俺は思う。

多分悟。は気以外使えないと思うので理論上アレは俺にも使えるはずだと思う。

俺の考察だとあれば”瞬動”の一種ではないかと思っている。

”瞬動”…いわば”縮地”を全身で行うことが瞬間移動ではないかという訳だ。

これもまだできていないが時間が解決すると思っている。

次に、吸血鬼の特性の練習をする。

身体の変態化、爪を伸ばしたり、といったことを練習する。

流石に自己再生や魅了の魔眼、血を吸い従者にするといったことはできない。

最後に型の練習をし続ける。

”無限の剣製”であらゆる種類の武器を”投影”し振り続ける。

片手剣に始まり、両手剣、刀、双剣、短剣、ナイフ、槍、メイス、ハンマー、鞭、弓、暗器等、”剣の丘”に刺さっているあらゆる種類の武器を振りつづける。

これに流派など無い。

振り続け、操り続けて600年の間に自らの流派を創るつもりでやり続ける。

武術もそうだ。

こちらは前の世界で習った型をひたすら打ち込み続ける。
全ての流派を昇華し、自らの流派を創る勢いで。

これが俺の修行風景だ。

月□×日

とうとう人形第1号が完成したらしい。
ついでには名前をつけて欲しいらしい。
勿論名前決まっているけどな…

…
…
…

「あつーや！」

「この子だよっ！」

俺の目の前には

エヴァンジェリンの初代「魔法使いの従者」ミニステル・マギであり、身長70cmほどの人形がいる。

エヴァの魔力が原動力で、

言葉遣いが悪く、残酷趣味。

漢字とカタカナのみで話し、エヴァの事を「御主人」と呼ぶ。

多数の刃物使いで自分の身長以上の刀も振り回す「殺人人形キリング・ドール」。

チャチャゼロがいる。

「ケケケツ！才前ガ旦那カ？」

イカス名前ヲタノムゼ。」

だ、旦那？

まあいいや。

もう名前は決まってるんだがな」

「チャチャゼロ…ってのはどうだ？」

「うんっ、いいんじゃないかなっ！どう？」

「チャチャゼロカ…中々良インジャネエノカ？」

「気二入ツタゼ！」

「良かったね！チャチャゼロっ！」

「ああ、これからヨロシクな！」

「ケケケツ！ヨロシクサレテヤルヨ、御主人、旦那。」

こうして今日俺は新たな家族兼修行仲間の友人を得た。

×。月□日

修行を初めてから大分たった。

俺はようやく武器や武術が自分の物になりつつあり、
気と魔力の合一、咸卦法もできるようになってきて
瞬間移動の糸口も見いだしつつあった。

エヴァは一通り魔法を修め一度に操れる人形の数が100体を超え。
チャチャゼロも自分にあつた体の動き方を修得しつつあつた時に俺
は提案した。

「なあ、エヴァ。」

「なあに？」

「ドウシタ、旦那？」

「仮契約、しないか？」

…
…
…

「ええええつつつ!!??」

「ケケケツ！イキナリダナ旦那。」

「いやゝエヴァもそこそこ強くなってきたし…
俺も自分のアーティファクト見てみたいし…」

「わっ、私はいいですけど…／／／」

「俺ハカンケーネーゾ。」

「じゃあ陣はもう書いてあるから其処で…」

青年達移動中…

「さっさとやるうか。」

「はっ、はい！」

「サツサトヤレヨ。」

俺とエヴァが陣に立つ。

あーエヴァ可愛いなあ〜

でも大丈夫、まだ大丈夫。

俺はロリコン（幼女好愛者）だがペドフェリア（幼女性愛者）ではない！…はず。

「それじゃ。」

「はははっはいつ！／＼／＼」
ちゅっ！

仮契約パクティオー！

パアアアッ！

光と共に俺の右腕と左腕に黒と白の環が装着される。

「名前は「不滅の重力ペルペトウス・グラウイタス」か…」

効果は…使ってみんと分らんな。

まあ重力が関係してるんだろうがな…

「ん…ありがとな、エヴァ。」

「…キス…初めて……キャッ／＼／」

なんか顔赤くしながらクネクネしてるよ…

「おーい、大丈夫か？エヴァ？」

いやホントに。

「ひゃっ、ひゃい！いろいろです！」

噛みまくってんじゃない…

「そうかあ？まあいいや。

俺は修行に戻るからな」

アーティファクトの練習せんとな…

「ケケケツ、旦那鈍スギダロ…」ボソッ

□月××日

エヴァがグレた。

「なー、エヴァー？
そろそろさー」

「ん？どーした、トーヤ？」

空気が凍った。

「エ、エヴァが、エヴァがグレたあああああつつつつつ！！！！！
！????？」

何故だっ！？

俺の教育が間違っていたのかっ！！？？

チャチャゼロと一緒に居させたのが悪かったのかっ！？

「ちくしよおおっ！！ちくしよおおおおおっうううつつつ！
！！！！」

「オッ、オイ！どーしたんだ、トーヤ！？」

「だって…エヴァ…口調が…。」

「こっ、これは！

……笑わないか……？」

「？」

何が？

「いいからっ！笑わないかと聞いているっ！？」

「わ、わかった！笑わない！」

「コホンッ！あの…ね？」

トーヤと一緒にいるなら前の口調だとダメになって…思ってた…だから…口調変えたの／／／」

「!？」

何？俺の為？

俺に迷惑をかけないようにするためのなのか？

「エヴァーっ!!」

抱き着くっ！

「きゃっ！な…なに？

じゃなくて…なんだ？／／／」

言い間違えちゃって！

可愛いなあゝもう!!

「俺の為なんて！

良い娘だなあゝエヴァは!!」

「オッ、御主人共楽シソージャネエカヨ、俺モ混ぜ口。」

こんな感じで楽しく修行やってます。

第六話：俺達の修行の日々！（後書き）

六話でした〜どうっすかね。

仮契約のカードです

従者名

：AONO TOYA

従者の称号

：Pessimus・Auctorペessimス・アウクトル「最悪な元祖」。

（数字）

：???666。

（色調）tonus。

：Argentum「銀」。

（徳性）virtus。

：temperantia「節制」。

（方位）directio。

：septentrio「北」。

（星辰性）astralitas。

：Mars「火星」。

（アーティファクト）

：「不滅の重力ペルトウス・グラウイタス」

って感じですよ。

アーティファクトの効果は、

- 1・重力を操れる。
- 2・ただし、効果範囲は自分から半径1mまで。
- 3・重さに制限は無い。

で、オリ主はこれを移動& a m p・攻撃に使います。
例えば移動だと瞬動の瞬間に発動、重力を軽くする。
これで初速を上げて、
移動中に重力を重くする。そうすると移動速度が速くなります。
攻撃は単純に拳を重力で包む、
もしくは拳の前に高重力を発生それで殴る。
といったものです。

これからも、本作品をよろしく願います。

魔法大戦編第一話：別れ、そして計画の始動。（前書き）

ともども、鳴る神です。

今回から第二部：魔法大戦編が始まります。

どうぞ読んでやってください。

P V 4 0 , 0 0 0

ユ ニ ー ク 4 , 9 0 0

突破致しました！

ありがとうございます！！

これからも読んでもらえると嬉しいです！

ところで：投稿4日目でこの数字って多いんでしょうか？

魔法大戦編第一話：別れ、そして計画の始動。

Side Toya

修行を終え世界を旅をするようになってから大分たった。
俺とエヴァ、二人は既に魔法界、旧世界、
2つの世界で並ぶ者がいないほどの賞金首になっている。

エヴァは原作の異名を殆どを持っているし、
実力も既に世界最強の一角だろう。

それに、つい最近600万\$の賞金がかけられたんだが…

「なあ、エヴァ…」

「なんだ、トーヤ？」

「何で俺に賞金が1000万\$もかけられているんでせう？」

いや、マジで。

ヤバいじゃん、恐らく賞金首の中で最高額だぞ？
お陰様で滅茶苦茶狙われるんですが。

「当然だ。」

何せ私達の名を騙る偽物を潰すために片っ端から魔法使いを捕らえて情報を吐かせていたんだ。
当然の結果だろう。」

「だってさーム力つくじゃん？」

俺はこれでも「誇りある悪」何だぜ？

自分の名前に誇りを持つてる。

それを騙るってのは…

頂けないなあ〜」

「フンッ、私だってそうだ。」

「それにエヴァの名前を騙るってのがちよつとなあ〜

しかも騙った奴エヴァより全然可愛く無かったし…」

マジでな…

三十路越えのオバはんが「私がエヴァンジェリンよっ!」

って言われたからな…

当社比30%増しでぶっ飛ばしてやったぜ。

「なっ／＼可愛いなど!…」

コラッ! 頭を撫でるな! ? 子供扱いするな!」

わしわしと頭を撫でる。

あーもう、背伸びしちやって〜。

可愛いなあー、髪サラサラだなー。

「でもさ…何か俺の異名って多くない?」

そうなのだ、

大体俺達クラスの賞金首には大概異名がついている。

エヴァの「闇の福音」などがそうだ。

しかし、

エヴァも多い方だが俺は更に多い。

列挙すると、

「蒼金の蒼」、「拳皇」、「一人軍隊」、「万剣の長」、「血塗れの鬼」、「破滅の足音」、「超越種の超越種」、「何あいつ？、攻撃効かないですけどっ！？」

等が挙がる。

エヴァよりかなり物騒だ。一つを除いて。

しかしこれ等はまだ良い方だ。

他に、

「世界最強のロリコン」、「金髪少女の守護者」、「マスターオブ

ロリコン」…

等がある…。

酷くない！？

「マスターオブロリコン」ってなに！？

俺、エヴァにやらしいことなんて何もしてないよ！？

「確かに多いな…しかも変なのばかりだ…

まあ…その…気にするな。」

見た目10歳に肩を叩かれ慰められる見た目18歳…

シニールだ…

「まあいいや。

それよりエヴァ、今年って何年だ？」

「今か？確か1900年位だったぞ。」

あー吸血鬼になると時間感覚が駄目になるな

「ケケケツ！ボケタカ旦那？」

「チャチャゼロ…いたのか。」

「イタツツーノッ！」

喋りながら斬り掛かって来る殺人人形を適当にあしらいながら思い出す。

そろそろ、日本に行って合気柔術を習わんとな
原作から外れちまうぜ。

「なあエヴァ？」

旧世界の日本にいかねえか？」

「日本？確かトーヤの故郷だったな。
別に構わんぞ、
前から興味があったしな。」

「そつか、スマンなありがとよ。
ところで…提案なんだが。」

「何だ？」

「日本は独りで回ったらダメか？
後、その後の百年程独りで自由に動きたい。」

聞いてみる。

エヴァは何だかんだ言っても何時も俺と一緒にいた。

やはり独りが嫌なのだろう、

しかしそれでは俺の原作崩壊プランに影響が出てしまう。

何よりエヴァはもう簡単に負けることがないから一人にしても安心できるしな。

「故郷を一人で見て回りたいんだ。

それにそろそろ俺は計画に集中したいしな。」

エヴァには計画の概要を説明してある。

2000年以降面白いことがある、

そのシナリオを覆す計画がある……と。

内容を知りたそうにしていたが知らない方が面白いと言って教えなかった。

この百年間の間に仕込みを全て終わらせ、
原作をさりげなくされど徹底的に破壊する！

その為には独りで行動が大前提なんだが…

「そうか…まあ良いだろう好きにしろ。

……さびしくなるな……」

「何だ？最後の方聞こえ無かった。
もう一回言ってくれ。」

「う、うるさいっ！

なんでもないわっ！／／／」

「？、何赤くなってるだよ？
熱でもあるのか？」

「相変ワラズ鈍イナ、オイ。」

s i d e o u t

s i d e E v a n g e l i n

目の前の男、トーヤはこの世界で一番長い付き合いだろう。

その私でも未だに計りきれんないのだ。

戦闘能力はまず間違いなく世界最強。

永き時の中で鍛えた技と力は私でも負けるだろう。

500年前から続けていた感謝の正拳突き一万本とやらは気や魔力の強化無しで音の壁を破り、衝撃波が出る。

また、詳しく見たことは無いが固有結界という名の世界を塗り替える魔法があるらしい。

本人は魔術だと言っていたが…

数多の名剣、魔剣、聖剣等、

ありとあらゆる武器を何処からともなく取りだし射出する。

しかもどんな武器を持っても超一流。

正に死角無しだ。

だがしかし、それ等は雑魚相手にやる攻撃らしい。

本人曰く、

最強は己が拳…で大概の相手が使うに値しないから使ってないだけなのだから。

正に最強、「超越種の超越種」と呼ばれるだけのことはある。

…私は世界最強の魔法使い等と呼ばれているが、

魔法使いで最強なだけであり、全世界全種族の中では最強でない。なんとも歯痒い気分だよ。

そんなあいつだが、

正直な所私はいつが好きだ／＼

愛してると言ってもいい／＼

私の孤独を癒し、私の為に人間を辞め、500年間護り続けて貰った。

それにどんなに救われたかこいつには分かるまい。

だから正直、離れるのはイヤだ。

だがコイツは、トーヤは、

私を信じているから独りで行くと言っている。

それに答えない、

だけど離れたくない。

葛藤で揺れたがトーヤの「計画の準備があるから。」

の一言で思い出した。

かなり昔に言っていた「計画」の話。

曰く「俺は未来を知っている、

だが、その未来が気に食わない。

だから変えてやる。」

と、滅多にしない真面目な顔で言われたのを覚えている。

その後で「俺とエヴァとチャチャゼロ、

この三人でその未来を見て笑おうぜっ！」

と言われて苦笑したのも…

少なくともトーヤは私を蔑ろにしている訳じゃないというのを思い出した。

だから許可を出す。

「そうか…まあ良いだろう好きにしろ。

……さびしくなるな……」

前半に建前を、後半に本音を入れて…

トーヤ、その未来、面白く無かったら只じゃいかんぞっ！と思いな
がら。

s
i
d
e

o
u
t

魔法大戦編第一話：別れ、そして計画の始動。（後書き）

如何でしたか？

オリ主の痛い異名初公開www

そしてオリ主の計画準備開始です。

此处から原作崩壊がはじまっていきます。

これからも本作品をヨロシクお願いします。

第二話：拾った！？弟子一号！（前書き）

ちわゝ鳴る神です。

PV：55，000アクセス

ユニーク：6，200人

突破いたしました！

ありがとうございます！

これからもよろしくお願いします！

第二話：拾った！？弟子一号！

s i d e j a c k

俺はジャック・ラカン、帝国の少年奴隷剣闘士として今年1963年にデビューした。

だが結果はボロボロだ。

自分の攻撃は全部避けられ、相手の攻撃は全て当たる。
結局試合はボロ負け。

今は傷だらけで牢に入れられている。

「ちくしょうっ…次は必ず勝ってやる…っ！」

「ジャック・ラカン！

出るっ！お前は買われた！」

？、俺を買ったただと？勝った奴なら分かるが…

「早くしないかっ！」

「チッ！今出るよ…」

俺を買った奴の顔を拝みにいくか…

…

…

…

目の前にいるのは、18歳位の蒼髪碧眼の男。

黒いスーツを身に纏っている普通の男に見える…

だが違う、俺には分かる。

コイツは強者だ！

それも並みじゃねえ…さっきの対戦相手なんて目じゃねえくらいに。

「おーお前がジャック・ラカンか。

突然だが強く成りたいか？

自分の脅威を総て打倒し、自由に生きる力が欲しいか？」

力だ…？欲しいに決まってる！

打倒する力を！自由を掴む力を！！

「欲しいに決まってるだろがっ!!」

吼えた、これは俺の決意表明。
魂の叫び!

すると目の前の男はニヤリと笑って、

「俺は蒼埜 十夜。

お前に力を与える者だ。

力が欲しかったら付いてこい。」

そう行って歩き出した。

俺は勿論付いて行つた。

しかし、その時俺は地獄が始まると思っていなかった。

そして目の前の男が史上最高額の1000万\$の賞金首にして最強の吸血鬼、「超越種の超越種」と呼ばれる正真正銘の化け物だとはまだ知らなかった…

s i d e o u t

Side Toya

後ろに付いてくる気配を感じながら俺は思った。

ラカンゲットゥと。

エヴァ達と別れてもう60年近く経つ。

この60年はひたすら資金集め&バトルのレベルを上げるため「完全なる世界」に関係している施設や関係者を探してはボコボコにしていた。

いやゝ良いよねゝ秘密結社だから潰しても誰からも文句出ないし…何よりあいつ等、エヴァの腹ブツ刺しやがって！それに後々邪魔になりそうだし今の内に出来るだけ勢力を落としておこうって訳だ。

そして今、幼少ちびっこラカンを奴隷から解放し、プロジェクト第2段階のラカン強化作戦を発動した。

俺は「紅き翼」のメンバーは大体好きなのでいつか戦ってみたいと思っていた。

しかし俺は自惚れで無ければまず間違いなく世界最強だと思う。だから先ずは「紅き翼」のメンバーを強くする為にちびっこラカン

死ぬかつ！？消えるかつ！？鼠の様に逃げおおせるか！！どちらか選べええええええええええいつつつ！！！！！！」

ドガガガガガガッッッッ！！！！！！

「だから無理だつてえええつつ！！！？？」

………

「今日の俺は紳士的だあ…運が良かったなあ…」

バル。トスこつこしゅーりよ。

「師、師匠…昨日もそれ言っていましたよ……ガクッ！」

「おお弟子よ、死んでしまうとは情けない…」

「師匠の扱きに耐えられる奴がいたら見てみたいぜ…」

今俺は趣味のネタをしながらラカンに修行をつけていた。

ラカンは凄まじいスピードで成長している。

やはりラカンは俺と相性が良いみたいで、真綿に水が染み込むが如く俺の戦闘スタイルを理解し自分の物にしている。

見ていて気持ちいい位に。これなら将来俺の敵になりえるだろう。

「さあラカンっ！今から二人で感謝の正拳突き一万本だ！」

「あれかよ！これって意味あんのかよ？」

「バカ野郎！！」

ボグウツ！！

「ぺるとんっ！？」

「今の俺の拳でわからねえのか！
だからお前は弱いんだよ！！」

「！？」

「大体この修行は続けてこそ意味が有るんだ！！
そういうセリフは続けてから言えっ！！」

「師匠っ！俺が悪かった！感謝の正拳突き一万本やらせてください
っ！！」

「よしっ！ちゃんと感謝を捧げてから打つんだぞ！」

「押忍っ！」

何か段々ラカンが染まっていく…

まっ
いっ
か！

第二話：拾った！？弟子一号！（後書き）

ラカン修行中ですwww

これからラカンは主人公に頭が上がりませんでしょう。

作者は「紅き翼」は自分の主義主張を貫く所に好感が持てますのでアンチが入り難いです。

普通の魔法使いは嫌いですが。

感想待ってます！

第三話、ラカン修行終了！新たな旅立ち。（前書き）

ども、鳴る神です。

P V : 6 3 , 5 0 0

ユニーク : 6 , 8 0 0

突破致しました！

これから本作と作者をよろしく願います！

第三話、ラカン修行終了！新たな旅立ち。

side jack

「シエヤッ！」

俺の気合いと共に放った拳が以前ボロ負けした相手の腹に突き刺さる。

ドゴッッー！

「ぐはぁ…」

ドサッ

『おつと〜！？ラカン選手強い！強すぎるっ！一年前とは別人だ〜っ！一体何があつたんだ〜っ！！？？』

何が、な…地獄だったさっ…！

朝、起床と共に師匠の気弾の絨毯爆撃でお迎え、それから一日の食事の為に竜種と戦い倒す。

昼、ひたすら感謝の正拳突き一万本。終わり次第基本の型の練習をまたひたすらやり続ける。

夜、一番の地獄…師匠と延々組み手、気絶しようが骨が折れようが魔法薬ですぐさま回復。

師匠がバ。バトスごっこモードに入ると一番ヤバイ。「ふゝるらあああああああつつつつ!」のかけ声と共にひたすら殴られる。

軽くトラウマだ…

「や、やめろ!やめてくれええつつ!バルバ。スガ!バル。トスがくるうううつつ!?!?」

『おつとゝつ!?!ラカン選手いきなり錯乱したぞおつ!?!大丈夫かあつ!?!とにかくつ、ラカン選手の優勝だあゝ!?!』

………

………

…

帝都の外れの遺跡。

「おおゝラカン、お前漸く優勝したのか?遅すぎだろゝ」

今俺の目の前にいる蒼髪碧眼の18歳位の男が俺の師匠、蒼埜十夜だ。

こんななりだが世間では今は共にいないが「闇の福音」と共に「拳皇」、「一人軍隊」、「超越種の超越種」等々、様々な異名を持ち恐れられている真正正銘の化け物だ。

「師匠とは違うんだよっ！」

一年前に師匠に買われてから地獄を見てきた。確かに強くなった、前とは比較出来ない位には。

今なら一対一なら大概の奴に負けることはないレベルだと自負している。

無論、師匠は別だ。

寧ろ修行して強くなる度に師匠がどれだけ強いかわかってしまう。突きや蹴り、回避の動作、一つ一つが500年の永き時を経て練磨されている。

きっと俺は人生で一度も勝てないだろう。

因みに師匠に何で俺を育てたのか聞いてみたところ、「暇だから。後、目が良かったから。」らしい。

「お前それでも俺の弟子かよ？あんな奴等近付いて、殴って、それで終わりだろうが。」

うるせえっ！

移動や殴る度に音速超える奴が何言ってるんだ！

「まあ、これでお前の卒業試験は終了だな。」

そう、俺が拳闘大会に出場したのは俺の卒業試験の為で、自分はそろそろ旅に出るから実力を確かめたかったらしい。

「まあ、それぐらい実力が有れば一人でも大丈夫だろ。」

「ケツ！やつと地獄から解放されるぜ……」

ホントにアレはやバかった、綺麗な川に何回も飛ばされて鎌持った美人の姉ちゃんと愚痴仲間になっちまったぜ。

「じゃあそろそろ俺は行くぜ、元気でやれよジャック。」

「言われなくても分かってらあ、そっちこそ俺以外の奴に負けて野垂れ死ぬんじゃないぞ。」

まああり得んがな。

「言ってる、クソガキ。……それからジャック、近い内に必ず戦争が起こる。それも馬鹿デカイ奴だ、その戦争に俺はいるからな、そこで強くなったかどうか見てやるよ。精々それまで修行しな。」

戦争だと!?

何で解んだよ……いや、それよりそこで闘うってことか!?

「上等だあ!!必ずテメエをぶっ倒してやつからな!首洗って待つてろや!!」

「おーよ、待っててやるよ。」

……今度こそ、じゃあな。」

そう言って笑ってから背を向け歩き出す師匠。

その背中に今までの気持ちをつづける。

「師匠っ！ーありがとうございますっ！ー！ー！ー！ー！」

肩越しに手を振る師匠の後ろ姿を深く礼をしながら見送る。
感謝を込めて。

s i d e o u t

s i d e T o y a

肩越しに手を振りながらラカンに別れを告げる。

「次はまた暫く「完全なる世界」の拠点潰しか…」

また賞金上げられんよな？その後は…

「麻帆良だな…」

あゝエヴァに会いたいなゝ

潤いが欲しいなゝ

イカン、我慢だ我慢。

どうせ麻帆良で二人でゆっくり出来る筈なんだからそれまで我慢。

でも…

「やっぱエヴァに会いたいなゝ」

そう呟きながら…

第三話、ラカン修行終了！新たな旅立ち。（後書き）

ラカン修行編終了です。

次回はまた時間が飛んで麻帆良武闘大会です。

感想お待ちしております！

第四話：まほら武道大会！オリ主vsナギ！（前書き）

どうも鳴る神です。

PV：80,000アクセス

ユニーク：8,200人

突破致しました！

これからよろしく願いいたします。

第四話：まほら武道大会！オリ主vsナギ！

Side Nagi

1978年、麻帆良学園 まほら武道会会場にて。

よおっ！ 俺は最強の魔法使いになる予定の男、ナギ・スプリング
フィールド（10）だ！

つまねー魔法学校を中退して武者修行の旅にをしている、そして
今麻帆良学園つーとこに來ている。

何でも最強を決める大会だとか…正に俺が優勝するためにあるみて
ーな大会だぜ！

見た感じ俺より強そうな奴はいねーし楽勝だな。

…それにしても皆歳上ばっかだな、一番近い奴でも18位の蒼髪
碧眼の奴だし…

「こりゃ楽勝だな」

『選手の皆さん、予選を行いますのでそれぞれの指示された場所に
向かってください。』

ちゃっちゃと優勝してやるか！

s i d e o u t

s i d e T o y a

来たぜ、麻帆良学園！

此処に来たのは試合形式で天才を鼻にかけてるナギをぶっ飛ばす為だ。

最近「完全なる世界」の情報も入って来なくなっちゃったぜ…

潰し過ぎたか？賞金も1200万\$に上がったしよ…エヴァの二倍だぜ？

「完全なる世界」の奴等は近い内に起こる戦争の時まで力を蓄える気か？

まっ、そんな時はまた潰しますか。

『選手の皆さん、予選を行いますのでそれぞれの指示された場所に向かってください。』

よっしゃ！軽く揉んでやるかね〜

………
………
………

へー原作と同じく龍宮神社でやるのか…

舞台は20×20mの木製舞台で四方を水で囲われている。

予選はA〜Fの六回行われ、一つのグループに大体20〜30人程。ルールはバトルロワイヤルで金的、目潰しと呪文の詠唱禁止。

敗北条件は気絶または自らの降伏宣言、場外に10秒以上いること。A〜Fの勝者がまた六人でバトルロワイヤル、その勝者が晴れて優勝って訳か…

俺はFグループでナギはAグループ、試合は既に終わっており、ナ

ギは余裕で勝ち抜いていた。
好都合だ。

「さつさと片付けますか」

『それではっ！Fグループ、予選試合開始！！』

合図と共に気を練りながら全速力で踏み込み、舞台を爆散させながら人の群れに突っ込む！

舞台中央にたどり着いてから自らを中心に練り込んだ気を光と共に爆発的に拡げる！

「アサルトアーマーツ！！」

バシユウウウウツツ！！！！

光が消えるとFグループの参加者は俺を中心に舞台をすり鉢状に粉砕し、

参加者は俺を残して全員気絶し、場外に弾き飛ばされていた。

『おつとっ！？Fグループにて一人の選手が舞台中央に突っ込んだと思えば他の選手が吹き飛んだぞっ！一体何者だっ！？』

ネタ技「アサルトアーマー」決まったぜ

ただ気を”円”の要領で爆発的に拡げるだけだが雑魚には良く効く技だ。

『えー、只今情報が入りました！

あの選手の登録名は”機動戦士ガンダム”のようです！

つて、明らかに偽名だっ！？ますます謎が増えたぞっ！？ホントに何者なんだっ！？」

普通の吸血鬼さ！

s i d e o u t

s i d e N a g i

今俺の目の前で一撃で舞台を粉碎した野郎がいる。

18位の蒼髪碧眼のスーツを纏った男だ、パツと見何処にでもいるような普通の男なんだが…先程の試合がそれを否定する。

アノ技には馬鹿みたいな量の気が込められていた。
だがコイツはそれだけの気を使っていながら息一つ切らしちゃいね
ー。

つまりまだ余裕があるって訳だ……化け物が……

『さあっ！興奮冷めぬ内に本大会優勝決定戦の前に一人づつ選手の紹介をしたいと思います！』

他の野郎共はもうどうでもいい。

『Aグループを勝ち抜いたのは本大会最年少出場者のナギ・スプリングファイールド選手だあゝっ!!』

「フアアアアアアアッ
ツツツツツツ！！！！」

アイツを倒す為に他の総てを捨てる！

「……………ですっ！そして最後にFグループ勝者！最速で勝負を決めた経歴不明、本名不明！謎だらけの”機動戦士ガンダム”選手だあゝっ！！」

目の前の男も俺を見ている。

おもしれえ！

「それでは！まほら武道会優勝決定戦試合開始！つ！！！！」

勝負だこの野郎！

s i d e o u t

s i d e T o y a

『それでは！まほら武道会優勝決定戦試合開始っ！！！！』

うわゝナギが滅茶苦茶睨んでるんですけど…怖くないけどね

ならまずは周りの雑魚を潰しますか。

スーツのポケットに手を入れ気で強化し、抜き放つ！

パパパッッッ！！

周りの雑魚の顎を”居合い拳”で打ち抜き昏倒させる！

タカミチごときが努力で出来たのに俺に出来ない道理は無い！

『おつと〜っ！？何かが炸裂する音と共にナギ選手とガンダム選手以外の選手が気絶した〜っ！！一体何が起きたんだ〜っ！？』

「おいボーズ、かかって来な。」

指を振り挑発する。

「上等だ！この野郎っ！！」

ナギは周りに無詠唱で”魔法の射手”を9つ程待機させながら瞬動で突っ込んで来る。

「歳の割には速いな、おい。」

ホントに速い…確かに才能はあるんだろう。
それも桁外れの才能が…だがその程度で敗れる程温い修行をしていた訳ではない！

向かって来るナギを見ながら叫ぶ。

「ガンダム、出るぞっ！！」

気ではなく魔力で体を強化し瞬動を発動させて突っ込む！

莫大な魔力で魔法障壁を強化し叫ぶ！！

「デイストーションアタック！！」

莫大な真祖の魔力で強化した障壁を発動させ瞬動で相手に突っ込むだけの技だが、単純故に破り難い攻防一体の技！

ナギは慌てて魔法の射手を放って来るが全てDFに弾かれる。

無詠唱の魔法でこの技を破れるかなっ！？

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

N
a
g
i

クソッ！マジで化け物かよっ！

アイツが展開した馬鹿みたいに強力な魔法障壁は、俺の魔法の射手を軽々弾いている。

しかも本人が瞬動で突っ込んでくるからたまったもんじゃない！今は避けているが時間の問題だ！

現時点で対抗手段は2つ！

強力な魔法で貫く、しかし今はあんちよこも無いし何より詠唱出来ないから却下！なら残るは一つ！

振り返りアイツを見据えて叫ぶ！

「オラアアアアッッッ！！」

同じように障壁を強化して突っ込むことっ！

全力で魔力を強化と障壁に注ぎ込んでいく！

「ハッハアーツ！！正解だよクソ餓鬼！魔力比べと行こうか！！」

笑いながら更に障壁の力が増して行く！

「上等だゴラアアアアッッッ！！！！」

負けじと魔力を注ぎ込んで行く！

バチチチチチチッッッッ！！！！

障壁同士がぶつかり合いスパークしている。

『凄い！凄すぎるぞー！！只の激突が火花を散らしているぞおーっ！！』

この激突！果たしてどちらに軍配が上がるのか！！』

「おら、どーしたクソ餓鬼！押されてんじゃねーか！そんなもんなのかっ！？」

「んなわけねーだろがアアアアアアアッッ！！！！」

しかし確実に押されている障壁。

何でだ！？

同じ障壁で何でもここまで違うんだ！？

「同じ障壁とか思ってねーだろーなああっ！？」

「！？」

「俺とお前の障壁は全く違うっ！魔力の込め方！術式の無駄の無さ！障壁の密度！総てにおいてお前は負けてるんだよ！クソ餓鬼いいいっっっ！！！！」

バチチチチチバチイイッッ！！

急激に圧力が増し、弾き飛ばされる！

「ぐあっ！」

舞台ギリギリまで弾かれ止まる。

「所詮魔力の多さに頼るよーな奴はこんなもんなんだよ！」

「畜生…っ！」

言い返せない。

正にその通りだったから。

「喜ベクソ餓鬼！今から俺が手本を見せてやる！」

その瞬間奴の背中から魔力で出来た光の翼が生える！

「俺がガンダムだっ！！！」

言葉と共に瞬動で一気に突撃して来る！

「ぶっ飛べ！クソ餓鬼がああああっつっ！！！」

バギイイインッ！

俺の魔法障壁は易々と破壊され俺は奴の突撃を受け場外に飛ばされ倒れ伏した…………

s i d e o u t

『9・10、ナギ選手動かないっ！この瞬間優勝は”機動戦士ガンダム”選手に決定致しましたっ！！』

ふー思わずネタ技、「光の翼」まで使っちゃったぜ。
この敗北を切っ掛けにナギがあんちよこを使わずに魔法を使えるようになればいいがけどな…

ナギがあんちよこを使って戦っていたのはそれまでそれで何とかなっていたからだと思う。

その慢心を今叩き折ってやった訳だが…

倒れ伏すナギに歩み寄って行き声を掛ける。

「おいクソ餓鬼、聞こえるか？またいつか会う時までには強くなれ。
魔力の多さだけに頼ってるだけじゃ俺には絶対に勝てんぞ、魔導を

極める。」

背を向け立ち去ろうとすると背後で動く気配。

「ま…て、なま…え、おし…えや…が…れ…」

もう動けんのかよ。

しかし名前か…いいかな別に。

「十夜、蒼埜　十夜だ。」

「覚え…たぞ……」

ああ後三年でまたこいつと戦えるのか…楽しみだな…

そう思いながら麻帆良を後にした。

第四話：まほら武道大会！オリ主vsナギ！（後書き）

ゴメンwww

自重出来なかったwww

えーロボット系のネタが散りばめられております。
如何でしたか？

感想に複数ご指摘があり、少し長くなりました。

これからも本作品をよろしくお願いします。

第五話：大戦開幕！ナギvsラカン！（前書き）

ども、少し遅くなりました鳴る神です。

PV：100,000アクセス

ユニーク：10,000人

突破！感無量です！

これからも本作をよろしく願います！

第五話：大戦開幕！ナギvsラカン！

side Jack

1981年 ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の「大分烈戦争」
開戦。

帝都の自室にて約一年前にそのニュースを知る。

そして今、椅子に腰掛けながら呟く。

「そろそろか…」

師匠の言葉道理戦争が起きたな。

あれかね？師匠は未来でも知ってるのかね…

「ってことはそろそろ師匠と戦えるってことか。」

思わず口がつり上がる。

今なら勝てなくても前よりマシな勝負が出来るだろう。

「待つてろよ師匠…吠え面かかしてやつからなっ！」

コンコン

ああっ？誰だよせつかく人が良い気分だつてのに…

「入れよ。」

ガチャ

「ラカン仕事だ。」

思わず顔がにやけた。

丁度良い…、と思いながら…

s i d e o u t

とある溪谷の昼下がり。

今俺達「紅き翼」の俺、アル、お師匠、詠春、の4人は詠春の故郷の料理を食べている。

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ」

うまそうだぜ。

「そんじゃ、早速肉を」

そう思い肉を鍋に近づける。

「あっナギ！おまつ…！何先に肉を入れてるんだよ！？」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「いいじゃねえか旨いもんから先でよ！ホラホラ」

ひよいひよいつと肉を鍋に放り込む。

「バツ、バカ！火の通る時間差というものがあってだな、まずは野菜を入れてだな…あーちょッおまつ！」

うるせーな

「あゝうつせ！うつせーぞえーしゅん！」

「フフ…詠春、知っていますよ、日本では貴方のような者を「鍋將軍」と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・シヨーグン！？」

シヨーグンって確か偉いんだろ？

「つ…強そうじゃな。」

お師匠の言うとうりだぜ…

「わかったよ…詠春、俺の負けだ。
今日からお前が鍋將軍だ…」

「全て任す、好きにするが良い。」

「んー…嬉しくないなあー」

んだよ詠春、嬉しく無いのかよ。

「紅き翼」食事中…

「うめーな！しょうゆって」

マジでうめー。

「日本が誇るしょうゆだからな…」

ん…？

そーいやあの野郎の名前って詠春のに似てるよな…

「なー詠春。」

「なんだ？肉はまだ入れんぞ。」

「ちげーつつの、蒼埜 十夜って知ってるか？」

「蒼埜？あああの賞金首の。」

なっ！？

「知ってるのか詠春！？」

「知ってるも何も史上最高額の賞金首の男じゃないか。有名だろ？」

「フム、ワシも聞いたことがある。」

何でも「拳皇」じゃとか「血塗れの鬼」等と呼ばれとるらしいの。」

「ええ、私も聞いたことがありますね、ところで…ナギの反応だと会ったことがあるように聞こえますが？」

「ああ、昔戦って負けた。」

ああ思い出したらム力ついて来た…！

「「「！？」」」

「おまつ！あの「万剣の長」とやったのか！？よく無事だったな」

剣…？

「剣なんて持って無かったぞ。」

「いや、何でも空中から剣を取り出して攻撃するらしい。」

チッ！あいつまだ本気じゃ無かったのかよ…

「フフ…ナギのその執着だと何か言われたのでは？」

「ボコボコにされた後で『おいクソ餓鬼、またいつか会う時までには強くなれ。魔力の多さだけに頼ってるだけじゃ俺には絶対に勝てんぞ、魔導を極めろ。』っだだよ。」

「フム…何かの？つまりまたいつかそやつと戦うということかの？」

「ああ、だからお師匠にも弟子入りしたしあんちょこを使うのも止

めた。

何よりあの野郎に勝たなきゃ世界最強には永遠になれねえ。」

「ナギ…そんなに強いのですか？」

「ああ、正直今の俺でも勝てるかどうか…」

「！？、ナツナギが弱気発言だと…！」

うつせーぞ。

「！？」

素早くその場を離れる！

ドカツ！！

頭上より降ってきた巨大な剣が鍋を破壊し辺りに肉を撒き散らす！

「アツチイツツ！？」

あ、詠春が鍋を被った。

それを横目で見てから、宙に浮いている肉を箸で掴みつつ剣が飛んできた方を見る。

「食事中失礼…ツツ！俺は傭兵剣士ジャック・ラカン…！」

崖の上には剣を担いだ暑苦しそうなお大男がいた。

「最強の師匠と戦う前のウォーミングアップをしてくれやつ！」

最強だと？

「邪魔だ。」

ゲシッ

「あぼろっ！？」

未だに転がっている詠春を蹴飛ばし叫ぶ。

「なら、最強の魔法使いになる予定の俺が相手してやらあ！」

「はあ？最強は師匠だったの、まっ二番手は俺だな！」

プッチン

「てめえら、手エ出すなよ。」

こいつは俺が倒す！

「言われずとも。」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ。」

ハッ、そーかよ！

「おいおっさん、いいのかよ？剣なしで。」

「気にすんな、師匠に仕込まれたのは拳だ。」

「は！」

「フン！」

ゴシャッツ！！

二人同時に瞬動をしクロスカウンター気味に殴り合う。

「ぐおっ！」

「は！」

体重差で俺は吹き飛ばされるがすぐさま体勢を立て直し分身し、再び突撃する。

が、

「ぬふんっ！」

ドウッツ！！

気合いとともに全て分身は辺りの地形ごと掻き消される。

煙に紛れ呪文を詠唱する！

「百重千重と 重なりて 走れよ稲妻」

「大呪文かッ！」

「千の雷ッ！！！」

ドッッッ！！

「この程度師匠の爆撃にくらべりゃ屁でもねえっ！！」

オイオイ「千の雷」で倒れねえのかよ…

「てめエの師匠は化け物かよっ！」

言いながら無詠唱の魔法の射手を放つ。

「化け物だよっ！！」

相手は意に介さず進んでくる。

お互いに叫び一撃を繰り出す！

「オッラアアアアアアアアアアッッッッ！！！！」

……

……

…

「フ…フフ…やるじゃねえか小僧。」

ボロボロの男。

「あんたこそな。」

俺もボロボロだがな…

「師匠以外で初めてボロボロになったぜ…」

「さっきから師匠師匠と…誰だよ師匠って?」

「あーこの戦争にいる筈なんだがな…
名前は蒼埜 十夜ってんだ知らないか?」

「!?!」

何!?

「お前アイツの弟子か!?!」

どーりで強いわけだぜ…

「ああ、子供の頃に一年程修行をつけてもらった。」

「それよりアイツはこの戦争に入るのか!？」

それが重要なんだ!

「ああ少なくとも15年以上前から戦争を起きるのを知っていたし、俺にこの戦争でもう一度戦ってやるって言われたしな…」

「15年以上前からだと!？」

「ああ、戦い続ければいつかこの戦争で会っだろうよ。」

「ヘッ!安心し…たぜ…」

気が抜けて…意識が……

s i d e o u t

気絶しやがった。

どうやら師匠に負けたらしいな…この歳で師匠に勝てるかつての。師匠の力は何千何億と繰り返した時間の強さだ…アレに対抗するには才能だけじゃ絶対に勝てない。

「おやおや…ナギが負けましたか…」

白いローブを着たヤツ

「ウム、僅差のようじゃがの。」

ジジイ言葉のガキ。

「おいおい、辺りが焦土だぞ…」

刀を持った眼鏡の男。

「この小僧の仲間か？ちよいとコイツに伝言頼むわ。」

「承りました。なんでしょうか？」

「リベンジはいつでも受ける…ってな」

「はい、確かに伝えましょう。」

頼むぜ……

「じゃあ……俺……寝る……か……ら……」

意識が落ちる……

第五話：大戦開幕！ナギvsラカン！（後書き）

ナギvsラカンです。

ナギも原作より強いですが、ラカンの方がオリ主の地獄の訓練を受けたので少し強いです。

只今違う作品を調子に乗って執筆中ですので更新速度が1日一話位になってしまいかもしれませんが、すみません！

感想お待ちしております！

第六話：敵は「完全なる世界」！（前書き）

鳴る神です。

更新ペースが落ちてきた…

戦闘シーン苦手だよお（涙）

第六話：敵は「完全なる世界」！

Side Jack

「紅き翼」がグレートブリッジ奪還作戦で活躍。

ナギ（14）、連合から「千の呪文の男」として讃えられる。

あれから何回か戦ってる内に、こいつらと一緒にいた方が師匠に会えるんじゃない？ ついでに戦争で修行できんじゃない？ と思いいたり「紅き翼」に入ったラカンだ。

前のグレートブリッジ奪還作戦八面六臂の大活躍！

おかげであのバカは敵兵には「連合の赤毛の悪魔」と恐れられ、味方には「千の呪文の男」と讃えられた。

この一大決戦で戦況は大逆転！ 連合は勇躍、敵軍を攻め戻し、帝国領内へ躍進する。

ガトウやタカミチといった新たな仲間達との出会い…
そして判明する敵の正体、帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んで
いる秘密結社「完全なる世界」

…

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ。」

ぼやくナギ、俺も同意だな。

「あつてほしい人がいる、協力者だ。」

新しく仲間になったガトウが答える。

「協力者？」

「そうだ。」

俺達以外の声。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

カツカツカツ

足音を響かせながら入ってくる白いローブを着た女らしき人物。

「ウェスペルタティア王国…アリカ王女様だ。」

近くで見ると別嬪だった。

「……………」

「ん？」

ナギが惚けてやがる…惚れたか？

…
…
…

「ワハハハハ！上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじやねーよお姫様とイチヤイチヤキヤイキヤイおしやべりしてたろーがッ！」

「してねっつの！何がイチヤイチヤだ！バカ！」

「なーに言ってんだよ、俺なんか…「気安く話しかけるな下衆が。だぜ」？いや、ありやイイ女だぜー本芯の通つたな。」

あんな女は中々いねえぞ。

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？
俺あんなおつかねえ女見たコトねえぞ。」

プッ

「グハハハハハ！そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな
！てめーわよ！」

あんだだけ見惚れといて何言ってやがる！

頭をグリグリ撫で上げる。

「んっだ、そりゃ！？意味わかんねえ！
触んなっつーの！勝負すつかてめー！？」

「ああん！？上等だ、ごらあー！」

ケンカに発展して結果は引き分けた。

……
……
……

姫さんが助けを求めてきた理由は何でも、王国がヘラス帝国とメセ
ンブリーナ連合の勢力境界に位置していたため、

自ら調停役となつて戦争を終わらせようとしていたらしい。

「要するに戦争やりたいやつらがいるんだろ、まーた「あいつら
か!？」」

「「完全なる世界」帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイ
ア内部にまでシンパがいるようだ……」

―そこで俺達は休暇中、「完全なる世界」についての独自の内偵を
開始した。

……といつても、俺やあのバカはどう考えても調査向きじゃなかった
からもつぱら他の奴らに任せつきりだな。

俺は時ならぬバカンスを楽しみ、あのバカもそれなりに首都での休

暇を楽しんでいた…ように俺には見えた。

しかし、ガトウの確かな情報によるとメガロメセンブリアのナンバ
ー2の執政官までもがやつらの手先とわかった。

俺が珍しくシリアスをしている間にあのバカは姫さんを一昼夜連れ
回した挙げ句、俺に内緒で敵の本拠地を潰しやがった（ちくせう）。

まっ何やらナギと姫さんの仲もどうやら進展したみたいだな ニヤ
ニヤ

姫さんはその後帝国の第三皇女と接触するために俺達と別れた。

そして今、俺達はナギのつけてきたメガロメセンブリアの執政官
がこの戦争に加担しているという証拠を手に、本国首都のマクギル
元老院議員を訪ねにきた。

「マクギル元老院議員、証拠をお持ちいたしました。」

「そうか―ご苦労だったね…」

「それより法務官は何処に…？」

「法務官は来られない…」

「は？」

「何故なら此処で君達は死ぬからだ…っ！」

そう言った瞬間俺達の足元強力な捕縛魔法が発動され捕らえられてしまった！？

「なっ…！てめえ！マクギル元老院議員じゃねえなっ！？」

ナギがそついうとマクギル元老院議員の姿だったものは白髪の青年に変わった。

「正解だよ「千の呪文の男」僕は「完全なる世界」の者さ。」

「「「！？」」」

ナギ、俺、ガトウが驚く気配。

「何故正体をばらすっ!？」

「簡単さ、なにふりかまわずにやらないともう後がないんだ…これも全て君達とあの忌々しい「拳皇」のせいだよ。」

「!？」

俺とナギが反応する。

「「拳皇」は百年程前から僕達の施設や関係者を潰し回っているのさ、お陰で僕らの勢力はボロボロにされ、君達の相手が出来る人も僕以外にはいない。もはや手段を選ぶ段階じゃないのさ。」

改めて思っぜ…師匠って何者？

―化け物だよ―

何か幻聴が聞こえる…

「まっ、生身の敵のが政治家だ何だとガチ勝負できない敵にくりやべりゃ…」

捕縛魔法を力強くぶち破る！

バキイイイインツツ！！！！

ナギとガトウも破ったようだ。

「万倍！！！！戦いやすいぜツ！！！！」

「そう簡単にはやられないよ、ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァン
ゲイト おお 母なる大地よ 其の力もて 我に仇なす眼前の敵を
呑み込まん！」 慈母の晚餐”」

ガバアアアツツ！！！！

奴の呪文により地面が口のように拡がり俺らを呑み込もうとする！

「させるかッ！！！！」

ガトウが感化法を使い無音拳を地面に叩き込む！

ドガッ！！

地面は沈黙。

その隙に俺とナギが接近戦を仕掛ける！

「ナギイ！合わせろおっ！」

叫びながら大剣を射出する！

ゴアッ！

「誰に言っただよっ！来れ雷精 風の精！！ 雷を纏いて 吹き
すさべ 南洋の嵐 ” 雷の暴風 ” ！！」

それに合わせてナギが至近距離で魔法を叩き込む！

ドギヤアアアアッツ！！！！

辺りを破壊しながら白髪の野郎に直撃する！

「やったか？」

「まだだ！？」

煙に紛れ転移魔法で俺の後ろに現れた！？

「確実に仕留めさしてもらっよ、障壁突破 “石の槍”」

ドシュッ！！

その瞬間地面が凄まじい勢いで伸び、あたかも槍のように俺の腹を貫いた！

「ゴハアッ！？」

クソッ、ナギ！ガトウ！構わねえ俺ごとやれえっ！！」

叫びながら白髪の野郎をガッチリと拘束する！

「な！？死にたいのか！？」

確かに今俺の腹には風穴が空いているが…

「ケツ！こんな傷師匠の扱きに比べりゃ屁でもねえっ！！ナギィ！早くしろ！！」

「ッ！？死ぬなよジャック！！百重千重と 重なりて 走れよ稲妻！
”千の雷”！！！」

「チッ！ここは退かしてもらっよう！」

パシヤッ

水の音と共に消える白髪の野郎。

えっ、これやばくね？と思っている間にナギの”千の雷”が俺に…

ドガッッッ！！！！

意識が飛んだ。

S i d e
o u t

S i d e
N a g i

「あつ…」

”千の雷”を放った瞬間白髪頭が転移を行い、代わりに腹に風穴の空いたジャックに直撃した。

「やべーアレ死んでね？」

思わず呟く。

「ハッ！ナギ！ラカンを助けないと！！」

ガトウの言葉で我に返り慌ててジャックに走りよって行く。

死んでなきゃいいな～と思いつつ。

第六話：敵は「完全なる世界」！（後書き）

オリ技紹介。

「おお 母なる大地よ 其の力もて 我に仇なす眼前の敵を呑み込まん！ ”慈母の晩餐”」

地面を变形させ相手を呑み込み、何万トンの重さで相手を圧殺するエグい技、呑み込まれたらほぼ逃げる手段は無い。
高等呪文。

ハイ遅くなりました。
難しいですね戦闘シーン。

最近オリ主が空気に…
大丈夫！そろそろでるから！

感想、ご指摘お待ちしております。

第七話：夜の迷宮、なんでお前がそこにいる！？（前書き）

鳴る神です！

PV：179,000アクセス

ユニーク：18,500人

突破しました！最近更新ペースが落ちてきてますが必ず更新し続けますのでどうかこの駄作をよろしく願っています。

第七話：夜の迷宮、なんでお前がそこにいる！？

S i d e T e o d o r a

妾の名はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア、帝国の第三皇女じゃ。

ウェスペルタティア王国の王女アリカ姫との会談の時に拐われてしまった。

今は夜の迷宮というところに捕らえられているのじゃ。

妾はアリカ姫が先に寝てしまい、暇になったので探検をしていたのじゃが…

「お主はだれじゃ！？」

入った部屋の中に先客がおりおった。

部屋の隅で寝転がっている仕立ての良いスーツを着たその男は、目を開きこちらを見た。

黒に近い蒼の髪、そしてなにより目を引く綺麗な澄みきった碧眼が特徴的な男だ。

「ああ、気にしないーい、気にしないーい。
ゆっくりしてってね」

男は寝返りをうち、背を向ける。

「まつのじゃ！こつちを見よ！」

近寄り肩を揺する。

ゆさゆさ

「こつちをみーるーのーじゃ！」

ガクガクガクガクガクッ！

ぷち

「ウザイっ！何のようだ！？」

やっとこちらを見よった。

しかし、よく見ると美形ではないか／＼／

「フン！無視するのが悪いのじゃ！

それで…お主はだれじゃ？何故ここにおる？」

胡座をかきながらこちらを見て

「俺は蒼埜 十夜、

ここにいる理由はバカ弟子＋１とケンカするため」

「！？」

アオノ トーヤじゃと！？

こやつが歴史史上最高額の賞金首であり最強の吸血鬼、「超越種の超越種」じゃと！？

思わず後退りながら強がりを言う。

「うっ、嘘を言うでない！

あのアオノ トーヤじゃたら妾なぞ今頃頭からバリバリ食べられておるわ！」

アオノ トーヤと言えば泣く子が悲鳴を挙げると言われる極悪人じやぞ!?

女子供の血が大好きらしいし…

するとアオノは少し苛立ちながら、しかし、自信を持ってこう言っ
た。

「ハッ！俺は女子供は襲わねーぞ、なんたって「誇りある悪」だからな。」

誇りある悪？

「「誇りある悪」じゃと？
なんじゃそれは？」

悪に誇りなどあるものか。

「「誇りある悪」とは何時如何なる時でも自分のしたことに誇りを持ち、いつか自分より巨大な悪に殺られるのを覚悟し生きる者だ。それに、俺は悪党だが悪人じゃねえ。」

「???」

覚悟？悪党？悪人？
何が違うのじゃ？

「ハッ！嬢ちゃんには早かったかな？」

むーっと

頬を膨らませる。

「嬢ちゃんではない！妾にはテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・
ヴェスペリスジミアという立派な名前があるわ！」

どーだ、参ったかと胸を張る。

「いやいや、立派過ぎんだろ…
テオドラ・バシ…ええい！なげえっつの！テオドラな！テオドラで
決定！！」

な／／／／

「勝手に名前で呼ぶでないっ！」

頬が熱い。

男に名前で呼ばれるなど初めてじゃ…

「いいじゃねえか」暫く一緒に閉じ込められるんだしよ」仲良く行こうぜ、仲良くな。」

「なっ！？お主最強の吸血鬼じゃろ！？
脱出できぬのか！？」

すると奴はめんどくさそうに。

「できるけど嫌だよ」
言ったしよ？バカ弟子＋１とケンカするためだつて。」

バカ弟子＋１？ケンカ？

「誰じゃそのバカ弟子＋１とは？」

「「紅き翼」のジャック・ラカンとナギ・スプリングフィールド。」

「ぶっ！」

思わず吹いてしもうた。

妾でも知っている超有名人じゃ。

「紅き翼」といえば我がヘラス帝国に敵対する最悪の敵。

しかもその中の最強格、「伝説の傭兵剣士」に「連合の赤毛の悪魔」じゃと!?

いや、それより!

「師匠じゃと!?!」「伝説の傭兵剣士」ジャック・ラカンの!?!」

「ハッ! あいつも大層な異名をとりやがったな…

ああ、ジャックの野郎に基礎を叩き込んだのはこの俺だ。」

道理で強い訳じゃ…

「ならば、ナギ・スプリングフィールドとはどのような関係なのじゃ?」

連合の赤毛の悪魔とは一体どのような関係なのか気になるのじゃ。

「ああ、ナギは昔とある大会でプライド叩き折ってやったんだよ。」

…もう、なにに驚いたらいいのか…

「多分「紅き翼」はテオドラ達を助けに来るだろうからな。そんな時にどんぐらい強くなったかみてやろうと思っとな。」

内緒にしとけよ、驚かせるから。

と齒を見せながら、いたずらっ子のような笑顔で言うトーヤ。

その笑顔を見て不覚にもまた熱くなった頬を誤魔化すように喋る。

「う、うむ／＼／＼

と、ところで！妾は暇じゃからお主の話でも聞かすのじゃ！」

「トーヤでいいぞ、お主とか堅苦しい言い方しなくても呼びやすい呼び方で呼べ。」

「／＼／＼でっではトーヤ！

トーヤの話を聞かすのじゃ！」

全く不意打ちじゃぞ…

「ハイハイお姫様…」

それから妾は助けが来るまでトーヤの話に聞き入った…

………

………

…

暫くアリカ姫が寝入ってからコッソリトーヤの所に行き色々な話を
してもらった日が続き、ついに「紅き翼」が妾達を助けにきよった。
トーヤは「紅き翼」の隠れ家についてから姿を現すらしい、奴等の
トーヤを見た時の顔が楽しみじゃ♪

s i d e o u t

S i d e N a g i

ズウンッ！

姫さんと帝国の皇女がいるであろう部屋の邪魔な壁を叩き壊し中に入る。

「よお、来たぜ。
姫さん。」

中には姫さんと色黒の角を生やしたガキが一人いる。

「遅いぞ、我が騎士。」

いつもど通りの姫さん。

「へッ、わりいな。」

「一先ず俺らの隠れ家に行こうや。」

………
………
………

タルシス大陸極西武オリンポス山「紅き翼」隠れ家。

「何だ、これが噂の「紅き翼」の秘密基地か！どんな所かと思えば……掘っ立て小屋ではないか！」

「隠れ家に何期待してんだこのジャリはよ。」

「むっ！」

何だ貴様！無礼であろう！」

「へっへっん、こちらら生憎ヘラスの皇族には貸しはあっても借りはないんでね！べろべろばっ！」

「何い？貴様何者だっ？」

「俺は「伝説の傭兵剣士」ジャック・ラカン様だよっ！」

「お前がか！？

こんなバカだとは…」

「何い！？」

「あのやけに元気な少女が…」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。

なんでもアリカ姫と交渉の為に出向いた所と一緒に敵組織捕縛され

ていたのです。」

ギヤイギヤイガヤガヤ。

向こうは何かバカやってんな

「さーて姫さん。

助けてやったはいいいけど、こつからは大変だぜ？連合にも帝国にも…あんたの国にも信用できる味方はいねえ。」

「恐れながら事実です、王女殿下。

殿下のオスティアも似たような状況で…

最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」…という可能性さえ上がっています。

我々は最早連合内に信用できる場所が無いので連合軍から抜けました…」

俺の言葉をガトウが補足する。

俺達「紅き翼」は連合内のどこに敵がいるのかわからないので、連合を抜けだし独立して戦争を終わらせるに動いている。

「やはりそうか…

我が騎士よ。」

「だあら、その「我が騎士」って何だよ！姫さん！？クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

恥ずかしいっつもの！

「もう連合の兵ではないのだじゃろ？
ならばお主は最早私のものじゃ。」

「な…っ」

「連合に帝国…そして我がオステイア。
世界全てが我らの敵という訳じゃな。」

確かに、こんな不利なケンカはあの野郎以来だな…

「じゃが…」

主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

他人から初めて言われたな。

「世界全てが敵―良いではないか、」

こちらの兵はたったの7人、だが最強の7人じゃ。」

「ならば我等が世界を救おう！

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ。」

「…へっ、だから俺は魔法使いだっつーのに…」

おもしれえじゃねえかつ！

思わず口がつり上がる。

「やれやれ、

相変わらずおつかねえ姫さんだぜ…」

姫さんの前に行き、片膝と片手を地面につき騎士のポーズをとる。

「いいぜー

俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

姫さんは剣を肩に置き祝福を与える…

そんな時だった。

ぱちぱちぱちぱち

「いやゝいいもん見たわゝ！」

拍手をしながら現れた、あの時と何一つ変わっていない男…蒼埜十夜が。

第七話：夜の迷宮、なんでお前がそこにいる！？（後書き）

第七話でした。

この後書きは一度作者の技量不足のせいで消えてしまいました。
すいませんでした！

第八話：「紅き翼」vsオリ主！（前書き）

鳴る神です。

PV：210,000アクセス

ユニーク：21,000人

突破いたしました、ありがとうございます。

本作は駄作です。

誰か作者に文才をくれ…っ！

第八話：「紅き翼」vsオリ主！

Side Arika

「いやゝいいもん見たわゝ！」

男が現れた瞬間に場の空気が張りつめた。

我が騎士だけでなくこの場にいる戦闘ができる者全てがその男を警戒する。

「なんつーの？」

絵になるって感じ？

いやゝあの時のガキがでかくなつて…」

腕を組み一人でウンウン頷く男をここにいる世界最強クラスの者達が警戒している？

どこにでもいそうなあの男を？

「姫さん…絶対に離れるなよ。

目を離したら殺られると思いな…」

それと…さっき言つてた俺が最強つてやつあつたら？今から本当に最強かどうかわかるぜ…」

我が騎士が今まで見たことがないぐらい殺気立っている。

「いや、テオドラさつきぶり、
ナギ& amp; ジャックは久しぶり、
他の皆さんは初めまして。」

恭しく礼をとる男。

帝国の第三皇女は嬉しそうに手を振り、
我が騎士と傭兵剣士は口をつり上げる。

「ああ久しぶりだな、師匠！
会えて嬉しいぜえ、っ！」

「俺もだぜっ！
会いたかったぜ！蒼埜 十夜っ！！」

s i d e o u t

分からなかった。

いつ現れたのか、どうやって現れたのか。

ガトウさんは既にポケットに手を入れ臨戦体制で、他の皆さんもいつでも戦える体制に入っている。

「俺もだっ！

会いたかったぜ！蒼埜 十夜っ！！」

ナギさんが歓喜の声を挙げたが僕はそれどころじゃなかった。

蒼埜 十夜っ！？

最強の賞金首がなんでこんな所に！？

「あゝジャックとナギ以外はわかんと思うが俺がここに来た理由はな……」

喋りながら構えをとる。

ただ手を下にダランと下げるだけの型。

しかし、隙が無い。

まだまだ未熟な僕から見ても完璧な構え、どこから攻撃しても必ずカウンターを喰らう……そんな構えだ。

あれは確か無形の構え、武術を目指す者にとってあの構えは一つの到達点であり、自然体故に極めることが難しい型。

その型をとりながら言った。

「近頃最強とか言われてる「紅き翼」とな…ケンカするためだよっ
！」

その瞬間、「紅き翼」の人全員が一斉に攻撃を開始した。

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

T
o
y
a

コ
ウ
ッ
！

言い切った瞬間にいきなり辺りの重力が増した。
恐らくアルビオレ・イマの重力魔法なのだろう…
しかし、

「しゃらくせえっ！」

普段から”不滅の重力”で負荷をかけ続けた俺には殆ど意味はない。
無形の構えから拳を腰だめに構えながら全身を気で強化し、自らの
魔法が全く効いていないことに驚き目を見張るアル目掛けて瞬動で
一気に近づき魔法障壁ごと殴り飛ばす！

バゴオツツ！

追撃をかけようとしたところに詠春が斬りかかってきた。

「せあッ！」

慌てることなく詠春の刀、夕風の軌道に手を掲げ心の中で詠唱する。

創造の理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

蓄積された年月を再現し

あらゆる工程を凌駕しつつし

——ここに幻想を結び剣と成す——！

「——投影、開始トレース オン」

掲げた手の内に現れたのは岩でできた巨大な斧剣。

詠春の夕風を斧剣で受け止めながら斧剣に宿りし経験を模倣する。

「——投影、開始トレース オン

——投影、装填トリガー オフ

全工程投影完了——是、射殺す百頭セット ナインライブズブレ
イドワークス」

かのヘラクレスの神速の九連撃を模倣し詠春に叩き込む！

ドガガガガガガガッツッ！！！！

「うおっ！？」

詠春は慌てて防御を行うが、吸血鬼の真祖の圧倒的なパワーで岩の
斧剣を叩きつけた重さは半端ではなく、しかもそれを九連撃となる
と普段片手で刀を持っている詠春の力で耐えられるわけがなく刀を
弾き飛ばされる。

「もらった！」

刀の無い詠春など俺からしてみれば雑魚でしかない訳で、すぐさま

懐に入り込み、下から挟り込むようなパンチを腹に当てる。

ドフウッ！

「ケハッ！？」

詠春は咄嗟に気でガードしたようだが、急造のガードなどが俺の拳に耐えられるはずもなくあっさりと意識を飛ばされる。

一人！

魔法使いの面々は仲間が近くにいるので大規模な呪文は使えないように、うで攻撃が薄い。

魔法使いの面々の位置を確認し、空に飛び上がりこの世界で俺にのみ許された呪文を唱える。

「――投影、開始トレース オン」

俺はエミヤシロウと違い魔術回路は存在しないので、投影できる武器の数に限りなどない。

「――工程完了。全投影、待機ロールアウト バレット クリア」

故に一度に魔力が許すかぎり幾らでも武器を投影できる。

現れたのは百を超える武器の数々。

聖剣、魔剣、魔槍、聖槍、などあらゆる武器を投影する、

そして、武器に込められた魔力に顔をひきつらせるアルとゼクトに矛先を向ける。

2人は慌てて転移で逃げようとするがそうはいかねえ。

「――投影、開始トレース オン」

投影したのは赤い布。

名をマグダラの聖骸布、相手を拘束する事に特化した魔術礼装だ。

「我に触れぬノリ・メ・タンゲレ」

言葉と共にまるで布が意思を持つかのようにアルとゼクトを縛りあげる。

マグダラの聖骸布は男にとって最悪の魔術礼装で男ならば自力で脱出することは不可能に等しい。

しかも、これに縛られていると魔法等は一切使えなくなるというオマケつきだ。

ジタバタとマグダラの聖骸布を取ろうとしている魔法使い目掛けて、我ながら素晴らしい笑顔で死刑宣告をくだす。

「――停止解凍、全投影連続層写！！！！フリーズアウト ソードバレルフルオープン」

土煙が消え視界がクリアになり、ガトウの姿を前方に確認する。

ガトウもポケットに手を入れ構えている状態だ、まるで西部劇のガンマンのようにお互いの出方を疑う。

…不意に風が吹き、その瞬間にお互いの居合い拳が炸裂する！

シュバババババツツ！！

お互いに暫し牽制の居合い拳を撃ち合う。

不意にガトウが瞬動で後退し、右手に魔力、左手に気を集め咸化法を発動する。

明らかに勝負をつけようとしているのがまるわかりだ。

俺はその勝負を受け、あえて咸化法をせずに気と魔力で居合い拳の鞘を造る。

バチバチとお互いに反発しあう気と魔力を無理矢理抑えつけ、その反発を利用し、まるで超電磁砲のように高速で撃ち出す！！

カツ！ドゴンツツツ！！

ガトウが放った豪殺居合い拳を超える速度でガトウに突き刺さり地面に叩きつける！

四人！

ガトウが崩れ落ちる気配を感じながら、この戦いに参加しなかったバカ弟子ともう一人のバカをみやる。

2人は笑っていた。

それでこそ俺が倒すべき相手だといわんばかりに、目をギラギラさせながら笑っていた。

そんな2人に俺も口をつり上げながら言い放つてやる。

「よお、待たせたな。前菜は終わりだ、来いよ、メインディッシュ。

」

s i d e o u t

s i d e J a c k

ニヤケが止まらない、間違いなく最強クラスの者達が揃う「紅き翼」
がたった一人にダメージを与えることすらできずに俺とナギ以外が
全滅した。

これだ！

この理不尽で圧倒的な力！
それでこそ俺の師匠だ！！

「よお、待たせたな。前菜は終わりだ、来いよ、メインディッシュ。

」

その一言で始まる。

俺の今までの全てをぶつける最終試験が。

「ナギイ！先に行って時間を稼ぐ！とつと大呪文を撃てよ！！」

「誰に言ってる！この筋肉達磨！！」

言いながら”千の顔を持つ英雄”を発動させ2m程の大剣を全力で師匠に投げつける！

ゴアッ！！

音速をあつという間に超え、辺りを粉碎しながら師匠に迫る！

が、

「んなもん効くか。」

パシィッ

投げた大剣を素手で掴まれ防がれる。

しかし、その程度は予測済み、俺はあくまで時間稼ぎだ。師匠相手に俺一人で勝てるとは思っちゃいない、ナギと2人で確実に倒す！

「契約に従い、我に従え！ 雷の帝王！ 来たれ！ 虚空より出でし神の怒り！ 灰は灰に塵は塵に！ 空を満たし、我が敵を焼け！」

ナギが呪文で生み出したのは”千の雷”のように雷を広範囲に撃ち

出す魔法ではなく、雷を束ねて一定範囲を破壊し尽くす高等魔法！

「喰らいやがれっ！ ”神の鉄槌”！！」

ドンツツツ！！！！

まさに神の鉄槌の如く地面を破碎し、叩きつけた場所で圧縮されていた雷が荒れ狂う！

「だめ押しだあっ！！」

そこに”千の顔を持つ英雄”で生み出した大小様々な武器を力の限り投合しまくる！

ボシユシユシユシユツツ！！！！

ズガガガガガガガガッ！！！！

「…やったと思うか？ジャック？」

ナギが聞いてくるが…

「わからん、だがそれなりにダメージは与えられたと思うが…」

これで無傷だったらマジで化け物だぜ…

―爆煙が晴れ、辺りは地形が変わり、焦土となっていたが…

「いやゝ中々いい攻撃だったよ？もう少しで一撃貫うところだった。」

無傷の師匠がいた。

…いや、スーツに傷が一つ入っており、埃も所々に被っている。

「おいおい師匠よ…出鱈目すぎねーか？どうやったら死ぬんだよ？」

「ハッ、化け物が。」

ナギも俺も強がっちゃいるが、その実そんな余裕はねえ…確かに俺は素でのが強い。

しかし、格闘技術では師匠には絶対に勝てない、これは決定事項だ。何故なら俺が修行している間に師匠も修行を行い、その差が埋まることが無いからだ。

ならば生きた時間が圧倒的に長い師匠の方が強いのは自明の理。

また、ナギの魔法もあれ以上の魔法を唱えようとするならば確実に詠唱中に一撃を貰うだろう。

手詰まりか…？

「うん、それにしてもよくもエヴァが買ってくれたスーツをよくも破ってくれたね？」

かくごはできてるな？」

ゲッ！ヤバい、師匠が切れる！！

「気合い防御っ！？」

全身を気で覆い急所をガードする。

「ジャック？」

バカッ！ナギ、なんで防御しねえ！？師匠はエヴァンジェリンから貰った物は凄く大事にしてるんだ！

昔俺が師匠がエヴァジェリンから貰ったていうお菓子を食べたら修羅が降臨したんだぞ！？

スーツを破いたんだぞ！？お菓子の時より絶対に切れる！！

俺がナギに注意を呼び掛けようとしたときについに師匠が切れた。

「おせえっ！！お前等に足りないのはッ！情熱 思想 理想 思考
気品 優雅さ 勤勉さ！そして何より——」

いきなり師匠が消え言葉だけが響き、ナギが何かに弾かれたように空に飛ばされる。

ナギは空中であらゆる方向に無差別に舞う、まるで誰かに飛ばされているかのように。

ドガガガガガガガッ！！！！

いや、良く見ると師匠が高速で飛び回りナギを殴り、飛ばされた先で再び殴る。これを目にも止まらぬ速さで繰り返し、まるでナギが独りでに空を飛んでいるかのように見えるのだ。

「速さが足りない！！」

ゴシャッ！！

その言葉と共にフィニッシュが放たれ、ナギが地面にめり込む。

師匠はナギをぶっ飛ばした後、こちらを向き若き日の俺にトラウマを植え付けた笑顔で告げる。

「ジャック？おしおきだべ」

あつ、俺死んだかも…

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

A
r
i
k
a

私の前で我が騎士がボロボロになって倒れておる。私が無敵と信じていた「紅き翼」がたった一人の男に蹂躪され遊ばれておる。

「お姫様！ここは危険ですっ！僕と一緒に安全な場所に離れましょう！」

確かタカミチといった子供が私をこの戦場から引き離そうとしている。

が、

「安全な場所などあるものか…あの男から本気で逃げられると思っているのか？」

我が騎士はやられ、残っているのは傭兵剣士のみ。

カッ！

いきなり辺りを溢れんばかりの眩い黄金の光で照らされる。
光の出元はあの男の右腕。

「なっ！？なんて気だ！！！」

タカミチ少年が恐れ戦いている。

「もつとだっ！もつとっ！もつとお！！もつと、輝けええええッッ！！！！！」

あの男の言葉と共に辺りが黄金の光で満たされ輝く。

「くたばれジャックっ！抹殺のおおおッラストブリットオオオッッッ！！！！」

黄金に光輝く右腕で傭兵剣士の腹に凄まじい勢いで殴りかかる。

ドッゴオツツッ！！！！

傭兵剣士は糸の切れた人形のように崩れ落ち、タカミチ少年は放心する。

第三皇女は何故か笑顔だったが…

ああ私は彼奴の手にかかり、この戦争を終わらせることもできないか…

そんなことを考えていると男がこちらに向かって歩いて来た。

そして、恐らく私の息の根を止めに来たであろう男は私に向かってこう言った。

「お姫さん方、俺を雇わないか？今なら初回限定で安くしとくぜ？」

第八話：「紅き翼」vsオリ主！（後書き）

俺はもう駄目だ…

戦闘シーンに挫折しそうだよ…

エヴァとイチャイチャしたほのぼのが書きたいよ…なんで戦闘シーンってこんなに難しいんだよ…

過去編戦闘シーン多すぎだろう…

皆！作者に元気（感想）を分けてくれ！！

第九話：同盟決定！最強メンバーここに集結！（前書き）

鳴る神です。

エヴァ分が足りないのをテオドラで補いました。
テオドラで萌えてくださると嬉しいです。

第九話：同盟決定！最強メンバーここに集結！

Side Toya

「雇う？お主をか？」

何だか困惑気味のお姫さん。

あんまり表情変わってないけどね〜

「ダメです！危険ですから絶対にダメですからね！」

ミニマムタカミチは俺に対して警戒心バリバリで姫さんを止めに入っている。

「トーヤなら妾が雇ってやるぞ！あれだけ強いなら護衛にうつてつけじゃ！そしてまた面白い話を妾に聞かせるのじゃ！」

テオドラは雇う気満々のようで、満面の笑顔で一生懸命にピョンピョン飛び跳ねながらアピールしてくる。

ヤバい、テオドラの行動が可愛い…
子犬的な可愛さだぜっ…戯れたい！

「何故…そんなことを言い出す？」

探るように姫さんが伺ってくる。

おお、怖い怖い。

おっかない目で睨むなよな

「なに、この戦争を最後まで見届けただけだよ。永い時を生きる
と暇なんだよ、そこにこの戦争だ、見ないと損だろ？そして姫さん
達をえらんだのは姫さん達がこの戦争の中心になりそうだからだよ。
これで納得かい？」

「ふんっ今は納得してやろっ」

ツンデレかゝナギも中々いい女に惚れたなゝお目が高い。

「そうしてくれ…ところで、こいつら手当てしないとそろそろヤバ
くないか？」

いくら手加減したとはいえ早く手当てしないと死んじまうぞ？

「」「あっ」「」

忘れとつたんかい！

s i d e o u t

s i d e N a g i

ん…つてえ!?

「目が覚めたか、我が騎士よ。」

姫さん…か？

「ここは「紅き翼」の隠れ家じゃ、お前達は全員意識を失っておったのでここに運び込み治療を施した。」

そっか…俺はまた負けたのか。

「姫さん…アイツは？」

すると姫さんが珍しく困った顔をして

「帝国の第三皇女の子守りをしておる……」

「は？」

見ると俺を負かしたアイツがじゃじゃ馬姫と仲良くじゃれあっていた。

「トッヤ、暇なのじゃ」

ソファーに座るアイツの肩に後ろからぐでぐと、もたれ掛かる第三皇女のじゃじゃ馬姫。

「そうか？しかたねなく旅の話でもしてやろう。」

それを微笑ましそうに見ながら笑顔で相手をするあの男。

「ホントか！？早く話すのじゃ！」

じゃじゃ馬姫は溢れんばかりの笑顔でアイツに詰め寄り話をせがんでいる。

「あれはな、大体50年位前に……」

なんだか盛り上がっている。

「―あんなのに俺達は負けたのか……」

クソッなんかあれ見たらム力つく！

「ナギ、体は大丈夫ですか？」

んなことを考えていると、いつの間にか俺の回りに集まっていた「紅き翼」のメンバーを代表してアルが体調を聞いてくる。

「ああ、まだ少し痛むが動けない程じゃねえから心配すんなよ。」

二、三日で元通りになるだろ。

「それでだな、山の中をさ迷っていたら500年クラスの竜が現れて、いきなり襲って来たんだよ！」

「こ、500年クラスか！ど、どうなったのじゃ？」

「いや、アイツは運が悪かったね。何せその時俺も相棒もロクに飯を食ってなくて腹がペコペコでな！襲って来た竜を返り討ちにして二人で焼いて食ってやったぜ！」

「500年クラスの竜を食べたのか！？あ、味はどうじゃった？美味かったのか？」

「それが中々美味くてな、多分ワインとかと一緒に時間が経てば経つほど美味くなると俺は見たね！」

「そうなのか！？」

「おうよ！それから味をしめた俺と相棒は腹が減ったらそこら中の古竜を狩りまくっては食べてたぞ」

「おおゝ妾も一度でいいからそのようなものを食べてみたいのゝ」

「ハッ！ならいつか食べさせてやるよ！」

「ホントか！？約束じゃぞ！破ったら酷い目にあわしてやるからな！」

「ハッ！破りやしねえよ！俺は約束は守る男だからな！」

何やら楽しそうにじゃれあっている。

あいつホントに伝説の賞金首か？

「なあジャック？お前の師匠は何時もあんななのか？」

「おう、世間じゃ血も涙も無い極悪人とか言われてるが、師匠は基本的に自分から人を襲いかかるうとはしねえよ。
後、女子供は殺さない主義だしな。」

「おーナギよ、起きたか？」

そんなことを話しているとえらくご機嫌なじゃじゃ馬姫を肩車した本人が話しかけてきた。

「お陰様でな……」

「アッハッハ！負けたのは気にすんな！そもそも俺の服に傷を入れただけでも大したもんだぞ！少なくともこの二百年間では一度も入られたことは無いからな！」

まさに規格外。

最強の吸血鬼だな。

「少しいいかな？」

ガトウが話を遮り質問をする。

「ん、なんだガトウ？」

「「完全なる世界」という言葉に聞き覚えはないかい？」

「！、そうだった！コイツは百年前から「完全なる世界」の関係者や施設を潰してきたってあの白髪頭が言ってたぜ！でも、何の為に…？」

「「完全なる世界」？ああ、アイツらかゝ数だけはいんだよねゝ」

「！？やはり…すまないがどんな関係かな？詳しく教えてもらいたいんだけど。」

ガトウが若干殺気立ちながら問い詰める。

「うーん、アイツらは俺が暇潰しやストレス発散、それから資金調達の為に潰して回ってたんだよ。いやゝ秘密結社っていいよねゝなにせ潰しても誰からも文句を言われないし！」

「…ひ、暇潰し？」

ガトウは思わず吸っていた煙草を口から落としながら呟く。

まあ、自分達が戦争が起きるまで存在自体を確認出来なかった秘密結社を潰していたの理由が暇潰しだしな…

「流石師匠！そこに痺れる、懂れる！」

「うむ！流石なのじゃ！」

ジャックとじゃじゃ馬姫がアホなことを言っている。

「あっそうだ。ナギ、俺はテオドラに雇われたから、これから仲間として夜・露・死・苦」

は？訳がわかんねえ…

「なんでも永き時を生きると暇らしいので、より近くでこの戦争をみたいらしい。」

詠春がつけ加える。

「ハッ！アンタが加われば勝ったも同然じゃねえかよ！いいぜ、代わりに条件がある。」

「おー言ってみ言ってみ。」

「同行中俺と戦えっ！次は勝ってやる！」

「アッハッハッハッハ！いい度胸だ！良いぜ！いつでも掛かってきな！」

「ハンッ！後で吠え面かくなよ！」

よしっ！これでこの戦争中の目標ができたぜ！お前を倒すっていう

目標がな！

「あー皆の衆、俺のことは十夜でいいぞ。」

それを皮切りに皆が自己紹介をしはじめる。

「そうだ！ジャック！また修行つけてやろつか？お前はまだ伸びるぞ！」

「し、師匠っ！勘弁してくれ！」

脱兎の如く逃げ出すジャック。

「アッハッハッハッハッハ！あ、あの筋肉ダルマが怯えておるわ！いい気味じゃ！」

じゃじゃ馬姫の高笑いを聞きながら俺は「完全なる世界」との戦いより、十夜が加わって本当に大丈夫なのか心配になってきた…

s i d e o u t

妾は今機嫌が良い、夜の迷宮に捕らわれていたことなど最早記憶の彼方じゃ。

いや、むしろ感謝しても良い。

お陰でトーヤと会うことができたから。

「よしっ！頭脳労働は姫さん達とタカミチに任せた！は十夜護衛を頼んだぜ！」

うむっ！トーヤは妾の護衛じゃからな！

また面白い話を聞かして貰うかの

「肉体労働は俺達に任せろっ！全員で「完全なる世界」の連中に一泡吹かせてやろうぜ！」

皆の団結が高まる。

このような体験はしたことは無いが何やら心地好い感じがするのう。これが一つの事を皆でやる一体感という奴なのか？

「トーヤ！妾をしつかりと護るのじゃぞ！お手並み拝見じゃ！」

トーヤの肩の上から頭をぺちぺちと叩く。

「ハッ！誰に言っただやがる、傷一つつけさしやねーから安心しろよお姫様。」

トーヤは笑いながら妾の言葉を受け入れてくれた。

それが嬉しくて照れ隠しに顔をトーヤの頭にグリグリと押し付ける。

「あつ、タカミチは十夜に修行つけて貰ったらどうだ？っていうか決定な。」

「えええええっ！？聞いて無いですよナギさん！」

むふー明日から楽しみじゃ！

第九話：同盟決定！最強メンバーここに集結！（後書き）

テオドラって萌えね？俺だけじゃ無いよね？

そうだよ…ロリなのにババア言葉が萌えるんだよ…っ！ギャプ萌えなんだよ！色黒ロリロリ元気はつらつババア言葉の第三皇女って萌えないかっ！？

…エキサイトしちゃったぜ。

皆さん感想をお待ちしてます。

そして上の主張に意見のある人もどうぞ。

作者は譲らない…

第十話：「完全なる世界」との決戦、IN「墓守り人の宮殿」！（前書き）

申し訳ない！

更新が伸びてしまいました。

PV：300,000アクセス

ユニーク：30,000人突破しました！

第十話：「完全なる世界」との決戦、IN「墓守り人の宮殿」！

Side Teodora

「紅き翼」は今敵の基地を攻撃しに行っており。

この半年間ずっと戦い続けて、仲間も増えてきた。

妾やアリカ、タカミチは敵の情報を集めたりして「紅き翼」の援護をしてきた。

妾はもっぱらトーヤの面白い話を聞いておるのじゃが…

「タカミチイツ！腰が入ってねええつ！！やる気あんのかあつ！？」

今、目の前のタカミチは拳を突いてから祈る、これをひたすら繰り返しておる。

なんでも、あの筋肉ダルマやトーヤが行ってきた由緒ある修行方法じゃとか。

「ト、トーヤさん、これでホントに強くなれるんですかあ！？」

ただ突いてから祈る、それだけなのじゃが辛いらしいのう。

「うむ、トーヤよ、タカミチの言う通りじゃ。ホントに強くなるのか？」

妾はトーヤの肩の上から頭をぺちぺち叩きながら問いかける。

このような修行をするだけであの筋肉ダルマのような奴が出来上がるのならば、あつという間に世界最強の軍隊の出来上がりじゃぞ。筋肉ダルマのような奴らがいっぱい…

…地獄じゃな。

「いいかテオ、タカミチ、この修行は続けて初めて意味がある。1日や2日程度なら誰にでもできるが、これを何年も続ける。1つのことを極めて”技”を”業”へ昇華しろ、誰もが使える”技”ではなく、自分だけの”業”にするんだ。」

？、妾にはよくわからんの。

考えるのを諦め、トーヤの頭に抱きしめる。

うゝむ、いい抱き心地じゃ。

なんじゃか暖かくて安心するのう…

スリスリと頬擦りする。

「タカミチ、お前はガトウのようになりたいのか？それともガトウを超えたいのか？」

「！？」

「ガトウのようになりたいのなら今までの修行をつづける、ガトウを超えたいならガトウの真似だけでは無く、自分だけの究極の一を見つける。ガトウの真似をするだけでは絶対にガトウは超えられねぞ。」

「……考えてみます…」

なんじゃか妾だけのけ者じゃ…

「むーっ、トーヤ！タカミチなぞ放っておいて、妾を構うのじゃ！」

トーヤは妾が雇ったんじゃぞ！タカミチなんぞは1人で修行しておれ！

頬を膨らましながらトーヤの頭を少し強く叩いてアピールする。

「どーしたテオ？寂しいのか？」

ニヤリ、と意地の悪そうな顔をし、聞き返してくるトーヤ。

「なっ／＼／＼何をいうかつ！トーヤは妾が雇ったんじゃから妾に構うのは当たり前じゃ！」

思わず顔を赤くしながら、バシバシとトーヤの頭を叩く。

むー、普段は鈍いくせにこのような時だけ鋭くなりおって…

「ぶっ、あははははは！テオドラ様、照れて真っ赤になってますよ？」

「うるさいぞタカミチ！」

トーヤ！雇い主の命令じゃ！タカミチにうんとキツイ修行をしてやるのじゃ！」

ピシッ！と、タカミチを指差しトーヤに命令をする。

「オーケーだテオ、任せな。タカミチ、今から楽しい筋トレの始まりだぞ」

手をワキワキしながらジリジリとタカミチににじり寄る。

「アレですか！？い、嫌です！断固拒否しますからね！二度とコメントですー！」

タカミチが本気で怯えておる…

どのような修行なのじゃ…？

「問答無用！覚悟を決めろ、タカミチ！」

トーヤが飛びかかり、タカミチが悲鳴を上げながら逃げ惑う。

トーヤの肩の上からそれを笑いながら眺めつつ思う。

トーヤがいて「紅き翼」のみんながいる、こんな楽しい時間がずっと続けばいいのにな…

s i d e o u t

俺達は今、世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部の「墓守り人の宮殿」に来ている。

「ラストダンジョンだな…」

ラストダンジョンだけど、俺が参戦すりゃ余裕で勝っちゃうだろうけどなあ。

この戦いには「紅き翼」&・俺+帝国・連合・アリアドネー混成部隊が参戦する。

作戦は、「紅き翼」が敵陣突破後、敵中核を叩く。俺+帝国・連合・アリアドネー混成部隊が露払いで、自動人形や召喚魔を引き付け「紅き翼」の敵陣突破を手伝う。

今さら小細工なんぞは意味がない、最大戦力で敵を叩き、短期決戦でケリをつける。

「だけだよ、十夜。短期決戦ならなんで最強のお前が敵陣突破組に入んねーんだ？お前が来たら余裕で片付けぜ？」

隣ナギが質問してくる。

見れば他の「紅き翼」の面々もこちらを見て、疑問に思っているよ

うだ。

俺は頭を掻きながら質問の答えというか、建前を話す。

「俺はただの傍観者だ。この戦争の主役は飽く迄「紅き翼」のお前からで、俺はこの戦争の結末が見たいだけ。だから協力はあるが、補助だけだ。それにな、あんまり目立つと戦争が終わった後にウザい連中に絡まれちまうからな。」

来たら潰すだけだな〜

「師匠はけっちいからな！」

ガハハハハ、とジャックがバカ笑い。

「いいではないですかナギ、帝国・連合・アリアドネー混成部隊の守護をして貰えるのですから。」

「そうだなナギ、十夜殿がいれば格段に死者が減るだろう。それだけでいいんじゃないか？」

アル、詠春がナギをたしなめる。

「もつとも、「紅き翼」が「完全なる世界」を倒せないって言うなら俺がぶっ倒してやるけどな？」

わざと挑発を試みる。

「ハッ！俺がお前以外の奴に負けることなんざあり得ねえ！」

「ナギよ、のせられておるぞ……」

ゼクトがボソリと呟くが、ナギは聞こえていないようだ。

やはりバカを楽に動かすには、挑発して自分から動くように仕向けるのが一番効率がいいな。

「失礼します、帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了いたしました。」

若きアリアドネー総長セラスが準備が完了したことを伝えに来た。

「やっとか、さっさと叩き潰しに行こうぜ！」

バカ弟子がやる気満々で大剣を振り回す。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

ガトウから連絡が入る。

やはり原作と同じで説得は失敗か…

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています…「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今、彼等の手にあるのです。」

「ああ。」

おつ、そろそろ始まるか…

「よしっ！野郎ども！！」

クルツと杖を回しながら合図を出す。

「行くぜっ！！」

その言葉と共に「紅き翼」が先陣を切り、俺・帝国・連合・アリアドネー混成部隊が後に続く。

「紅き翼」の連中はあつという間に敵陣の中枢部に突っ込んでいった。

「紅き翼」によって開けられた穴を敵が再び埋めていき、俺達の前には様々な魑魅魍魎が跳梁跋扈し、俺達を殺す為に立ち塞がっている。

「ハッ！最高だあ…最高だぜッ！！」

多対一の戦闘は何度もしたことがある。
しかし、軍対一の経験はまだない。

シューティングゲームが現実で出来るとは思わなかったぜ…

既に目と鼻の先にまで来ている魑魅魍魎を見て、身体中の血が沸き、肉が踊る。脳内麻薬がドバドバ出て思考がクリアになり、敵を倒す事だけが頭に残る。

今俺は、最高にハイって奴だぜ！！

「ハッハッッ！！逝くぜ糞野郎共！今から俺がテメーらをブツ殺してやる！

C o m e o n ! L e t ' s a p a r t y ! !
」

俺は叫び、魑魅魍魎に突撃を敢行した…

s i d e o u t

s i d e S e r a s

「紅き翼」・帝国・連合・アリアドネーの混成部隊、そして一人の
史上最高額の賞金首。

これらのメンバーでこの戦争を操る真の敵、「完全なる世界」を倒
す為に王都オスティア空中王宮最奥部、「墓守り人の宮殿」にやっ

て来た。

「なんて数なの…」

既に「紅き翼」は敵陣を突破し、敵中枢部に攻撃をしているだろう。その間、敵の手勢をここで食い止めるのが我々の仕事だ。

しかし…なんて数なんだっ！

空を埋め尽くさんばかりの敵の軍勢。

この数相手に何時まで耐えきれるか…

その時、一人の男が我々の側から飛び出し、敵の軍勢に突っ込んでいく。

「なっ！？」

「ハッハッツッ！！逝くぜ糞野郎共！今から俺がテメーらをブツ殺してやる！」

Come on！ Let's a party！！」

叫びながら突っ込んで行くのは、何故か「紅き翼」と仲良くしていた史上最高額の賞金首、最強の吸血鬼にして「拳皇」「一人軍隊」などの数々の異名を取る恐怖の代名詞。

アオノ トーヤ！

事前にあの男が出たら距離を取れと「紅き翼」の人々から言われているのだが…

しかし、一人である軍勢相手に何ができるというのだ…

両者が激突する寸前に、あの男が小さく、しかし、不思議と戦場に響き渡る声で詠唱を開始する。

I am the bone of my sword .

体は剣で出来ている。

Steel is my body , and fire is
my blood .

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades .

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death .

ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life .

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create
many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never ho
ld anything .

故に、生涯に意味はなく。

朗々と響き渡る詠唱、しかし、指導キーもないこの詠唱で何が起き
るのか…

So as I pray , unlimited blade

works .

その体は、きつと剣で出来ていた…

アンミリテッド・ブレードワークス

「無限の剣製」

ゴッ

詠唱の完了と同時に、空間に炎が走る、

そして、炎が走り終わると、王都オスティアの景色は既に無い。

夕日に照らされる紅き丘が現れ、空には巨大な齒車が噛み合っている。

極めつけは、紅き丘に刺さっている数え切れない武器の数々。

剣、刀、槍、斧、弓…考えつくほぼ全ての武器が刺さっており、しかも、その全ての武器が莫大な魔力を内包している。

なんなのこれは!?

理解できない。

まるで世界を塗り替えるかの如く現れたこの風景。

辺りに刺さっている数々の武器。

どれも私の知るものでは無い。

敵の前だというのに思考が錯乱する。

そんな中で私は見た。

紅き丘の頂上にて、敵と相対しているこの現象を恐らく引き起こした人物。

夕日に照らされ佇むその姿はなんとも神々しかった。

「ああ…」

確信した。

この紅き世界では彼が唯一人の王。

この世界のルールにして支配者。

その姿を見て、負けることなど有り得なくなつたことを確信する。

何千何万の大軍が現れようと大丈夫。彼がいる限り、我々に敗北はない。

そんな確信と共に我々は敵と激突した…

s i d e o u t

s i d e T o y a

シューティングゲームの始まりだ！

テンションMAXで「無限の剣製」を発動し、手を振り上げる。
すると、連動して辺りの武器が宙を舞い、振り下ろすと、敵に向か
って射出される。

ドドドドドドドドドドドドツツ！！！

圧倒的な神秘を内包した武器が相手を切り裂き、砕き尽くす。

これは決戦ではなく、単なる殲滅戦。

そうやって敵を蹂躪していたのだが…

「楽過ぎてヒマ…」

ぶっちゃけ宝具の射出だけで敵を殲滅できそうな勢いだ。

ホントは「壊れた幻想」で武器を爆発したいのだが、んなことした
ら味方まで消し飛んでしまう。

しかし、思ったより楽しめん…

仕方ない、計画変更！

「シャッ！」

近くの剣を取り、瞬動で接近して敵を斬り伏せていく。

俺の剣技は単純だ。

近付き、一太刀で斬り伏せる。

単純故に破り難い。

音速を軽々突破する速度で近づき、吸血鬼の人間を超える圧倒的な肉体のポテンシャルで振るう一太刀は、余程のことが無ければ避けることすらかなわない。

例え受け止めたとしても、宝具の刃は生半可な武器では止めることすらできない。

しかも、宝具の特性を相手に合わせることによって、あらゆる相手に対応させることができる。

…うん、我ながら鬼畜だなwww

「しかし、まだ辺りは敵だらけか……ウザいな……」

今こそはネタを出すときが来たってことだな！
逝くぜ！

「弾幕はパワーだぜ！」

チュトゥトゥトゥトゥトゥッ！……！

再び武器を射出& a m p ; 気弾を連射しまくる。

気弾は拳から散弾銃の如く細かい気弾が放たれていく、武器の射出と気弾のせいで、俺に近づく敵が欠片も残さずに消し飛んでいく。

近くの敵が粗方いなくなった所で、遠方の敵を狙う。

「くらえやあ！俺流マスタースパークッ！……」

ビガッッッ!!

瞬時に練り上げた気を拳から放つ。

しかも、直ぐに放つのを止めずに拳をずらして全方位を薙ぎ払う。

ああ…気持ちいい!こんな状況の時に言うセリフはあれしかねえ。

「ハッ!見ろ!敵がゴミのようだ!!!」

辺りはスツキリとキレイになり、「墓守り人の宮殿」が見えるようになった。

その時

ズンズドド、ズズン、ズン!

「何だ!?!」

ドンッッッッッ!!!!!!

音と共に「墓守り人の宮殿」に衝撃が走る!

お、「造物主」倒したのか、案外派手にやってんね

「アオノ殿!」

おっ、若き日のセラスさんじゃん。

「先程のは一体…」

「あゝ「紅き翼」がやったんじゃない？」

それしかないやん。

「やりましたかつ！」

嬉しそうにしちゃてゝ

ズッ！ズズズズズズ！！

なにやら若いセラスで癒されているときに「墓守り人の宮殿」から光球が発生し、段々大きくなっていく。

おゝ！辺りの魔力がガンガン減ってく！
すっげ！これぞ正に原作の空気！異世界に來た甲斐があつたてもんだぜ！！

「こ、これは！？」

セラスさんの慌てる姿カワイスｗｗｗｗ

「広域魔力減衰現象って奴だな…離れないとヤバイな。」

調子に乗りすぎたな、逃げねえと。

「帝国・連合・アリアドネー混成部隊！広域魔力減衰現象の効果範囲外まで撤退！！」

俺の号令で帝国・連合・アリアドネーの混成部隊が全速力で効果範囲

囲外まで撤退していき、効果範囲外で再び陣を敷く。

「アオノ殿！一体我々はどうすればっ！」

「落ち着けヘラスた！ゲフンゲフン！ヘラス君。…恐らくそろそろ援軍が来るから安心したまえ。」

「ホントですか！？」

「ほらきた。」

ゴオン！ゴオン！ゴオン！

甲高いエンジン共に現れた。メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦と、それに少し遅れて現れた帝国軍北方艦隊。

ヤバい…カッコいい！

ああっ！あの艦隊とケンカしたい！

絶対楽しいだろうな

なんて考えている間に、両艦隊が「墓守り人の宮殿」から発生した光球を取り囲むような布陣を完成させる。

そして始まる大規模反転封印術式。

ウォンツ！

音と共に光球を覆うように広がる封印術式がまるで、一種の芸術の如く俺の目に映る。

この光景は、俺が見てきた景色の中でも最も美しいと感じた。オスティアの景色と人間達の生きる為に抗う姿は、永き時を生きてきた俺だからこそ美しく感じた。

この戦争…参加できて良かった…！

第十話：「完全なる世界」との決戦、IN「墓守り人の宮殿」！（後書き）

ヤバイな

戦闘シーンムズい…

長くなっちまうしなあ

そろそろ原作の足音が聞こえてきましたな…

感想、ご指摘がありましたらお願いします。

第十一話：大戦の事後処理、オリ主の作戦。（前書き）

後書きにアンケート有り。

感想に書いていただけると作者が狂喜乱舞いたします。
では、駄文をどうぞ。

第十一話：大戦の事後処理、オリ主の作戦。

Side Toya

戦争は終わった。

あれから数ヶ月、大戦中の「紅き翼」の隠れ家の一室でベッドの上で寝転びながら考える。

「紅き翼」は世界を救ったとして一躍有名になり、英雄として奉られるようになった。

この辺は原作とは変わりが無いのだが…

「アリカが投獄されてねぇ」

そう、アリカが投獄をされていない。

やはりオスティアは反転封印魔法のせいで落ちたらしいのだが、何故かアリカはケルベラス無限監獄に投獄されずにいる。

何でも、原作どおりに女王になっていたので俺は大して気にしていなかったのだが、実はアリカの父王は「完全なる世界」に操られていただけらしい。

クーデターを結構しようとする直前にそれに気づき、後日、アルやゼクトなどにより魔法を解除され、正気に戻った父王に、操られていたこと、それが「完全なる世界」の仕業であったこと…
全てを話し、実質、クーデターにはならず正統な王位継承という形で治まったらしい。

原作ではアリカの父王は「完全なる世界」の傀儡となっていたのだが、俺が「完全なる世界」を潰し過ぎたために、傀儡に仕立てあげる時間がなかったようだ。

オスティアが落ちたことも、避難を始めから促し、人的被害が皆無であったこともあり、仕方がない犠牲だったと言われている。
寧ろオスティアだけに被害を留めたことを評価されている。
ちなみにオスティアの難民は帝国・連合によって保護されている。

アリカはオスティアを落としたことに変わりはないから、という理由で女王を辞め、今は「紅き翼」と共に行動している…

…まさかね

暇潰し& a m p・資金稼ぎのせいで原作ブレイク…
流石の俺でも予想外だな…

お陰でアリカは世界を救った「紅き翼」を導いた王女、となりおりメチャクチャ人気がある。

しかし、代わりに俺の立場がヤバイ。

俺の立場は原作のアリカと殆ど変わらない。
曰く、自らの欲を満たす為だけにこの戦争を引き起こした。曰く、世界の破滅を願った。曰く、人間達への復讐。
等々…根も葉も無い噂が飛び交っている。

やはり、戦争を引き起こした分かりやすい犯人がいた方が良さの
らう。

アリカが選ばれ無かったのは、俺という既に悪名高い人物が存在し
たために、そちらに罪を被せた方がやり易かったのだろうな。

お陰様で俺は空前絶後の生死問わずに2000万\$の賞金、という
ふざけた額をかけられている。

今現在、全世界で最も恐怖され、最早歴史に名を残すレベルの超極
悪犯罪者となっている。

あと、異名がまたかなり増えたみたいだ。

「どーすんよ、これ…」

うーあー呻きながらゴロゴロとベッドの上を転がりながら考える。

ドタドタ、ガチャ

足音の後にドアが開き、ここに俺を匿っている「紅き翼」のナギ、
アル、ジャック、詠春が部屋に入ってきた。

「師匠、失礼」

バカ弟子が挨拶してくるが無視だ無視。

「おい、十夜？」

あゝ原作だとアリカはどうなったけ…

確か魔法とかが一切使えない魔獣の孔に落とされて処刑…

………
………
………

!!

「これだああああつつつ!!!!」

『!?!』

いいじゃんコレ!この作戦どっりに行けば、後々賞金稼ぎどもに狙われることもなくなるし、スムーズに原作介入ができる!完璧じゃんか!

うしっ!作戦を煮詰めないと…

俺が情熱に燃えていると、何やら固まっている「紅き翼」面々がいた。

「お前らなにやってんの?」

「フッフ…いや有りもしない罪を着せられてどんな様子かと皆で思っていました…その様子だと大丈夫の样ですね。」

うるせーなこのエヴァの敵め!

「しかし、一体これからどうするのですか十夜殿？最早貴方に安全な場所は在りませんよ？」

詠春はいい奴だなゝ流石「紅き翼」の良心と言われるだけのことはある。

君が居なかったら「紅き翼」はバカの集まりだよ…

「心配するな詠春、今良い案を思い付いた所だ。この作戦が成功すれば俺の悠々自適ライフは守られる。」

我ながら恐ろしい作戦だぜ！

「で、どんな作戦なんだよ？」

「良い質問だナギ君！この作戦には「紅き翼」の協力が必要不可欠なんだが…協力してくれるよな？」

「フフ、まあ私達にも若干責任は有りますしね。いいんじゃないでしょうか？」

アルが賛成とは意外っちゃ意外だな…反対したら凹しても協力させるつもりだったのに…

「師匠なら自力でなんとかなんだろう俺はパス」したら地獄の筋トレ&延々弾幕回避「するわけ無いじゃないですか！喜んで協力さしていただきます師匠！！」

落ちたな…相変わらずバカ弟子は扱い易い…

「私は勿論協力しますよ。」

やはり詠春はいいやつちゃ…これでもう少しキャラが濃かったら完璧なのにな…
そんなら了承も得られたし…

「うしっ！ならお前ら「紅き翼」で俺を捕まえて処刑まで持っていけ！」

『は？』

作戦開始だ！

s i d e o u t

s i d e A l b i r e o

目の前の歴史史上最高額の賞金首にして、最強の吸血鬼であるアオノトーヤが、子供のような笑顔で語る作戦を聞いて自然と顔が笑ってしまう。

作戦の準備は比較的簡単にできるだろう。

しかし、失敗〃死であり、こんな穴だらけの不確定なことばかりの作戦では、私や「紅き翼」の面々であっても実行しないような作戦だ。

滅茶苦茶だ、魔法世界に住む者達では絶対に考えられない作戦、成功するかどうかも全く分からない…
しかし、なぜだろう？目の前の男なら必ず成功しそうと思ってしまう。

フッフ…私をここまでワクワクさせるのはナギと貴方位ですよ…

私はそう思いながら作戦を聞くために、トーヤの話に耳を傾ける…

s i d e o u t

s i d e T a k a m i c h i

今僕達は悪名高い処刑場である魔獣の孔の前に来ている。

何の為か？

「先の、魔法世界全てを巻き込んだ大戦を引き起こした張本人である、大罪人アオノ トーヤの処刑を開始する！！」

トーヤさんの処刑の為である。

孔の中央に向かって突き出た台の上にトーヤさんが封印をされて立ち、空を帝国・連合・などの戦艦が囲い、陸をこれまた帝国・連合などの各国の兵士達が重装備でたった一人を逃さぬように囲んでいる。

異常だ。

一人の罪人を処刑するためだけに、この直ぐにでも戦争を始められ

そんな監視は前代未聞だろう。

つまり、それだけこの処刑に重大な意味があるってことだ。

「アオノ トーヤは我欲と自らの復讐を果たさんが為に、今回の戦を引き起こしたことは明確である！」

恐らく、この戦争で起きた帝国・連合の憎しみの矛先をトーヤさんに向けることで、両者の陰悪感を取り除くつもりなのだろう。

ヘドが出そうだ。

「この戦争によって引き起こされた悲しみや憎しみ、被害などは途方も無いものだ！」

僕やテオドラ様、そして「墓守り人の宮殿」での決戦で共に戦った人達は何かの間違いだと思い、処刑の取り止めを求めたのだが、意見が通ることはなかった。

しかも、トーヤさんを捕まえたのが「紅き翼」の人達なのである。

当然僕は問い詰めたのだが、この処刑はトーヤさんから言い出したことらしい。

つまり、トーヤさんは何かを隠している。

多分トーヤさんの事だから「喋ったら面白くない」位の気持ちで理由を喋らないんだと思う。

僕はトーヤさんから言い出したっていう一言で、心配する気持ちが心から消え失せたので、今はトーヤさんがどのような事をしでかす

のかという気持ちでワクワクしている。

トーヤさんは、あの常識破りの人は、必ず僕では考えもしない方法で生き残るに違いない。

「……では、処刑を開始する、アオノ トーヤよ飛び降りるのだ！」

さあ！始まるぞ！！

「はいはいっと。」

びょん、と何の緊張感も無しにトーヤさんが飛び降りた。

は？脱出は？

僕がそう思った瞬間に

バクンッ！

と、何やら呑み込まれる音が辺りに響く。

「では、処刑を終了する。」

その言葉で、周りの戦艦や兵士が撤収作業をしてぞろぞろ帰る中、テオドラ様やアリカ様、僕と「紅き翼」の人達を取り残された。

あれ？ちよつ、何？

一瞬、錯乱状態になったが、意を決してナギさんに聞いてみる。

「あの…トーヤさんは…？」

あれ死んで無いですよね？

「あゝ待つてな、そろそろだから。」

何が？

と思った時。

ゴシャアツ！！グチャツ！！メゴツ！！

孔の中から異音が聞こえてくる。

「流石の師匠も魔力や気が使えないとキツいかな？」

ラカンさんが何やら呟いているが、僕も大体分かってしまった。

ハッ、なんて常識破りなんだ…

ドゴオオオツツツ！！！！

一際大きな異音が響いた後、この場に静寂が訪れる…

「終わったのか？」

「ええ、そのようです。」

「な、何が終わったのじゃ！？トーヤは、トーヤはどうなったのじゃ！？」

詠春さんとアルさんがお互いに確認しあっている中、状況を理解出来ないテオドラ様が一人パニックになっている。

「大丈夫ですよテオドラ様、多分もうそろそろ…」

ガラッ

「いやゝ中々手強かったぜ。」

ひよい、と落ちた時と同じように気軽にトーヤさんが孔から這い上がって来た。

side out

side To ya

「トーヤのバカァ！心配したんじゃぞ！」

「ゴメンって、もうしないから。」

泣きながらポカポカ殴ってくるテオドラをあやす。

「トーヤさん、やっぱりあの音って…」

弟子二号のタカミチが恐る恐る聞いてくる。

「もち、魔獣を素手で仕留めて来たのさ
いやゝ久々に苦戦した苦戦した。」

あいつら硬いっつーの！

そう、俺はわざと魔獣の孔に落ち、魔獣に丸呑みされて死んだと思
わせのだ。

封印は孔に落ちたら自動で解かれるので、後は腹の中を600年間
鍛え続けた音を超える正拳突きでぶち破り、周りの魔獣を一人残ら
ず叩き潰したのだ。

無論、後々バレるといかったので、叩き潰しただけで殺してはいない。

っーか最初の一匹以外硬すぎて殺せねゝ

「流石師匠！普通には出来ないことをアッサリとやってのけるぜ！そこに痺れる、憧れるう！！」

ジャックのキャラが崩壊してく…

「フフフ…ホントに貴方は規格外ですね。貴方が味方でつくづく良かったですよ…」

「褒めるなよ」

照れんじゃねえか。

「十夜、これからどうすんだ？」

「そうです十夜殿、一先ずこれで安心ですが、バレればまた逆戻りですよ？」

ナギと詠春の言うとおりだが…
まあ時期がくるまで隠れるかな

「それなんだがな、俺は暫く隠れるつもりだ。まっ、ようがあるなら念話でもしてこいよ。」

「えゝっ！妾がトーヤを匿ったらよいじやろう？また妾の護衛をするのじゃ！」

何やらテオドラは不服なようで…

「おいおい、無茶言つなよ。バレたらテオドラの立場が悪くなっちまうぞ？」

「むう〜っ！」

頬を膨らませてプリプリしてるテオドラカワユスwww
そんなテオドラをたぷりと愛でてから、ふと思い付く。

「あつそういやナギ。」

ちよいちよいとナギを呼び寄せる。

「？なんだよ」

ナギの耳元でゴニョゴニョと喋る。

「もしかしたら……………と会うかもしれんからその時は……………
……………しといてくれ。」

念のために布石を打たんとな〜

「…それはキツくねえか？」

「大丈夫だあいつの弱点は……………だからそれを使えば……………」

「…分かった、その代わりにいつかまた戦えよ！」

「オーケーだ。戦ってやるからさっき言ったこと頼んだぜ？」

これでよし

「そんじゃ皆の衆、またなんかあったら連絡してくれや〜」

ぬふふ…原作まであと少し…

第十一話：大戦の事後処理、オリ主の作戦。（後書き）

スイマセン！

駄文が更に駄文になってしまいました…

ちくしょう…もつと文才が欲しいよ…

もっと細かく書いたら文章量がヤバくなっちゃうし、更新ペースが落ちちまう…携帯投稿だと文章量を増やすのがキツい…

こんなド素人作者の作品ですが、読んでみて少しでも面白いと感じてくださったらなら光栄です。

最後に、アンケートを取ります。

作者が無謀にも異世界トリップ番外編を書くとしたら、どんな作品にトリップしたらいいでしょう？

感想にでも書いて下さい。また、ある程度読者の意見を参考にしたので、その辺も書いていただけると嬉しいです。

作者的にはF a t eが書きたいな…

第十二話：トーヤの策と麻帆良学園！（前書き）

ども、鳴る神です。

番外編アンケートまだまだ受け付けてます。
お気軽にどうぞ。

PV：450、000アクセス

ユニーク：45、000人

突破致しました！もうすぐ500000アクセス&mp・50000ユニークです！感慨深いですな

第十二話：トーヤの策と麻帆良学園！

Side Evangeline

トーヤが死んだ。

そんな情報が流れたのはつい最近のことだった。

何でも魔法界で起きた大戦の英雄である「紅き翼」に捕らえられ、あの悪名高い魔獣の孔に落とされたらしい。

あり得ない。

私はそう判断した。

「紅き翼」がトーヤと戦って、誰も怪我をしたり、死んだりしていないというのがまずおかしい。

トーヤはバグだ。

この世界の基準値を大きく超えている。

体術は600年間の永きに渡り鍛え続けているし、気や魔力の強化無しで音の壁を超えるような変態だ。

魔法は使えないが、魔術という我々の魔法とは違うものを使用し、信じられんが、自分の魔力で伝説の武具などを何個でも造り上げることができる。

勝てる訳が無い。

そもそも”最強の魔法使い”と言われる私でさえ、トーヤが本気で防御に入った時の魔法障壁は破ったことがない。

しかも、破れそうになると”織天覆う七つの円環”（ロー・アイアス）という歴史に名を残すレベルで有名な盾の概念武装で防いでくる始末だ。

反則だ。

そんなトーヤを怪我無く捕らえた？しかも、その後トーヤが一度も脱走しようとしない？

無理だ。

トーヤを無傷で捕らえるような奴は、正真正銘の化け物だろう。

トーヤが一度も脱走しようとしない？あり得ない。トーヤなら体力が回復したら必ず逃走して、その後確実にやり返しに来る。

無論倍返しにして。

恐らくトーヤがわざわざ捕まったのは、処刑されたことによって世間の目から逃れるためか…

ふ…どうせトーヤのことだから下らない理由なんだろうな。もしくは例の”計画”の為かな？

トーヤを無傷で倒すのは不可能だ、ということは「紅き翼」という奴等はトーヤとグルということだな。

全く、私を放っておいてなんで戦争なんぞしているとは…大体、百年近く別行動なんぞしよって！私と一緒に嫌なのか！？も、もしそうなら………グスン

私が悩んでいると、初代従者の茶々ゼロ（トーヤは従者ではなくパートナーだ）がいつの間にか側に近寄っていた。

「ケケケケケ、御主人、旦那が居なくて寂しいノカ？」

なっ／＼／＼／

「なななな、何を言っている！トーヤとはその内また会えるし、寂しくなど無いわー！」

そ、そうだまた暫くしたらトーヤと2人で一緒に暮らすのだ！トーヤにまた頭を撫でて貰ったり、トーヤに抱きついたり…えへへ

（アー御主人ガマタトリップシテヤガル。コリヤ暫く復活シネーナ…）

あゝ早く帰って来ないかな
トーヤと一緒にいたいな

幸せな想像（妄想）をしていると、いきなり目の前に白いローブを着た魔法使いらしき男が現れた！

「御主人ッ！」

茶々ゼロが相手にナイフで斬りかかりながら注意を飛ばす。

「わ、分かってる！」

イカン、周囲への警戒を怠っておったわ！

「おやおや、好戦的ですね。」

ローブの男は短距離転移魔法で後方に転移し、茶々ゼロの斬撃を回避しながらそんなことを言ってくる。

チイツ！

転移魔法をあの一瞬で使うとは…コイツはその辺の雑魚じゃないな…

茶々ゼロも男が転移したのを見て、私の側まで戻りナイフを構える。

「御主人、コイツデキルゼ。」

「わかっておる、久々に腕の立つ賞金稼ぎ来たな…」

コイツは間違いなく魔法界でもトップクラスの實力の持ち主だろうな…

「フッフ…流石は「闇の福音」とその従者ですね。ローブが切れてしまいましたよ。」

ヒラヒラと切れた袖をちらつかせる。

「ハッ！次ハテメーノ体ヲ刻ンデヤルカラ安心シロヨ。」

「それは怖いですね。それと、今日は戦いに来たわけではありませんせんよ。貴女にトーヤからの伝言があります。」

トーヤからの！？

「…信用できん。貴様がトーヤのことを適当に嘘を言っておるかもしれんしな。」

これで畏にかかるなど情けないにも程がある。

「まあ私は伝言の伝言ですしね、信じるかどうかは貴女しだいですよ？取り敢えず私は「紅き翼」のメンバーのアルビオレ・イマといえます。以後よろしくお願いしますね。」

「！」

大戦の英雄か…ならば強いのも頷ける…

本当に「紅き翼」ならトーヤの伝言というのあながち嘘ではないかもしれない…

『御主人、殺ル力？』

茶々ゼロが念話で確認してくるが…

どうする？

やるべきか？

………

『いや、恐らく本当だろうから殺るな。トーヤからの伝言を聞き出すぞ。』

『…チッ、久々二殺リガイノアル奴ヲ殺レルト思ッタノニヨ…』

つくづく何でこんな性格になったんだろうかこの殺人人形は…

「ならさつさと伝言を言ったらどうだ？
伝言を言うなら殺さないでやるぞ？」

若干殺気を叩きつけながら話を促す。

しかし、コイツは涼しい顔で続きを喋りだす。

「怖いですねー私は伝言役からの伝言を伝える役目ですので、トーヤからの伝言は知りませんよ？」

「はあ？」

思わず漏らしてしまう。

どういうことだ？

トーヤから伝言を受け取ったのはコイツではなくて違う奴なのか？
トーヤから伝言を受け取った奴が、それを伝える為に私にコイツを
寄越した？

……なんてめんどくさい。

「…何で本人が来なかった？」

二度手間ではないか…

「ああ、ナギは転移魔法が使えないのですよ。ですから使える私が
伝言に。」

「それなら早く伝言を言え、殺すぞ？」

私は早くトーヤからの伝言が聞きたいのだ。

「『明日、××××の海岸に來い。そこでトーヤからの伝言を言っ
』だそうですね。」

ふざけた奴だな…この私を呼び出すとは…

「…何故明日なんだ？」

これで下らん理由なら叩き殺してやる…

「ああ、ナギは新婚なのでイチャイチャしたいんですよ。」

やれやれとでも言いたげに首を振る男。

新婚だと…？

この私を呼び出す理由がその程度だと？

ふざけるな！

なんという奴だ！私とトーヤの再開を邪魔する奴など死んでしまえ
ばいいんだ！

…しかし、新婚…

自分とトーヤの新婚生活を想像してみる…

トーヤと一緒に寝て、

トーヤと一緒にご飯を食べて、

トーヤがいつも側にいて、

2人でずっとイチヤイチャし続ける…

…いいな、新婚いいな

トーヤを「貴方。」って呼んだりとか。

トーヤが私に「愛してるよエヴァ。」とか言っちゃたりしちゃったりしちゃって！

「フッフ…私は用が済んだので帰りますね？またいつか会いましょう「闇の福音」。（いつかスクール水着を着せてみたいですわね…）」

ヒュンツと男は消えていく。

「チッ！逃ゲヤガッタカ…御主人、コレカラドウスンダ…ヨ？」

茶々ゼロが反応の無いエヴァをいぶかしんでこちらを見るが、それに気づかずにエヴァは自分の未来図を脳内に描いていく。

「式は挙げるか？…いや、そもそも参加する奴などおらん…新しい家を建てねばいかな…立派な城に…メイドは人形にやらせて…ハネムーンは2人で新・旧両世界一周旅行…」

「御主人…」

（御主人ハ旦那ガ絡ムト途端ニ腑抜ケチマウナ…コリヤ久々ニ旦那ト会ツタラドウナルンダカ…）

エヴァは茶々ゼロの生暖かい視線に気づかぬまま妄想をし続ける…

「フッフ、フハハハハハハハハハハッ！！完璧だ、完璧な計画だ！そうと決まれば早速準備をしなければ！！」

こんなので一様最強の魔法使いです…

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

N
a
g
i

はぁーめんどくせ…

俺はアルに頼んだ伝言道理の海岸にいるんだが…

「はあゝアリカと一緒に居たかったな…」

新婚なんだし2人でゆっくりしたかったな…

無論、本人の前では恥ずかしくて言えないが…

トーヤからの策は既に実行して、後はエヴァンジェリンを待つだけだ。

正直、この策で真祖の吸血鬼を足止めできるか疑わしいんだが…

ザッザッザッ

お、来たか。

砂浜を踏みしめて現れたのは、腰まで輝く金髪を伸ばし、露出の多い服装の上にマントを羽織り、傍らに一体の人形を従えた二十代に見える美女だった。

ふーんアイツが「闇の福音」ねゝ

トーヤの相棒なんだから強いんだろうな…

戦りてゝなゝ

…だけどトーヤがエヴァにかすり傷でもつけたら殺すって言われたしな…

……アレは本気だった…っ！

絶対に前戦った時より強い殺気を飛ばしやがったぞ、アイツ！

「どーした、私に怖じ気づいたか？」

何やら俺が震えていた理由を勘違いしているみてーだな…

「ハッ、テメーなんざトーヤに比べりゃ怖くもなんともねーよ！」

「あんな規格外と一緒にするな！」

あゝやっぱり相棒でもそう思ってるんだな…

「まあいい…で、さっさと本題に入ろう。

トーヤの伝言を言え。さもないと殺すぞ？」

魔力と殺気をガンガン飛ばしてくるなゝ

トーヤのに比べりゃ天と地だけだな…

…んゝちょうどいい位置に立ってんじゃねーかよ。あれならやりやすそうだな…

「おいおい、トーヤからの伝言が欲しかったらかかって来いよ。お前はトーヤの相棒だろ？トーヤなら力強くで聞き出すぜ？」

アイツと戦うならこの距離の倍は開けないと瞬殺されるがな…

「フッ、それもそうだな…

行くぞ、茶々ゼロツ！！」

「アイサー御主人ッ！」

アツサリと挑発に乗り、ナイフを持った人形と爪を伸ばして接近戦を挑んで来た。

魔法使いだけだと思つて接近戦で速攻仕留めに来たか？

普段の俺なら仕留めれたかもしれんが…
今日は運が悪かったな。

「トーヤ、やれ!!」

「すまん、エヴァ。」

シュンッ!

俺の合図と共にトーヤが瞬間移動して現れ、エヴァンジェリンを羽交い締めにする。

「なっ、トーヤッ!？」

「旦那ッ!？」

混乱している間に詠唱をする。

「マンマンテロテロ…(長いな…) 登校地獄!!」

カッ!

押さえつけたトーヤごと呪いをかける。

「なあああああああっ!？」

「ケケケケケケケケケッ!!」

「アッハッハッハッハッハッ!!」

三者三様の叫び声を上げる。

……2人程笑ってたがな……

光が収まると、「闇の福音」と人形は気絶していたがトーヤはまだ笑いながら立っていた。

「アッハッハッハ!中々面白かったぞ、ナギ!」

バシバシと肩を叩きながらそんなことを言う十夜。

呪いをかけられて面白かったなんて言う奴はテメーぐらいだぜ……

「さっナギ!麻帆良に行くぜ!」

俺がそう思っていると肩を掴まれ、瞬間移動で麻帆良に飛んだ……

s i d e o u t

s i d e T o y a

ナギに協力を仰いでエヴァに登校地獄をかけた十夜です。
ついでに自分にもかかりましたがね…

まっ！投影しておいた”破戒すべき全ての符”（ルールブレイカー）
でアツサリ破ったけどな〜

そんな訳でエヴァ・茶々ゼロ・ナギを連れて麻帆良学園に着いたわけだが…

「エヴァ！超可愛いぞー！！」

「アッハッハッハッハッお似合いだぞ！」

「フオッフオッフオッフオッフ馬子にも衣装じゃな。」

「御主人…」

「ト、トーヤ！か、可愛いかな…？」

あと、外野うるさいぞっ！茶々ゼロも憐れんだ目で見るとはじゃない！」

ヤバイなあ！

生制服超可愛いんですけど！

赤地に白と茶のチェックのスカートと茶色のベスト。それにエヴァのフランス人形のような容姿が見事にマッチしている。

「いや〜可愛いな〜流石エヴァだな！」

まじかわええ〜愛でたいな〜

「そっそうか？／／／／」

うむうむ、赤くなっちゃて…可愛いな〜

…ッハ！

「ナギテメエごらあ！？さっさと帰れや！エヴァの制服姿見てんじやねえ！？」

いやらしい目で見やがって！

「なっ！？んなもん見てねーよっ！」

ぷち

「んなもんだとゴラアアアツツ!? エヴァのこの激可愛い姿を
”んなもん”だああ!? テメエの目は節穴があつ!?」

叫びながら渾身の一撃をナギに見舞う。

バゴッ!

「はぶろっ!?」

ナギを沈めて再びエヴァを見る。

「可愛いって言われた… カワイイってカワイイってカワイイってカ
ワイイってカワイイってカワイイってカワイイってカワイイってカ
ワイイってカワイイってカワイイって……… / / / /」

小声でブツブツと呟いていた。

なんかショートしてんな

「おーいエヴァ?」

「カワイイってカワイイって… ハッ! な、なんだトーヤ?」

ようやく復活したみたいだな。

「お前は人を殺すのを嫌がってただろ? だから暫くここで2人でゆ
っくり暮らそうぜ。エヴァは学校も行ったことないだろ?」

原作まで居てもらわんな

（これは！2人でゆつくり暮らそうぜ！憧れの新婚生活！？トーヤから言い出してくれるとは！）

「そ、そうだな！2人で暮らそうな！」

おーなんか原作より喜んでるな

「ジジイもそれでいいよな？」

すっかり空気となっていた学園長にも許可をとる。

「フオツフオツフオツ、かの「拳皇」と「闇の福音」の2人が居てくれるならここの警備も万全じゃろうて。」

やっぱり警備員扱いにするつもりか…

「ジジイ…俺はいいがな、エヴァに何かあつたらこの学園全てを塵にするまで俺は暴れるぞ？」

窓ガラスが余波で物理的に震える程の殺気をジジイに叩きつけながら脅す。

「フオツ！？わ、わかつとるわい。学園の魔法先生達にはしっかりと云っておくから安心せい！」

冷や汗をダラダラ流してるしホントかな？

「それならまあいい。あと俺にケンカ売ってきた奴は正当防衛で潰すからな？」

その言葉で締めくくり、話を終える。

気絶して伸びてるナギに、なんだか幸せそうなエヴァと顔の青いジジイを尻目に、俺は原作開始が秒読み段階に入ったことに感慨を覚えた…

第十二話：トーヤの策と麻帆良学園！（後書き）

今現在番外編のアンケート結果。

1位、型月系世界

2位、ゼロ魔

3位、リリなの

4位、レギオス & amp ; とある魔術、科学

他一票多数。

となりました！

皆さんアンケートご協力ありがとうございました！まだまだ受け付けておりますのでよろしくお願いします！

作者がふと思い浮かんだクロス。

レンタル・マジカにクロスしてみたら面白いと思ったんだけど…知ってるかい？

中々無いと思うんだ。

感想お待ちしてます！

閉話・番外編プロローグ。(前書き)

先に謝っておきます！

すみません！> (| | ;) <

閉話：番外編プロローグ。

S i d e T o y a

麻帆良来て一日目が終わり、久々にエヴァ分を補給出来る！と意気込んでエヴァと一緒に寝て、先に寝たエヴァの天使の寝顔を見ていたんだが…

「よお！久しぶり！皆のアイドル邪神口キ様だぞ」

いきなり部屋の中に俺をこの世界に送り出した張本人がいきなり出て来たんですけど…

「なんすか？俺はエヴァとイチヤイチャしたいんですけど？」

速くエヴァとふれ愛たいんだよ！

見ろよこの寝顔！天使だぜ！？これを愛でずに何を愛でろというんだ！？

「あゝ今までは見て面白かったんだが……ぶつちゃけお前さゝ今から原作までイチヤイチヤするだけだろ？」

ギクウツ！

「つまないんだよね、それだとさ。」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい
ヤバいヤバい！！

嫌な予感がガンガンしやがるぞ！？

邪神はニヤリと笑つて。

「お前には原作開始まで違う異世界で原作ブレイクしてもらおうから。」

↑
(音速を超えた音)

俺は逃げたさ全力で。

せつかくのエヴァと一緒にスローライフを送る予定を壊されてたま
るか！

でも悲しいかな…相手は俺にチート能力をくれた奴なんだ…

「動くな」

ピシッ！

言葉を放たれた瞬間に体が動かなくなる。

「俺から逃げれる訳無いだろう、諦めな。お前が異世界に行くのは決定事項だから。」

いつの間にか隣で肩をポンポン叩きながら何の慰めにもならないことを言う邪神。

「やめろっ！エヴァと一緒に居たいんだ！この鬼畜め！お前は俺とエヴァがイチヤイチヤしてる所を見たくないんだろ！？」

俺の悲痛な叫びが辺りに響き渡る。

嫉妬か！？嫉妬なんだな！？

「H A H A H A H A H A、ソナワケナイダロウ？」

嘘だっ！？

こいつめえっ…！

俺とエヴァを引き裂くつもりかあっ…！

「きさまあああっ！ゆるさんぞおおっ！…いつか、いつか”ギャフン”と言わせてやるからなああああっっ！？」

世界に轟け！俺の怨みい！！

「”ギャフン”、これで満足したな？
では、アデューっ」

閉話：番外編プロローグ。（後書き）

というわけで、オリ主とエヴァのイチャイチャ新婚生活はお預けです。

あ、やめて！石を投げないで（<―>）

そんな皆さんにアンケートです。

？番外編を一段落してから本編に入る。

確実にエヴァと会うのは遅くなりますね。

？番外編と本編を同時に進める。

更新ペースが少し落ちますな。

作者が血を吐く勢いで頑張ればあんまり変わらないかも…（代わりに作者がダウンしますがね（泣））

さあどっち！？

なんだか→の話の途中なんだけどさ…

今さ、引つ掻き回してみたとは全く関係ないオリ主の恋姫ものを二話まで書き上げちゃったんだよね…（設定とプロローグ込みで…）

HAHAHA、どうしよう？

三学期編第一話：十五年越しの再会！（前書き）

なんかね…

感動の再開とかムリ…

三学期編第一話：十五年越しの再会！

S i d e T o y a

麻帆良学園の上空1000mから落下しながら感慨にふける。

長かった…！

俺はようやく帰って来たぞ！麻帆良よ！

このヨーロッパ風の街並み…バカでかい世界樹…麻帆良だ…麻帆良だよお！

異世界で色々やってきたけどやっぱりこの世界の空気が一番体に馴染むよな

最近では異世界に行くときは落下がデフォルトなのですっかりこの状況にも慣れてしまった…なんか虚しいな…

そんなことを考えながら地面から数mの所で一回転し、華麗に着地

する。

スタッ

取り敢えず麻帆良の森の辺りらしいんだが…

「何で俺は武器を向けられてんだよ？」

何だか如何にも魔法使い！って奴が数名…まあ魔法使いABCでいいだろう。そして野太刀を持った黒髪でサイドポニーに纏めた中学生位の女の子が武器を突き付けながら殺気をガンガン放ってくる。

おゝ原作キャラじゃん美少女だなゝ
まっ、エヴァ程じゃないけどな。

「五月蠅い！侵入者め！！」

魔法使いAが何か言ってますな…ああ、結界が在ったんだっけな。

「嫌々、俺は近衛のジジイにちゃんと許可はとってあるぜ？」

15年経ったけど…あのクソジジイ忘れてねーだろうな？忘れてたらあの愉快的な頭を開いて中身を調べてやるがな…

「出任せを言うな！貴様はここで捕らえてやる！魔法の射手 戒めの風矢！」

魔法使いBが実力差も弁えずに俺を無詠唱で魔法の射手 戒めの風矢で拘束する。

あれ？これもう正当防衛してもいんじゃない？

「ふう、どうやら弱かったみたいだな…」

カッチーン

俺を雑魚呼ばわりか？この最強の吸血鬼を相手に雑魚だと…？

「！」

目の前で野太刀を突き付けていた刹那がビクリと肩を震わし後退する。

「俺が弱いだと…？」

バキィッ！

戒めの風矢を引きちぎる。

『！？』

「少し…オハナシしようか…？」

抜き打ちで居合い拳を放ち、魔法使いA、Cの顎を打ち抜き昏倒させる。

「くっ！？神鳴流奥義、斬岩剣！」

はあ？詠春と比べりやまだまだだな

”夕風”の刃渡りは既に把握しているので避けるのは容易いが…

「ホイッと。」

パシッ

「!？」

中指と人差し指の二指で”夕風”を白刃取りで受け止める。

この娘はもうちょい上を知るべきだな

一人で護りきれるなんて自惚れるにも程がある。

「Good night」

ボスッ!

「ッゲ!？」

鳩尾に一発入れて沈める。

後一人…

ジロリと一人残った魔法使いを睨み付ける。

「ヒッ!」

うむ、俺を雑魚扱いしたことを後悔しろやあ!

「ハッハアッ!鉄拳制裁タイムだ!!!」

瞬動で接近し、相手を掴んで上空に飛び上がる。そして、落下中に魔法使いの腹を死なない程度に打つ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラ、オラァ！！」

ドガガガガガガガガガ、ドガアツツ！！

B。スタツと華麗に着地する俺と、グチャツと不様に墜落する魔法使い

「ふう、これって止めを刺したら駄目か？タカミチさんよ？」

「ハハハ、勘弁してくださいよ十夜さん。」

現れたのは、スーツを着て無精髭を生やして眼鏡をかけた、大戦時の美少年の面影が欠片も見当たらないタカミチだった。

「見てたのは分かってたけど、お前さあ……老けたよなあ。」

姿が全然違うぜ……

「うっ！ 気にしてるんだから言わないでくれよ…… オホン、改めて、お帰り十夜さん。」

「ああ、ただいまタカミチ。」

俺はようやく帰って来たんだな……

s i d e o u t

s i d e S e t u n a

初めはただの侵入者だと思っていた。

上から落ちてきた男に武器を突きつけて4人で包囲し、後は捕まえるだけだった。

魔法先生の放った”戒めの風矢”にもアッサリとかかる程度の奴だと思っていた。

しかし、

「ふう、どうやら弱かったみたいだな…」

この一言の後に雰囲気ガラリと変わる。

「！」

思わず後退りしてしまっ程の殺気を感じた。今までの戦いでも殺気を向けられたことはあったが、ここまでの殺気は初めて向けられた。

「俺が弱いだと…？」

バキィッ！

喋りながらアッサリと”戒めの風矢”を引きちぎる。

『！？』

あり得ない！？

気や、魔力での強化無しで魔法を破った！？

「少し…オハナシしようか…？」

喋り終わると手が霞んで消え、私の後ろにいた魔法先生が崩れ落ちるように昏倒する。

！？やられる前に攻める！

「くっ！？神鳴流奥義、斬岩剣！」

神鳴流の基本技である斬岩剣を詠春様より譲り受けた愛刀”夕風”で繰り出す。

「ホイッと。」

パシッ

「！？」

しかし、岩をも両断する斬岩剣を、気や魔力での強化無しのただの二指で白刃取りにされる。しかも、引こつが押そつがその場から一切動かない。

「Good night」

ボスッ！

「ッグ！？」

刀を取ろうと必死になっていると、決り込むように鳩尾に一発入れられて意識を失ってしまう。

この…ちゃん…

s i d e o u t

s i d e E v a n g e l i n e

爺に呼び出された。

トーヤの情報が入ったらしい。

私は茶々丸すら連れずに爺の所へ走った。

トーヤが消えてそろそろ15年が経つ。

あいつのことだから死んでるなんてことはないと思うが、15年間一度も連絡が無い。

しかも消え方が不自然だった。

トーヤと久しぶりに一緒に寝ることが出来て、嬉しくてつい早く寝

てしまったら、次の朝にはトーヤは消えていた。

家の床にはトーヤが踏み砕いたと思われる箇所があった。それも出口に逃げるように。

トーヤが戦わずに逃げを選ぶような奴が来たのか？…それはどんな化け物なんだ…

それ以来一度もトーヤからの連絡も無ければ、噂を聞いたこともない。

トーヤの居ないならこの学園は牢獄だ…

トーヤを探しに行こうにも「千の呪文の男」にかけられた呪いは、アホみたいな魔力でガチガチに固定されていて、まるで解けない。

仕方無くこの学園で待ち続けた。

途中で「紅き翼」のメンバーであり、トーヤから直々に修行をつけて貰っていたタカミチという奴が同級生になったり、新たな家族に茶々丸が加わったりと色々あった。

しかし足りない。

トーヤが居ない。

それだけで不安になる。

探しに行きたい。

だけに行けない。

だから待った。

何年も何年も。

ひたすらに待ち続けた。

そしてようやくトーヤへの手がかりを掴んだ。

知りたい。

一刻も早く知りたい。

その欲求に従って学園長室の扉を蹴破った。

バガアッ！

「爺！トーヤの情報を掴んだというのは本当……か………」

言葉が段々消えていく。

何故なら爺の前に男が立っていたから。

整った顔に、黒に近い蒼い髪と透き通るような碧眼、鍛えられた細身の体。

500年間ずっと隣で支えてくれた人で15年間ずっと待ち続けた本人がそこにいたから。

「よっ、ただいま、エヴァ。」

涙が自然と溢れる。

言いたいことは沢山ある。

だけど今は、ただ走った。

そして…

「お帰り！トーヤっっ！！」

抱き着いた。

三学期編第一話：十五年越しの再会！（後書き）

ごめんよ！

なんか無理だよ！

感動の再開とか無理！！

こんな駄作ですみません…

後お気に入り数が333件& a m p ;

P V : 5 5 0 , 0 0 0 アクセス

ユニーク : 5 5 , 0 0 0 人

突破いたしました！

こんなにも読んでいただいて感謝の極みです！私の駄作をこれからも応援よろしくお願いします！！

第二話：立ち位置決定！麻帆良での役割…（前書き）

ども、鳴る神です。

少し遅れましたねすみません。

原作開始前の立ち位置確認です。
駄作ですがよろしく願います。

PV：600,000アクセス

ユニーク：65,000人

突破致しました！

百万アクセス&mp;十万ユニーク目指して頑張ります！

第二話：立ち位置決定！麻帆良での役割…

S i d e T o y a

エヴァだよ…

触れるエヴァだよ…

妄想じゃなくてリアルだよ…

今俺の膝の上には、泣き疲れて眠ってしまった可愛い俺の癒しであるエヴァがいる。

「スー……………トーヤあ…」

カワええええええええええつつ！！

寝言は不意打ちだぜ！

「あゝいいかね十夜君？」

チツ！ジジイが俺の15年ぶりの生エヴァを堪能してるつつーのに…空気読めよ…

「そっそんな目で見ることないじゃろ！？話をせんといかんし…」

まあ、正論だな…

エヴァを早くベッドで寝かしてあげたいし…

「しかし…異世界を巡って来たとはのう…にわかには信じられんが…それなら君が15年間音沙汰が無かったのも納得出来るしのう。」

15年もエヴァとのふれ愛が無いのは辛かったよなあ。

行くとこ行くとこで原作をブレイクし続けて貯まったストレスをようやく癒せる…

「まあいいだろ。それより、エヴァに不自由させてねーだろうな？やってたらあ…？」

暗に脅しを聞かせる。

「フオツ！？も、勿論安全かつ快適に暮らしておるよ？」

冷や汗ダラダラ流しながら言いやがって…

「まあこれからエヴァや俺にちよっかい出してくるなら…潰すぞ？」

全開の殺気をジジイに叩きつけながら確認する。

俺の癒しを邪魔する奴は潰さんとな

「フオツ！？分かったから勘弁してくれんかね。老人には少々キツイのでな…」

顔を青くしてるし、信じていいかな？

「つか俺の全開の殺気を受けて顔を青くするだけかよ…大抵の人間は失神したりするんだがな」このジジイも中々に強いな…

「じゃあそれは置いといて麻帆良での俺の立ち位置を確認しようか？ジジイは俺にどうして欲しいんだ？どうせ働かせるつもりなんだろう？」

警備員、あるいは広域指導員が楽なんだが…あわよくば2 - Aの副担人になれば原作介入も簡単に出来るしな。

「フオツフオツフオツ！お見通しかの」

フム…君は面識もあることだし、タカミチ君のクラスの副担人でもしてもらうかの。教科は…世界中を旅しておったし、語学は堪能じやろ？英語の教師でもしてもらおうかの。」

そう誘うか…

「ジジイ、俺は教えるのは苦手だし、体を動かしてる方が性に合ってる。だから体育教師とかじゃ駄目か？」

条件的にはいいんだが…英語教師だとネギと接する時間が増える。ぶっちゃけあんなガキと四六時中一緒とかマジでストレス貯まるわ…

「フム…なら英語教師は補助役に徹してもらい、体育教師を担当してもらおうとするかの。それなら構わんじやろ？」

どうあっても逃がさんつもりか…
まあ妥協すべきかな？

「…まあいいだろう、妥協してやんよ。…で、裏の仕事はどうなんだ？」

裏の仕事はあんまりエヴァ以外と組みたく無いんだがな…けどストレス解消に暴れたいしな」

「君はエヴァと二人でチームを組んで夜の警備を担当してもらう予定じゃ。君が世間にバレると大変じゃしな…それから警備員と兼任して昼は広域指導員という学園内のトラブルを解決する役目もやってもらうかの」

「おいおい…仕事多すぎないか？」

明らかにオーバーワークだろ…

「まあ広域指導員はついでじゃしな」軽くやってもらえばいいからの。…仕事はこんなものの、住居については（ジー……………）…エヴァと同じとこにするから睨まんでくれんかの…」

「ならいいけどな」

そうじゃなかったらキレるところだったぜ…

「怖いのが…まあいいわい。十夜君には三学期から仕事をしてもらうかの。」

おお！そついや今日が何時か聞いてなかったな。

「ジジイ、その三学期はいつなんだ？」

「明後日からじゃの。」

は？

「じゃから明後日じゃ。」

「ちょっ、まっ、マジか！？俺の癒しは！？安息の時間は！？エヴァとのふれ愛は！？」

明日からだったら準備で1日潰れちまうぞ！？エヴァでモフモフしたいのに！？

「フオッフオッフオッフオッフ。では明後日にまたここに来てくれい。」

ジジイが俺の言葉を華麗にスルーし、片手で髭を撫でながらも一方の手で手を振りながら喋る。

「ちょっ、ま！」

瞬間、体が光る。

……

……

……

…

気がつくと学園長室ではなく、辺りを森に囲まれたログハウスの前に立っていた。

「クソッ、あのジジイ転移させやがった！」

俺に気づかせずに転移をさせるなんて、無駄に高度な技を使いやがって！

俺がイラついているとまた辺りが光だし、俺の2〜3m上にエヴァが転移してきた。

「うおっと！」

慌てて震動の無いうちにエヴァを受け止める。

ぽすっ

と、軽い音を辺りに響かせながら無事に俺の腕の中に納まるエヴァ。幸い、今の衝撃で起きることはなかったようだ。

「あのジジイ……」

ともかくエヴァを早くベッドで寝かしてあげたいのでログハウスまでエヴァを抱えながら歩く。

抱え方？

勿論お姫様抱っこさ！

この体勢だとエヴァの顔が見れて実に良い！おんぶにもそそるものがあるけどな〜

そんなことを考えながらログハウスの玄関の前に立ち、扉をノックする。

コンコンッ

「ちわ〜宅配便です。お姫様一人届けに来ました〜」

あ〜この匂い、帰って来たな〜1日しか住んでなかったけど我が家って感じがするわ〜

ガチャ

郷愁の念を今更ながら感じ取っていると、扉が開き、メイド服姿に整った容姿、翠の髪に耳の在るべき場所から生えたアンテナらしきものが特徴的なベツピンさんが現れた。

そう！

ネギま！俺的嫁にしたいランキング第一位。メイド服が似合うランキング第一位。等に輝くステキガイノイド茶々丸嬢だあーッ！

「はい…どちら様でしょうか？…マスター？」

コテンと首を傾げる茶々丸嬢。

いいね萌えるね！俺の第二の癒しだね！

「マスターを運んでいただきありがとうございます。失礼ですが貴方は…？」

下からの上目遣いGOOD！

お兄さん何でも答えちゃうよ！

「俺は蒼埜 十夜。エヴァの相棒で茶々ゼロの友達さ。」

茶々ゼロにも会いたいな〜会って久しぶりに一緒に酒を飲みたいな〜

「蒼埜 十夜様……まほネット検索…該当件数多数、情報抜粋。史上最高額の賞金首にして史上最強の吸血鬼。マスターと行動を共にし、「拳皇」等の数々の異名を取る。マスター曰く「世界のバグ」。大戦時に帝国第三皇女テオドラに雇われていた形跡有り。公式記録では大戦後「紅き翼」の面々に捕らえられ、魔獣の孔に落す処刑で死亡…」

マスターから最重要人物に指定。

…申し遅れました。私はマスターの従者の絡繰 茶々丸と申します。蒼埜様のご来訪をマスターに代わって歓迎致します。」

どうやらネットで検索したらしい情報を喋り終えた後に、ペコリと丁寧なお辞儀をする茶々丸嬢。

「良いつて良いつて。取り敢えずエヴァをベッドに寝かしたいから案内してくれないかい？」

エヴァは魔力を封印されてるから風邪ひいちまうからな。

「畏まりました。こちらにどうぞ。」

茶々丸嬢の後ろを付いて生き家の中に入る。家の中は可愛い人形がそこかしこに置いてあるファンシーな内装だった。

うわぁお、エヴァの趣味全開だな…

「この部屋です。」

これまたファンシーな部屋に案内され、中にあったベッドにエヴァをそつと寝かしつけようとする…

…が、ギュツと服を握られ離すことが出来ない。

仕舞いには

「とーやぁ…」

と寝言で言われる始末。

離せねえっ！こんな寝ながら不安そうな顔したエヴァをほつとける訳が無い！

「あゝ茶々丸嬢、話は明日でいいかな？俺は今日はエヴァと一緒に寝たいんだけど…」

いちよう聞かんな。

「その方がマスターも喜ばれるかと…
マスターをよろしくお願いいたします。」

ペコリと一礼する茶々丸嬢。

「ん、じゃあまた明日。お休み」

「お休みなさいませ蒼埜様…」

茶々丸は再び一礼した後に扉を閉めて下に降りて行った。

「さてと…」

エヴァと一緒にベッドに入り、布団を被る。

エヴァと見詰め合うように寝転び目を閉じる。

「お休みエヴァ…」

エヴァの温もりを感じながら、明日からの慌ただしいであろう日々
に思いを馳せる。

やっとな原作か…

P S : 翌朝エヴァの絶叫が響き渡ったのは言うまでもない。

第二話：立ち位置決定！麻帆良での役割…（後書き）

来ました！

原作開始秒読みです！

どんなキャラと絡ませようかな♪ 原作ぶっ壊してえ♪ ネギとか
アンチしたいな♪

作者はウキウキです！

感想も百件を超えましたし、嬉しい限りです！

これからも本作をよろしくお願いします♪
感想待ってまゝす！

しかし、ホンマに誰と絡ませよう…

第三話：始まる物語、21Aとの邂逅。（前書き）

短い、そして駄文…orz

そして

PV：777、777アクセス

ユニーク：77、777人突破。

なんか同じ数字が並ぶと壮観…

これからよろしくお願いします！

第三話：始まる物語、21Aとの邂逅。

Side Negi

僕はネギ・スプリングフィールド、メルディアナ魔法学校の卒業試験で『日本で教師をすること』っていう修行を受ける為にイギリスのウェールズからやって来たんだ。

今は久しぶりに会ったタカミチ、迎えに来てくれた明日菜さんと木乃香さんと一緒に学園長室に居るんだ。

「この修行はつらいぞい？やり通せるかの？」

目の前の学園長が髭を弄りながらも鋭く尋ねてくる。

「はい！やり通してみせます！」

ボクはお父さん、「サウザンドマスター」みたいな「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」に絶対になるんだ！

「フオッフオッフオッ！では君を助けてくれる先生を紹介しよう。しずな君、十夜君、入って来なさい。」

ガチャ

「失礼します。」

「入るぞジジイ。」

扉を開けて入って来たのは、眼鏡をかけておしとやかそうな綺麗な女性と、蒼い短い髪を逆立てて、スーツを着崩した目付きの悪い碧眼の男性だった。

「ネギ君の指導教員をやってくれる源　しずな君じゃ。」

「フフフ、よろしくね？」

「あっはい、よろしくお願いします！」

わあーこんな綺麗な人が教えてくれるのか、嬉しいな

「そして、君の担任するクラスの副担任及び、英語の補佐と体育を担当してくれる蒼埜　十夜君じゃ。」

蒼い髪だし外国人さんかな？
でもちょっと怖いな…

「ちょっと待って下さい学園長！そちの男の人はともかく、なんでこのガキンちよが担任なんですか！？高畑先生はどうなるんですか！？」

む！ガキンちよ扱いなんて酷い！

お猿さんみたいな人に言われたく無いですよーだ！

「僕は海外出張とかで忙しいからね。代わりにネギ君が担任をしてくれるんだよ明日菜君。」

へ〜タカミチって忙がしいんだな
ボクも頑張らないと！

「フオツフオツフオツ！ネギ君は大学卒業程度の学力はあるから心配せんでもいいぞい？」

「だ、だけど！」

「この話は終わりじゃ。さっ、授業が始まるぞい、教室に行きなさい。あつ十夜君はちよつと残ってくれんかの？」

あゝこれから授業か！緊張するな

s i d e o u t

s i d e T o y a

ガッカリだ。

原作で知ってたつもりだったけど、予想以上に酷い。

「十夜君。どうじゃね、ネギ君は？」

ネギの評価？

「覇気が無い、隙が多すぎ、顔に考えが出過ぎ、俺の出した殺気にも気づかない。…ホントにナギの息子か？ナギが十代のころはもつと出来たぞ？」

まほら武道会に出てたナギはかなり強かったのにな…
性格もなよよしてそうだし…

「中々厳しいの…まあそれはともかく、君にはネギ君のサポートを
してもらいたい。やってくれるかの？」

本人見てから決めるつもりだったけど…

「だが断る！教師の仕事はするが、アイツのサポートを自分からする
つもりは無い！」

あんな奴にエヴァの裸を見られるだぞ？
断じて許せん！

殺さんだけでもありがたいと思え！

「じゃあ俺は授業に行くからな。」

絶句しているジジイを放置して、俺は授業に向かった…

……
……
……

取り敢えず、教室に向かったんだが…

丁度目の前に扉を開けたネギがいるんだ。

取り敢えず居合い拳で落ちてくる黒板消しを弾く。

スパン！

つーか障壁を常時発動させてんなよ！
バレんだろうが！

そのままネギを押し退けて教室に入る。

入り口にあったロープを軽くスルーし、放たれた吸盤の矢を拳で粉砕し、降ってきた水入りバケツを一滴もこぼさずにキャッチし、床に置く。

そのまま教壇に上がり一言。

「あゝ今学期からここの副担任及び、英語の補佐及び、体育教師及び、広域指導員になった蒼埜 十夜だ。よろしく頼む。」

なげーつつの、どんだけ仕事あるんだよ…

『か、』

か？

『カッコいいいいいいつつつ！！』

おおう！音響兵器！

耳が痛いぜ！

叫びながら質問を次々に浴びせてくる2・A一同。

若干名は殺気丸出しだったり、「戦ってみたいアル！」みたいな空気をビンビン出してるけどな

「はいみんな！質問はこの朝倉 和美に任せて！」

む、出たな文屋。

出てきたのは麻帆良の文屋の朝倉 和美。
実物は案外可愛いな…

エヴァには勝てんがな！

「では質問です。名前は？」

「蒼埜 十夜」

「身長と体重は？」

「187の75kg」

「出身地は？」

「名前通り日本」

「髪の毛は地毛ですか？」

「目と同じく生まれつき」

「趣味と特技は？」

「趣味は修行と特技を増やすこと。特技は弓道と大抵のことなら何でも出来ること。」

「女性経験は？または付き合っている女性はいますか？」

「ノーコメント、付き合っている女性は今のところはいない。」

ふむふむ、と頷きながらメモをしている文屋。

「では最後に、このクラスで好みの人は誰ですか？三人程上げて下さい。」

フム…これは即答出来んな…

「エヴァンジェリンと絡繰、それから龍宮だな。」

タツミは好きなんだよ

仕事人！ってところがツボなんだよ

色黒美人もポイント高し！

『おおおおおつつつ！！』

騒ぐ2・Aの生徒と、照れる若干名。

うむ、赤くなったエヴァも素晴らしい。

茶々丸も湯気が出てるし、タツミーもほんのり照れてるな

「質問はここまでだ。というか、そろそろ気づいてあげような」

俺の後ろで空気となっていたネギを振り向きながら言う。

こいつ出るタイミング見失ってやがんのな。つーか影薄！それでも主人公か？

「あつ、き、今日からここの担任になりました。ネギ・スプリングフィールドといいます！よろしくお願いします！」

ペコリとお辞儀をするネギ。

『こつ、子供おおおつつつ！！？？』

ああ、このクラスだと退屈しそうにないな…

こつして俺と2・Aとの邂逅は終了し、俺の麻帆良での慌ただしい生活は始まった…

第三話：始まる物語、21Aとの邂逅。（後書き）

自分の嫌いなキャラが絡むと、執筆スピードが大幅に遅れることが
発覚…

変態ならもっと楽に書けるのに…

感想お待ちしてます。

第四話：明日菜、受難の始まり。（前書き）

遅くなりましたっ！

第四話、更新いたしました！

新年早々葬式行ったり、テストがあったり、39度の熱を出したり…
もうダメポ…orz

熱にうなされながら書き上げたので、いつもよりも更に酷い文になっていますが、よろしければどうぞ。

第四話：明日菜、受難の始まり。

side Asuna

私が十夜さんに初めて会ったのは、ガキンちょと一緒に学園長室に行った時。

蒼い髪に碧い目、引き締まった体でスーツを着崩した姿はカッコよかった…

見た目は私より少し上なただけだけど、こっ…何て言うか、空気？が違うのよね

高畑先生と同じ…うっん、高畑先生よりも渋い空気を纏ってるのよね

高畑先生が担任じゃ無くなったのは残念だけど、十夜さんが来てくれたのは嬉しいかも…

あのガキンちょはいらないけど…

今はガキンちょの自己紹介が終わって、英語の授業中…なんだけど…

「うっん、届かないっ！」

爪先立でプルプルしながら黒板に書こうとしているガキンちょ。

…身長が足りないのは分かってるんだから、初めから台なりなんなり用意しときなさいよね…

ホントに大丈夫なのかしら？

教室の端っこで待機している十夜さんに替わってもらった方がいいんじゃない？

その後、いいんちよがどこから取り出したピカピカの台を渡した。

「（相変わらずシヨタコンなんだから…）」

ボソツと呟く。

が、

「なんですってーっ！？明日菜さんこそオジコンでしょう！」

いいんちよの地獄耳には聞こえたようだ。

思わず、ムーとしてしまう。

「シヨタコンよりはましよ！」

ああいつものパターンだな…

いいんちよと取っ組み合いになろうとした時。

ビュンツ！ バガンツ！

私といいんちよの間を、たぶんチョークが高速で飛んでいき。壁に

当たって、余りの威力にチョークが粉になったみたいだ…

いいんちよと二人で恐る恐るチョークが飛んできた場所を見ると、十夜さんがチョークをお手玉しながらこちらを見ていた。

「授業中に騒ぐなよ！動く次は当たるかもしれんな」

いいんちよと二人で顔を青くしながらコクコクと頷く。

ていうか、あんなの当たったら絶対痛いじゃない！チョークが粉になるって、どれぐらい力を込めたのよ！？

「よし、ではスプリングフィールド先生、続きを始めて下さい。」

「は、はい！えーとでは23ページの…」

カツカツと黒板に文字を書く音だけが響き渡る。いつもは騒がしいこのクラスがこんな静寂に包まれている。

というか怖い。

今騒いだら間違いなく魔弾チョークが飛んでくる。

「ではこの問題を…」

全員が目を逸らす。

この沈黙の中で自ら挙手する人は素晴らしい勇気だ。私にはその勇氣は無いけれど…

ていうか！このガキンちよは空気を読みなさいよ！こんな時に質問なんかすんじゃないわよ！

間違ったら魔弾が飛んできそうで怖い…

ガキンちょはグルリと教室を見回す。

頼むから当てないで…っ！

そんな私のささやかな願いは叶えられることはなく。非情にも、ガキンちょは私を完全にロックしている。

「じゃあ明日菜さん。答えてください。」

「なっ、なんで私なのよ！普通出席番号とかでしょう！？」

一応最後の抵抗を試みる。

「いえ、案内してくれたお礼に…」

はあっ！？

「いらないわよそんなの！」

「まあまあ、簡単でしょ？さっ、答えてくださいね？」

私の悲痛な叫びは届かずに、無慈悲な言葉を浴びせられた…

「わ、分かったわよ！答えればいいんでしょ！…えーと、あ、I
あむ？えーと……」

全く解らない…

所詮私はバカレンジャーレッドなのよ…

英語なんて無くたって生きていけるからいいわよ！

「？ わからないんですか？」

キョトンと首を傾げるガキンちよ。

「明日菜さんは保健体育と美術以外は、ダメダメのおバカさんなんですよ？」

確かにそうんだけど…

「へー明日菜さんっておバカさんなんですネー」

あははははは！

と、皆が笑っている。

恥ずかしい…なんで私がこんな目にあわなくちゃいけないのよお…

と、その時。

ヒュババツ！

「へぷっ！？」「ぺぷろっ！？」

コン！バギヤ！と、二つの音が響いた。

放たれたのは、必中の魔弾。

犠牲者は二人。

いいんちよとガキンちよ。

いいんちよは手加減されていたのか、少し痛そうにしているだけだが、ガキンちよは…失神してるっ!?

余りの威力にガキンちよは失神していた。確かにチヨークにあるまじき音が出たけど…

教室は再び静寂に包まれ、聞こえるのはガキンちよがうなされる声だけ。

この惨状を作り出したのはやっぱり十夜さんだった。

「雪広お。他人のコンプレックス弄って楽しいかあ？それもわざわざ人前でよお。それから聞こえてないと思うけど、スプリングフィールド先生もだなあ。教える師である教師が生徒を貶めるような発言はいかんでしょ。教師失格だぞ」

十夜先生が良いこと言ってるんだけど…

ガキンちよがピクピクしてる!?

あれって大丈夫なの!?

キンコーン…

「おっ。今日はこれまで。日直」

「あつ、ハイ!きりーつ、きおつけえ、れえい!」

本屋ちゃんの号令で、私達は慌てて挨拶をする。

十夜先生はガキンちょを担いで教室からでて行った。

「怖かったね」

「ネギ君大丈夫かな？」

「子供先生×十夜先生……グフフ……」

「ね、先生達の歓迎会しない？」

「いいねー！決定！」

途端に騒ぎだす教室。

怖かったけど嬉しかったな

やっぱりガキよりダンディーな大人の方がカッコいいわよね…

「あ、アスナはネギ君呼んで来てね！」

「え？わ、分かったわ」

なんだか知らない内に、ガキンちょを呼びに行くことになってしまった。

どうせなら十夜先生が良いのに…

s i d e o u t

s i d e T o y a

授業終了後、ネギを職員室にいたしずな先生に預け。この後始まる歓迎会まで麻帆良を回って、時間を潰すことにした。
ネギは軽い脳震盪だし、直ぐに目を覚ますだろう。その後恐らく原作通りに魔法がバレ、物語が始まるだろうな…

俺には解決せにやらんことが多々ある。

正義バカどもをどうやって対処するかとか、刹那から向けられる殺気とか、古 菲から確実に挑まれる勝負とか…

俺にとっては解決するのは簡単だが、いちいち面倒だ。
にゃゝ

？

「おおっ！」

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか開けた広場の
ような場所に出た。

そこに広がるのは猫の楽園。

沢山の猫がたむろし、日の光を浴びながら眠そうに日向ぼっこをし

ている。

ああ、癒される…

お猫様は偉大だよ…

丸っこいフォルム、可愛らしく動くヒゲ、そしてなにより触れるものの全てをいやす肉球…

「素晴らしい…エヴァ、茶々丸に匹敵する癒しを俺に与えるとは…」

恐らく、ここが原作で茶々丸が餌をやっていた場所なのだろう。野生の猫にしては人に慣れているしな。

にゃー

「ああ、癒されるな」

決めた。

俺も時々でいいから茶々丸と一緒に餌をあげに行こう。野菜先生や、正義バ力達から受けるストレスを、ここで癒すのだ。

「あの、蒼埜様？」

「ん？ おお！ 茶々丸じゃん。どつたの？」

いつの間にやら背後に茶々丸がいた。猫に癒され過ぎて、気づかなかった。不覚…

「いえ、教室にてマスターがお待ちですので、蒼埜様をお呼びにきました。」

あー、歓迎会か…

「わかった！今から行こう。それから茶々丸、堅苦しいから名前で呼べよ？様付けもなしだからな？」

エヴァの従者なら俺の家族同然だしな。

「し、しかし…」

「いーからいーから。命令だぞ？」

「は、はい。十夜さん／＼／＼」

あゝ癒される…
和むわゝ

おっと、さっさと行かないとな…

「そんじゃ、行きますか？」

あの騒がしい教室へ…

第四話：明日菜、受難の始まり。（後書き）

PV：1 / 1 1 1 / 1 1 1 アクセス

ユニーク：1 1 1 / 1 1 1 人

突破！！

皆さんありがとうございます！

このような素人の書いた駄文に付き合ってもらい、光栄です！
御目汚しですが、これからもよろしく願います！

PS：すいませんが、学校が始まってしまったので、更新が大幅に
遅くなるかも知れません…

第五話：歓迎会と警備員。（前書き）

遅くなりました！ 鳴る神です。

リアルが忙しい！

テストやだ！ 資格試験なんて死ね！
私に癒しを！

……すみません、取り乱しました。

さて、相変わらずの”THE駄文”ですが。
よろしければどうぞ。

第五話：歓迎会と警備員。

Side Toya

『ようこそ！ 2 - Aへ！！』

そんな言葉と共に開始された歓迎会。

学園人気No.1屋台である「超包子」チャオバオズの料理が振る舞われ、皆パーティーを楽しんでいる。

会場の一角でエヴァと茶々丸、ついでに元2 - A担任ということで呼ばれたタカミチと一緒に料理をパクつきながら、先ほどタカミチから聞いた話について考える。

タカミチが言うには今日の夜に、夜の警備員達と俺の顔合わせをするらしい。

俺ほどの知名度を誇る賞金首ならば、魔法に関わる者達なら実力は誰もが知っているだろう。

なにせ魔法界ではエヴァ以上に恐れられているし、知名度も大戦の時に暴れたせいでエヴァより有名だ。

しかし、有名故に確実に正義バカ達から何かしら絡まれるのは間違いない。

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」を目指す魔法使いにとって、俺は倒すべき悪である。

そんな極悪人が同じ警備員になるなんて、あの正義バカ達に許容で

きる筈がない。

まず間違いなくケン力を売ってくる。

まあこんな処で教職に就いて、本当の戦いから遠ざかった奴らを返り討ちにするのは簡単だが、後々めんどくさいことになるだろう……

さて、どうするか……

「と、トーヤ！」

「んあ？」

エヴァが何やら呼んでいるので思考を中断して、エヴァの方に顔を向ける。

エヴァは何故だが分からないが、顔を赤くしながら「超包子」の料理を箸で摘まんで差し出している。

「あ、あーんしろ！ 食べさしてやる！」

「は？」

思わず呟く。

エヴァの一言は、先程まで考えていた夜の警備についてのことを全て吹き飛ばす程の威力を持っていた。

「い、嫌なのか？ 先程から難しい顔で考えて込んでいるし、私と一緒にだとならないのか……？」

後半になるにつれて、段々小さな声になっていくエヴァ。

いかん！ エヴァが若干涙目だ！
フォローせねば！

「ち、違つぞ！ エヴァと一緒に居るのがつまらない筈がないだらう！？」

慌てて否定する俺。

てか、これぐらいで泣くなよエヴァ！？

「ほ、ホントか？ な、ならあーんしろ。特別に私が食べさせてやるから」

上目使いに”あーん”だと！？

くっ！？ なんとという破壊力だ！

的確に俺の急所を狙ってきやがる！？

あと、ニヤニヤしながらこっちを見てるタカミチがうぜえ！

「そ、それは」

恥ずかしいし……

「やっぱり嫌なの「喜んでえ！」ホントか！？」

段々と涙声になっていくエヴァの言葉に被せるように、慌ててフォローを入れる。

あ、危ねえ…… 間一髪セーフだな。

エヴァを泣かすと後が怖いからな……

「じゃ、じゃあ…… あ、あーん」

ぬうつ……！ 腹を括るしかないか……

「あ、あーん」

パクつと食べたが、恥ずかし過ぎて味が分かんねえ！

「えへへっ」

ぐうつ！？

はにかむエヴァは凶悪すぎるっ……！

俺にトドメを刺す気か！？

そんな風に和んでいたんだが……

「タカミチ！」

空気をぶち壊すように、ませガキがタカミチ突貫していった。

恐らく原作イベントのアレなんだろう……

原作通りにタカミチの思考を読み取り、明日菜に馬鹿デカイ声で伝えている。

こっちまで聞こえる位の音量で……

……っかさ、あいつ全く魔法を隠すつもり無いよな

思いっきり人前で魔法を使ってるし……

しかも、仮にも正義の味方見習いが他人の頭を勝手に覗き、それを

デカイ声で吹聴する……

バツカじゃねえの？

現に、魔法の関係者連中は、顔をしかめたり呆れたりしている。
エヴァなんか俯きながら肩をプルプルと震わしている。

あーキレてんなー

今のエヴァとは余り関わりたく無いが、聞かなかつたら後が怖いので、意を決して聞いてみる。

「あー、どうしたエヴァ？」

声をかけた瞬間エヴァはガバツと起き上がり、俺の眼前まで詰め寄って来た。

「どうしたもこうしたも無いわ！？」

おおうつ！？

耳元で叫ぶなよ！

「アイツの息子がどんな奴かと思ったら、本国の連中と同じ様な奴か！？ あんな奴が担任になるだ！？ 私はまっぴらゴメンだ！？」

ヒートアップしながら喋るエヴァ。

幸いにもクラスの大部分が途中から消えたネギと明日菜を追って行

ったので、他の連中に聞こえることはなかったが…… 熱くなり過ぎだな。

「気にすんなって。仮にアイツが俺達を本国の連中のように排斥しようとしても、……俺達二人が平和ボケした奴らなんぞに負ける訳が無いだろう?」

ニヤリと笑って見せる。

エヴァも落ち着いたのか、こちらを向いて、同じ様にニヤリと笑う。

「……フツ。私としたことが取り乱してしまったようだな……。そうだな、私達が負けることなんぞ有り得ないな」

「ハッ！ そうだよ、俺達はドッシリ構えてりやいいんだよ。手を出して来たらブツ潰す！ それで万事解決だ」

身も蓋も無いが。俺達にはそれを成し得る力がある。永きに渡って研鑽され、練磨された力は、いくら天才だろうとも、高々10歳のガキごときに破れる筈も無い。

「そうだな……。さて、飲み直すか」

「だな。そんじゃ、乾杯つと」

”チン”とグラスをぶつけ合う。

さて、いっちょ俺の実力を平和ボケした正義バカ達に見せつけてやるかね……

Side out

Side Takamichi

「さて、もうすぐエヴァンジェリン来る。そしてあの」「拳皇」
も来るじゃろう」

ざわざわと騒ぎ出すこの世界樹前広場に集まった夜の警備員達。

「バカな!？」「死んだ筈では!？」「本当ですか学園長!？」「
蒼埜 十夜……」「あの史上最強の吸血鬼が?」「1200万\$の
賞金首……」

フー

と、周りの喧騒を無視し、呼吸を整えながら出来る限り気を練って
いく。

周りがある程度落ち着いてから再び学園長が話を切り出す。

「今日集まってもらったのは他でもない。「拳皇」を……。この学

校の警備員にする」

ざわっ

と、先程以上にざわつき、非難を学園長に浴びせる。

ボクは練り上げた気を身体中に廻らせ、限界まで身体を強化させる。

「静まらんかつ！！……あ奴は自分とその仲間に手を出さん限り、こちらに危害を加える可能性は低い。しかもあ奴と一番親しいエヴァンジェリンは封印し、こちらの手の内じゃ。いざという時はどうとでもなるわい」

周りは学園長の言葉に安心している。

「それに、いくら最強の吸血鬼じゃろうとも、この学園の全戦力で当たれば恐るるに足らぬよ」

と、学園長が言っているが”甘い”

十夜さんの実力を過小評価し過ぎてる。

昔「紅き翼」がほぼ全員で戦って負けた人に、言っちゃ悪いけれどこの学園に居る魔法使い達では勝てる気がしない……

ボクが相手でも負けるのは確実だろう。

だけど、戦ってみたい。

ガトウさんと同じく、短い間だったけど、自分に戦い方を教えてくれ、助言を与えてくれた第二の師匠。

届くとは思わないけど、何処まで自分の力が通じるのか試してみた

い。

カツ、カツ、カツ、カツ。

思わず口がつり上がる。

エヴァと茶々丸君を伴って現れた十夜さん。幾人もの敵意を受けてもまるで動じることなく、学園長に向かって真っ直ぐ歩いて来る。

カツ、カツ、カツ、カツ。

「ジジイ。呼んだか？」

その暴言に反応した周りの者達が騒ぎ出す。しかし、いくら罵声を浴びせられようと、十夜さんは決して揺らがない。

自らの力を最強と自負し、尚且つ、その力に慢心すること無く、ただひたすらに磨き、研鑽し続けて得た絶対の自信。

そして永きに渡って幾多の修羅場を潜り抜けて培った圧倒的な経験値。

故に、高々2、30年生きた者の言葉に逐一反応するようなことは無い。

「フオッフオッフオッフ。何、これから共に働く者達に紹介しようと思っただけ？ ついでに君の実力でも見せてもらおうとかな？」と
自らの髭を撫でながら、値踏みするような視線を向ける学園長。

「ハッ！ ジジイ、耄碌したか？ トーヤは私より強いんだぞ？
確かめる必要なんて無いだろう」

「いやいや、もしかしたらという事もあるし、念のためじゃよ。念のため、な……」

エヴァの指摘をさらりと受け流し、あらかじめ用意した表向きの建て前を話す学園長。

本当は十夜さんの手の内を調べ、今後の為に対策を練るつもりなのだろう……

「いいじゃないか、エヴァ。……で、ドイツが相手なんだ？　ここに居る全員が相手でも一向に構わんどぞ？」

挑発してくる十夜さん。

周りは挑発を受け、激昂している人達が今にも飛び掛かって来そうな様子だ。

「静まらんかつ！　……フォッフォッフォッ。君の相手はタカミチ君にしてみらうとするかの？　いいかね、タカミチ君？」

来た。

「はい、勿論です」

全身の気が昂り、猛る。

自らの師と戦える事に歓喜する。

「では我々は少し離れた場所で見ているからの。頑張ってくれたまえ」

周りの関係者が各々移動していき。学園長も転移魔法で消えていく。

これに残るは四人。

エヴァと茶々丸君の主従と、僕と十夜さんだけ。

「ではなトーヤ、私達も行く。せいぜいタカミチを揉んでやれ。行くぞ茶々丸」

「はい、マスター。それでは失礼します十夜さん、高畑先生。」

手厳しい言葉を言うエヴァと、ペコリと一礼してからエヴァに着いて行く茶々丸君を見送る。

……そして二人が立ち去ってから、喋りだす。

「さて、トーヤさん。一手ご教授願いますよ？ 大戦の時から貴方とは一度戦ってみたいと思ってました」

どれだけ自分の力がこの、目の前の最強に通用するのか気になって仕方がない。

「あれからお前がどれくらい出来るように成ったか見てやるよ。……かかってきな」

多分届かないだろう。
ただど戦りたい。
戦って認められたい。

故に……

「行きますッ!!」

戦うのだ。

第五話：歓迎会と警備員。（後書き）

ゝ（。。）ノ アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！

……… suite せん。

狂喜乱舞してました。

それというのも

PV：1,400,000 アクセス

ユニーク：160,000 人を突破したり。

お気に入り登録数が900を超えたり。

某理想郷の搜索板で、この作品がオススメされていたりしたからです！

嬉しすぎる……

ハッ！ もしかして今が人生のピーク！？

と思っちゃいますよ……

某理想郷の搜索板は自分も利用しているので、オススメで上がって、面白いと言われるのはこの上無く嬉しいです！

これから作者共々頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

第六話、タカミチVS十夜 闇夜の拳劇！

Side Toya

バババババツ！

「うおっと！」

いきなり牽制の居合い拳を放って来るタカミチ。

慌ててサイドステップで回避し、体勢を整えながらこちらも居合い拳を放つ。

「ッ！？ 流石ですね！」

タカミチも回避を行い、お互いに7～10m程の距離で対峙する。

「ハッ！ 世にも珍しい居合い拳同士の撃ち合いといこうか！」

バババババババババツツ！！

宣言と同時に俺達の腕が霞む程の速さでポケットから撃ち出され、何も無いはずの空中でバンバンと何かがぶつかり合う音が響く。

思わず口がつり上がる。

ホントに拳速・重さ・鋭さ、全てがかつてのガトウよりも優っている。

「タカミチ！ テメエ強く成ったなあ！？ ガトウより強いぞ！」

「ハハハッ！ 貴方に言われた感謝の正拳突きを欠かしたことは一度も無いんですよ！？」

言いながら更に拳速を上げるタカミチ。

ズババババババツ！！

「！？ やるなあ？ ちゃんと続けてたみたいで感心だな！ ……だが、他はどうか？！」

ダッ！

と、瞬動を用いて急速接近。

右、左、とジャブを繰り返す、

「シッ！」

下から掬い上げるように本命のハイキックを右側頭部目掛けて放つ。

ゴッ！

「ッツとに、なんて威力の蹴りですか！」

タカミチは紙一重でジャブを回避し、ハイキックを腕を上げることによってガード。そのままガードした腕で足を取り、空中に投げ飛

ばす。

「お返しですッ――！」

居合い拳のような拳圧を飛ばすのでは無く、圧縮した気を拳に乗せて放ってくる。

「舐めんな！」

俺は虚空瞬動でその場を離脱。

一旦距離を取り、再びタカミチと向かい合って仕切り直す。

「まったく、マジでつえーな。拳のキレがハンパないし、体術もかなりの練度だ、それにまだ奥の手があるんだろ？ ……タカミチ、本当に強くなったなあ、嬉しいぜえ」

一撃の重さはバカ弟子一号のラカンには届かないが、拳のキレと速度はラカンと比べても遜色が無いくらいだ。体術もかなり出来るようだし、これでまだ咸卦法を使っていないのだから、咸卦法を使えば更に強く速くなるだろう……昔鍛えた弟子が此処まで成長したことが嬉しい。

……最早完全に原作より強くなったな。

「僕もまだ本気で無いとはいえ、貴方とこうして渡り合えることが出来て嬉しいですよ。……さて、そろそろウォーミングアップは終わりにして本気で戦うとませんか？」

言いながらタカミチは自分の戦装束であり、トレードマークであるスーツの上着を脱ぎ捨てる。

「いいねえ……ギャラリーも居るし、俺は明日から副担人をしなくちゃいけないしな、とっとと終わらして帰って寝させてもらうぜ？」
力を抜いて臨戦態勢に入る。
此処まで本気になるのは久々だ……

膝を軽く曲げて重心を落とし、踵を上げ何時でも踏み込めるようにする。

これは自慢だが、俺の構えは様になっていると思う。
寧ろ600年間やり続けて出来なかったら俺は泣く。

俺が構えたのを見てタカミチは嗤う。

嗤いながら両手を下ろす。

そして――

「左手に魔力――」

呪文を詠唱出来ない体質故に、今まで殆ど戦闘に使用しなかった魔力を左手に集め――

「右手に気――」

魔法が使えないが故に、愚直なまでに鍛え続けて来た努力結晶である気を右手に集め――

「――合成、咸卦法ッ――！」

——その二つを混ぜ合わせる。

爆風と共に発動するのは、相反し合う「気」と「魔力」を融合させ、体の内外に纏って強大な力を得る高難度技法。

肉体強化、物理・魔法防御、加速効果は単なる「気」や「魔力」によるものよりもパワーアップし、耐熱、耐寒、耐毒その他諸々の効果も得られる「究極技法」——

アルテマ・アート

——名を、「シンタクシス・アンティケイメノイン 気と魔力の合一」。

その、咸卦法とも呼ばれる世界でも数える位しか使い手の存在しない技を発動したタカミチは、本当に楽しそうに嗤っていて、俺も思わず笑ってしまう。

もはや警備の為の実力を見せるなど頭から消え、ただただ今この時の闘争を楽しむ事だけを考える。

だから俺達は——

「——行きますッ!!」

「来いやぁッ!!」

——真正面からぶつかった。

side out

side Takamichi

ゴツツツ!!

二人が瞬動で移動し、お互いの拳が相手の顎を撃ち抜かんと放たれ、同時に着弾してクロスカウンターとなる。

「ペッ」

弾き飛ばされ、口の中が切れて溜まった血を吐き出しながら十夜さんを見る。

僕と同じく弾き飛ばされた様だが、大したダメージを受けることなく立ち上がっている。

あははっ!

流石ですね……完璧に顎を捉えたと思ったんですけどね……まるでダメージ無しですか……

いや、元から種族として肉体のスペックが桁違いなのは分かっていた。

更に相手は600年の経験値を持つ十夜さんで、自分と同じ様に食らったかに見えて、その実当たった瞬間に打点をずらし、弾き飛ば

された時も自分から後ろに跳んでいた。

それは正に達人と呼ぶに相応しい……

まだ百にも満たない僕とは比べ物にもならない……きっと勝てないだろう……だけど……楽しい。

自分よりもパワー、スピード、テクニク。更には気の量、魔力量も莫大。

総てを兼ね備え、其れでも慢心する事なく研鑽しつづけた600年の経験値。

正に怪物にして化物。

不死の王にして拳の皇帝。

対する自分は凡人。

魔法は唱える事すら出来無い。

かといって神鳴流のように多彩に気を扱える訳でも無い。

有るのは師から受け継いだ居合い拳と、愚直に鍛えた身体のみ。

圧倒的不利。

笑っちゃう位に絶望的。

………ただ。

だけど嬉しい。

圧倒的な壁。

上が見えぬ程の高い壁。

だがその壁を超えた時、自分は新たなステージに立つことが出来る。

…… やってやる。

やってやるよッ！

今より放つは自分の切り札。

地力が圧倒的に負けているなら持久戦は不利。
故に短期決戦。

構えは何時も道理にポケットに手を入れ、自然体に。
そして手を抜き手の形に。

大戦の時に言われた「ガトウさんを超える」ための拳。

感謝の正拳突きが可能にしたスピードをもってして完成した自分の
”究極の一”

放つは一撃、全てを貫く疾き槍。

”豪殺居合い拳”のような面ではなく点。

範囲は狭い。

されど威力は桁違い。

咸卦法をあえて乱し、弾け飛びそうなのを力づくで抑える。
気と魔力の反発力を利用し、それはさながら超電磁砲^{レールガン}。

「十夜さん。今から自分の”究極の一”を撃ちます」

ニヤリと不敵に笑う十夜さん。

「イイぜ、遠慮なく来な。其れすら打ち破って俺が勝つ」

……上等。

「行きますッ!!」

僕の努力の結晶……そう簡単に受けれると思わ無いで下さいよねッ!!

「貫ッ殺ッッ 居合い拳ッッッ!!」

ポバッ!!

空気を切り裂き、放ったのは一本の槍。

地面を砕かず滑らかに決り取りながら進む愚直な槍。

自分の、自分だけの一撃。

その一撃を十夜さんは……

side out

side Toya

ゴガッ!!

ビビった。

てつきり来るのは豪殺居合い拳ぐらいだと思ってた。

だが来たのは抜き手での居合い拳。

面での制圧力より点での殺傷力を狙った一撃。

咄嗟に両腕を前に出してガードして防ぐことが出来たが……

「久々だなあ、おい？」

結果は左腕がイカレて千切れる寸前。

自分が此処までダメージを受けたのは久々だった。

「成長したんだな……」

なら敬意を表して俺も撃つ。

ダッ！

「抹殺のおおオオオー」

と、駆け出しながら右腕を腰だめに構えて気を収束する。

タカミチを殴る直前に背中から気弾を放つ要領で気を放出。

ボバツという音とともにさらなる加速をし、そしと肘からも気を後ろに放出して更なる加速。

正に後のことを考えぬ渾身の一撃。

ゴアッ！！

「ーラストブリットオオオオオ」そこまでじゃッ!!」オオオッ
ッッ!？」

俺の拳が今正にタカミチのアゴを砕かんと迫った時にジジイのこえがした。

俺は慌てて動きを止める。

タカミチの僅か一c m前で止まる拳。

ブアッと、数瞬遅れて暴風の如き拳風が吹き荒れた。

……あつぶねゝ当たったらタカミチ死ぬじゃん……

内心ホッと胸を下ろしながらジジイの方を向く。

「フオッフオッフオッフ。顔見せて死人が出るのは勘弁じゃぞ十夜くん?」

「ぐっ! ……スマン熱くなり過ぎたな」

反論できねえ……

「流石に死ぬかと思いましたよ十夜さん……」

タカミチがややゲッソリしながら言ってくる。

「悪かったってば……」

「フオツフオツフオツ！……さて、みなも十夜くんの実力は分かったかの？ 彼はこれから同僚なんじゃし、無用な争いを起こすでないぞ。イイかの？」

ヤバいなあ久々に怪我して疲れた……

明日も学校があるし寝たいなあ。

「……今日はこのぐらいにしておくかの。皆の衆、引き上げじゃ」
よし帰って寝るぞ！

s i d e o u t

s i d e K o n o e m o n n

あえて十夜くんを貶める発言をし、その後十夜くんの実力を見せつけることによつて「予想よりも強力だ。暫くは手を出さないでおう」という風に誘導するつもりだったんじゃが……

「まさかあれ程とはのう……」

それでも全力ではないだろう。
全く底が見え無い。

彼が学園の警備をしてくれるならこれ程心強いものは無い。
しかし、万が一にも敵になるようなことがあるなら……

「ヤバいかもしれんのう……」

そうならんことを祈ろうかの……

儂は知らずに出していた汗を拭いながらその場を後にした……

第六話、タカミチVS十夜 闇夜の拳劇！（後書き）

さーせんしたツツッ！！m（――）m
久々です鳴る神です。

えゝ四ヶ月ぶり？ ですかね？

携帯が壊れたり親戚死んだり資格試験に定期テスト、しかも新しい携帯はうちにくいし……

……ハイ、言い訳ですぬすみません。

まー復活しましたが、ペースは確実に落ちます。
就職探さねーといけないんで……
ヒマがあれば随時つてことで。

今回の更新も駄作で駄文ですな。
久々に書いたし苦手なバトル……ヤヴァイですね。
期待してた方ゴメンなさい。

そういえば

PV3,000,000、ユニーク410,000人、お気に入り
2000突破しました。

（：――）。。。

あれ？ 増えてる？ こんなに？

ワイウレシイナアハハハハハハハ……

……ゴメンなさい。

第七話：夜明けの初授業！（前書き）

こっそり投下。

なんだか中途半端です。

短い……

よろしければどうぞ。

第七話：夜明けの初授業！

side 十夜

警備員の顔見せから一夜明け、ガンガンと痛む頭を抑えながらエヴァ、茶々丸と麻帆良女子中に登校する。

「おおぅ……頭の中で鐘が乱れ打ちだぜえ……」

「クッ、私もだ……」

隣のエヴァも同じく頭を抑え、若干フラフラしながら同意する。

「お二人とも常人なら急性アルコール中毒になってもおかしく量を飲まれてましたから……どうぞ、お水です」

サッと、茶々丸が水筒の水をコップに注いで渡してくれる。

正にかゆい所に手が届く心配り、メイドー！従者の鏡だな！

「ありがたい……ほらエヴァも飲め」

コップの水を半分飲み、残りをエヴァに渡す。

「むう……」コクコク

きゅぴーんっ!!

「（茶々丸ッ!）」

「（ハイツ!）」

瞬時に茶々丸とアイコンタクトを交わし、素早くーかつ静かにエヴァの隣から外れる。

そして茶々丸が両手でコップを持ち、朝の眠気+二日酔いで辺りを警戒せずにコクコクと水を飲むたれたエヴァ……

略して”たれ?あ”をデジカメも真っ青な画質を誇る両目で様々な角度から激写する!

「（コクコク……）……ぷはあ。む、どうした二人とも?」

「「いいえ、なにも」」

完璧にシンクロして返答する俺達。

答えながら俺はさり気なく元の位置に戻り、茶々丸は微妙に目を逸らして撮影モードから通常状態へ移行する。
これぞ正に阿吽の呼吸ッ！！

今！ 言葉を交わさずとも俺と茶々丸は一つになったッ！！

「？ ならいいが……」

それだけ言つと酔いが覚めたのか、先程よりもしつかりとした足取りで歩き出す。

それを横目で見ながら俺と茶々丸はアイコンタクトする。

「（茶々丸、首尾はどうだ？）」

「（斜め、正面、横、全方向からアップに全体像まで各20枚程撮影いたしました。）」

「（素晴らしい！ いい仕事だな）」

「（感謝の極み）」

会って間もないが、まるで長年連れ添った主従。
茶々丸とはあらゆる面でいい関係が築けそうだ。

「おい！ どうした？」

おっと、ウチのお姫様が呼んでんじゃん。

「茶々丸、これからも頼んだぞ」

「はい。こちらこそ宜しくお願いいたします」

茶々丸がぺこりと礼をした後ガツチリと握手し、二人でエヴァの所へ向かう。

天気は快晴！

そして今日は俺の初授業。
はてさて何が起きるのやら？

s i d e o u t

side 明日菜

次の体育の授業のために体操服に着替えながら昨日のことを振り返った。

ガキンちよが魔法使いで、服を脱がされて、バレたらあいつがオコジヨで、高畑先生にパイパンだと思われたり……

はあ。

「よく考えたら全部あいつのせいじゃん……」

昨日の事を振り返り、その原因を思い出して軽く鬱になる。

なんだかんだで何故か私達の部屋にガキンちよが泊まる事になったやつたし……

最近いい事ないなあ、私。

少し憂鬱になりながら着替えていると、少し離れた所から話し声が聞こえた。

「蒼埜先生の授業ってどんなだろねー」

「初日に見せた体捌きはただものじゃなかたネ！」

「だよね！　こう……シュババツ！　って感じ？」

「そのような御仁の授業は楽しみでござるなあ……」

あつ。

聞こえてきた声で思い出す。

そつえば今学期から蒼埜先生が体育の先生なんだ……

蒼埜先生……ガキンちよと同じく昨日入って来た先生。

ガキンちよに出された問題を答えられずにバカにされたときに庇ってくれた人。

なんだか目つきは悪いけど話してみるとそんなことは無くて、なんだか高畑先生よりも渋い空気を纏ったよくわからない人。

あの人の授業がどんなものかとてもワクワクする。

得意な体育だし、ちよつといい所をみせたくなってきた。

「アスナー？　どないしたん？」

「えっ？ な、なんでもないわよ！？」

隣で着替えていた木乃香に声を掛けられて思わず叫んでしまう。

「ほか？ ならえんやけどなー。そろそろいこやー」

「あつ。待つてよこのかーっ！」

よし！

今日はちよつと張り切っちゃうからねっ！

s i d e o u t

s i d e 千雨

体育館でマット運動。それが今の授業のはず。

しかし今目に映るのは……

「セヤッ！」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！？』

この常識を何処かにぶっ飛ばした麻帆良。

何故か誰もツッコまないことに異常を感じながらも、日々一人でツッコミながら奴らにストレスを溜めていた。

そこに新しくやってきた数えで十歳のネギ先生と。

双子のトラップを余裕で粉碎し、蒼い短い髪を逆立てスーツを着崩した目つきの悪い……ヤクザ？ の蒼埜先生。

……OK。

蒼埜先生はまだいい。

もしかしたらトラップを余裕で回避できるほど程運動神経がいいかもしれないし、目つきが悪いのは生まれつきかもしれないし、スーツの着方は人それぞれだ。

が、しかし。

もう一人はだめだろう……

十歳？ 法律はどうした！？

おかしいのか！？ 私がおかしいのか！？

また一つ粉碎された私の常識を嘆きつつ、迎えた蒼埜先生の初授業。
見た目はともかくあの人はまともそうだし、いつもどおり軽く流そうとした体育の授業。

しかし双子筆頭に、見本を見せろと騒ぎ出す2-A。

蒼埜先生はこれを了承。

そして始まった見本なんだが……

「まだまだあッ！！」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！』

目の前で繰り広げられる蒼埜先生のもはやマット運動を超えた曲芸の数々。

その場でバク転をし続けたかと思えばいきなりブレイクダンス。

既にみんなスゴ過ぎて何が何だか分からなくなってきた、もはや興奮することしかない。

前にテレビで見た新体操のレベルを超越したように見えるのは私だ

けか？

というか何でこんなすごい人が先生してんだよ！？

周りもなんか反応しろよ！？ おかしいとは思わないのか！？

苦悩する私をよそに、ますますヒートアップしていく演技。

動きは速くなりより、ダイナミックに。

もはや

「これで……フィニッシュだー！」

ダンツと蒼埜先生はその場で一際高く飛び上がり、空中で五回ほど体を捻りながら回転して着地した。

『すーっーいつっ！！！！』

「す、垂直五回転宙ひねり……」

瞬間爆発する歓声。

いやすごいのは分かるけどさ！？

垂直五回転宙ひねりっておかしくないか！？

あんなのプロでも無理……ってか、人間には無理だろ！？

「ね。簡単でしょ？」

私の嘆きも虚しく、笑顔でそんなことをのたまう蒼埜先生。

「（無理ですから！？）」

常識人だと思っていた先生が実は一番常識外れだった。
ああ……こうしてまた一つ私の常識が消えていく……

ここは麻帆良学園。

学園外の技術とは一線を隔す超技術が存在し。

世界記録を容易く塗り返す超人が跋扈し。

果ては森羅万象を操る魔法使いが治める土地。

——ここに普通は通用しない——

第七話：夜明けの初授業！（後書き）

”たれ？あ”よくない！？
たればんだにも勝てるね！

私は今年就職ですので、ただでさえ遅い執筆が更に遅くなります。
すみません……

よろしければこれからもよろしくお願いします。

報告、アンケート

すみません。

更新じゃないです。

どうもダメ作者の鳴る神です。

〵とことん引ッ掻き回しに来た〵

〵とことん引ッ掻き回しに来た〵異世界訪問録

魔法騎士バラム列伝 〵帝国の騎士〵

DOD憑依転生異世界巡り。

……… どのいつもこいつも詰まりました。

特にネギま関連。

原作が何だか最後の最後で物語の根幹がガラガラと……

終盤はかなり強引なご都合主義+超展開でしたねー

正直、ネギま愛が薄れてきてます。

DODは正直主人公をやりましたし、とことん引ッ掻き回しに来たシリーズは使わない能力とかをつけ過ぎたり……

昔の勢いだけで書き上げた穴だらけの処女作達ですが、書いてた時はとても楽しかったです。

そこで、

今ならそこそこ技量も上がりました。

設定もうまく練れるつもりです。

最早つじつまを合わせるだけで精一杯な文より、心機一転新しく書き直した方がいいんじゃないかと思いました。

なのでアンケートです。

1 新しいの書きちゃえよ（希望も）

2 昔の書き直せボケッ！（題名も）

3 今のを続けろよ、このカス（題名も）

ちなみにこのダメ作者。

今、新作でカンピオーネ！ のオリ主ものが4、5話書いてあります。

アンケートが無い場合は

〽とことん引ッ掻き回しに来た〽

〽とことん引ッ掻き回しに来た〽 異世界訪問録

DOD 憑依転生異世界巡り

の更新は恐らく無いかと。

魔法騎士バラム列伝はもしかしたら〽ってレベルです。

ダメ作者でした。
すいません。

報告、アンケート（後書き）

二月三日。

アンケート締め切りました。

結果は

1、 2 2 票

2、 1 1 票

3、 1 9 票

です。

みなさんありがとうございました。

1で決定といたします。

少し書きダメしてから投稿いたします。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9249i/>

～とことん引っ掻き回しに来た～

2011年2月8日19時50分発行